

¥1800

風俗奇譚

〈男女性風俗の粒より話題の探究〉

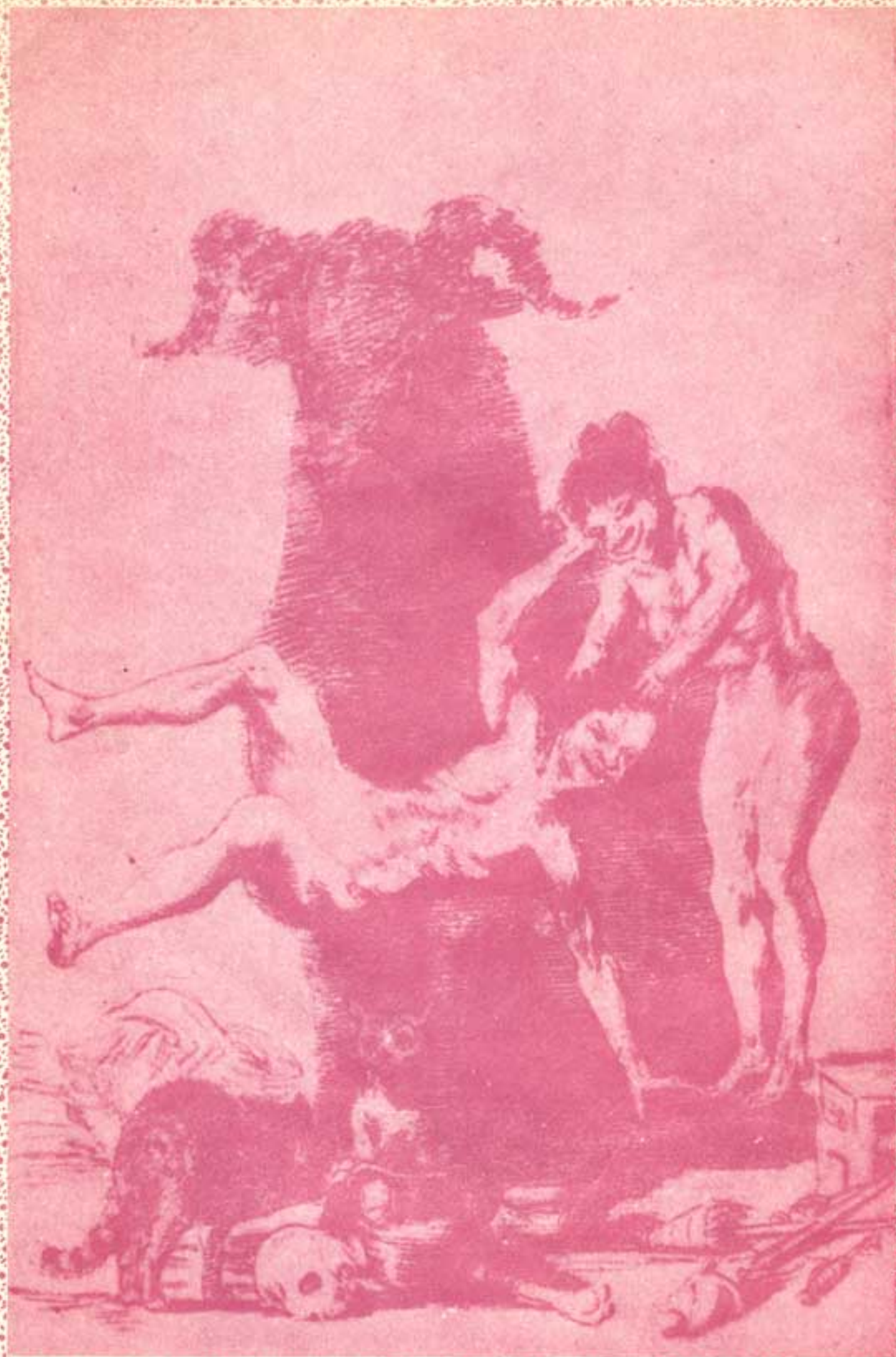
特集マゾヒストの世界
悦虐サディスチック読み物集

3月号

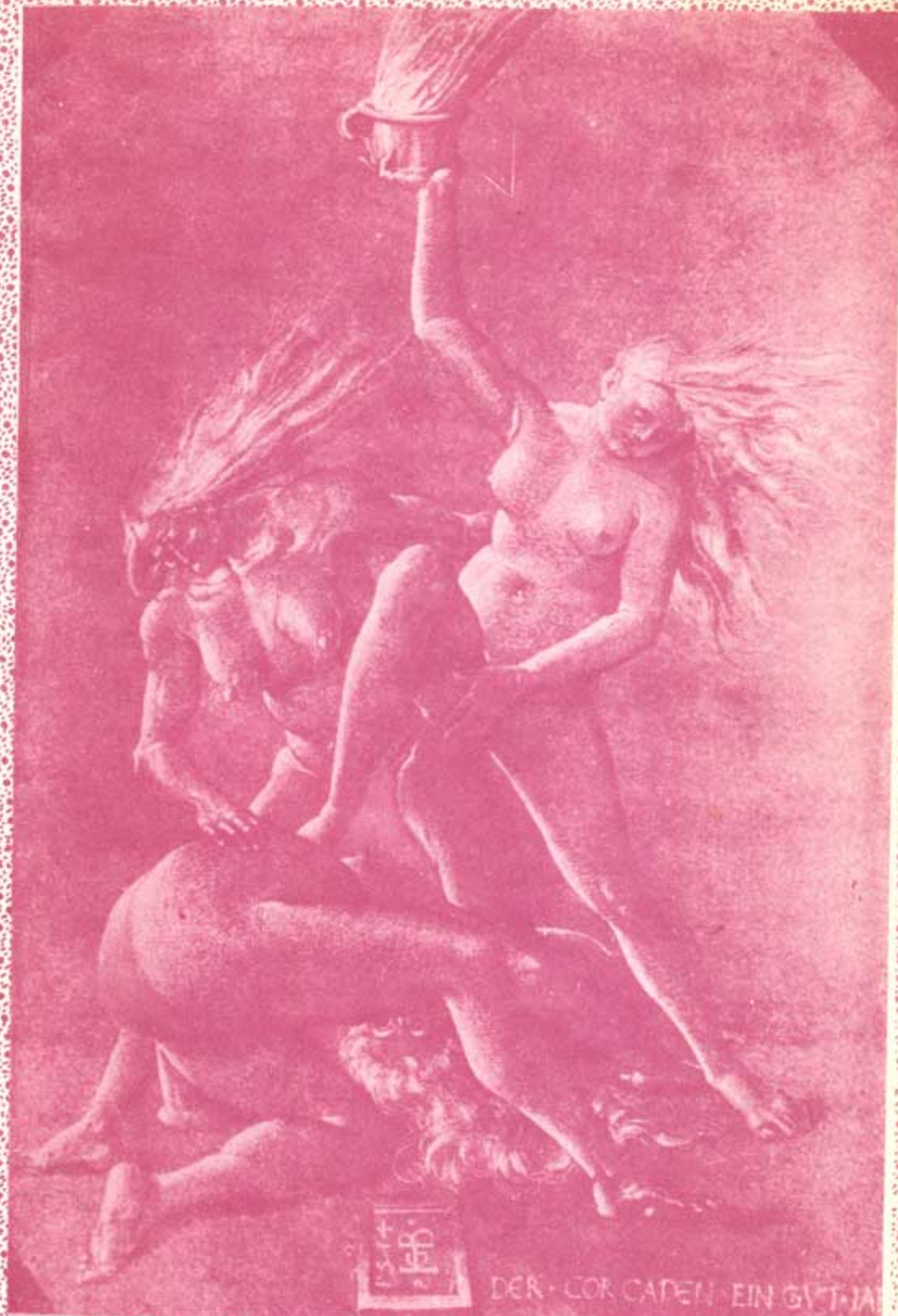
風俗奇譚

昭和36年3月号

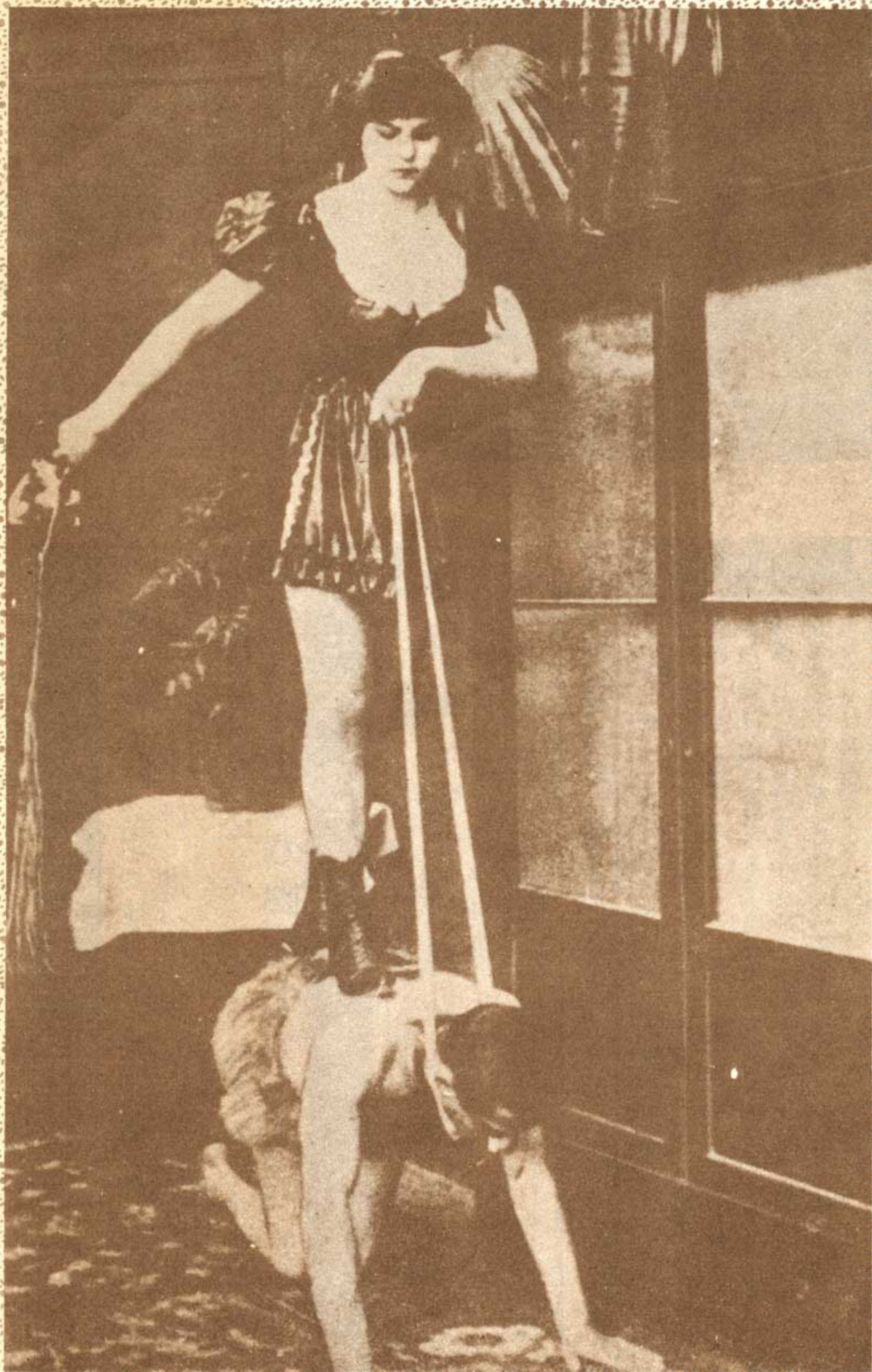
定価150円



フランシスコ・ゴヤの『処刑』(1808年、原作「狂気」より)



H・B・グリーンの『魔女』(1510年)



動物化願望マゾヒストの実況（ヒルシュフェルト性科学博物館所蔵）

表紙……………土居啓子
さし絵・カット…江馬美久
小田利美
田上恵子



特集・マゾヒストの世界

(巻頭言) マゾヒストの世界……………奥村世紀男(五)	マゾでんすけ地獄……………獅々村裕(三)
赤禪斬り込み隊……………芦立鋭吉(四)	戦争残虐4つの物語……………菅良太(四)
毛皮を着たヴィナス……………ザッヘル・マゾッホ(九)	K氏自虐帳……………百田章治(四)
黄金色のご馳走……………椎名喜作(六)	☆サロン・マソキスチカ……………(六)
マゾヒストの手紙 ^⑨ ……………谷貫太(六)	

(多色口絵) 雪の露台……………(折込)

グラビア

雪と女……………(三)	古風な雰囲気……………(三)
雪にころがされて……………(三)	テーブルの上の裸女……………(三)
凄艶切腹の図……………(四)	乳房を縛る……………(三)
制服椅子責め……………(六)	足を責める……………(三)
裸身ながながと……………(八)	呪縛の姿勢……………(三)
なまめかしい受縛……………(三)	さかさ女……………(三)
ころがされた縛姿……………(三)	

〈モデル〉村上ユキ・西牧えり子・風早由美子・さつきみち

妖異の世界

乳房・尻・頭髮フェチシズム……………(五)	サディストの使用したムチ……………(五)
職業サディストの女が用いた処刑台……………(七)	長靴を捧げて礼拝する女たち……………(七)
変わり種二輪の名花……………(四)	あたしの「女形」……………(三)
(女体) グラインダー地獄・また裂き変型責め……………江馬美久(四)	(責め絵) 車責め・納屋の首吊り・あやつり責め……………田上恵子(六)
妖美なる「野郎たち」……………かびや・かずひこ(二)	☆ホモの窓……………(二)

私の女装 一日だけの看護婦……………佐藤千鶴子(二)

☆女装愛好の部屋……………(三)

私の「女装」半生記……………美島弥生(八)

コルセット・フェチシズム8景……………G・シュミットほか(三)

白亜楼血の紅白試合……………志乃田藤美(三)

☆読者サロン……………(八)

☆編集室より……………(五)

サド青美しき虐魔……………雨妙院一太(五)

怪奇神よ、くたばれ……………北潤(二)

小説サドスライ 大都会の夜の底で……………青山三枝吉(六)

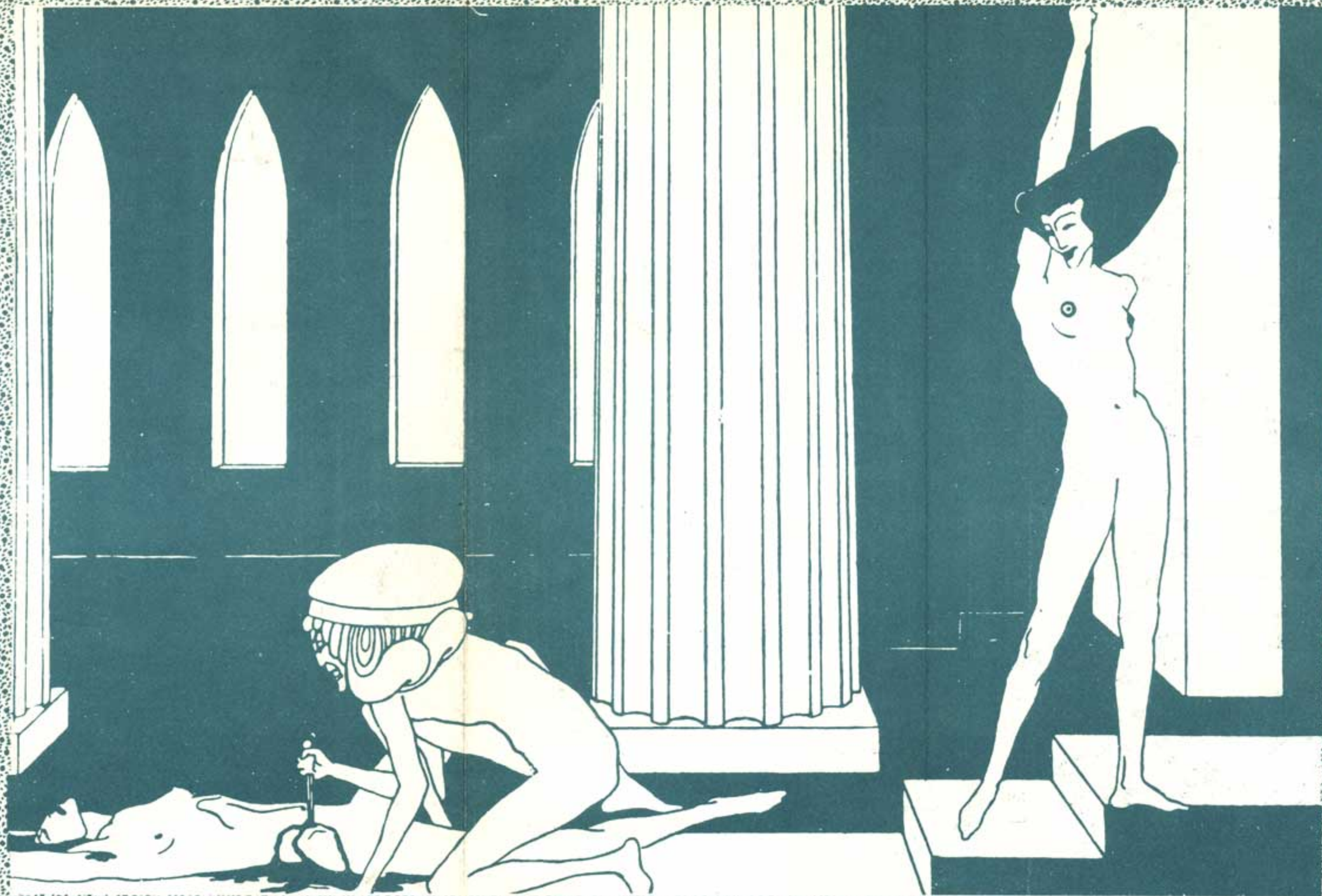


“教育について”（ある鞭打小説のさし絵）

雪の露台



雪の露台の情景は、雪の冷たさが身にしみとおり、
からだの奥までしわしわ凍らせる。(モデル・村上ユキ)



ヒプクレイ・演劇・ガラソ・の一場面



雪と女

吹きだまりの雪の中で 荒縄にくぐられ からだにしみとおる寒さ 〈モデル・村上ユキ〉





雪にころがされて

どんなお仕置きも これほどつらくはないだろう 雪責めの寒さ冷たさ それ
を耐えれば からだじゅうがしびれて感覚を失い 凍傷の危険にさらされる



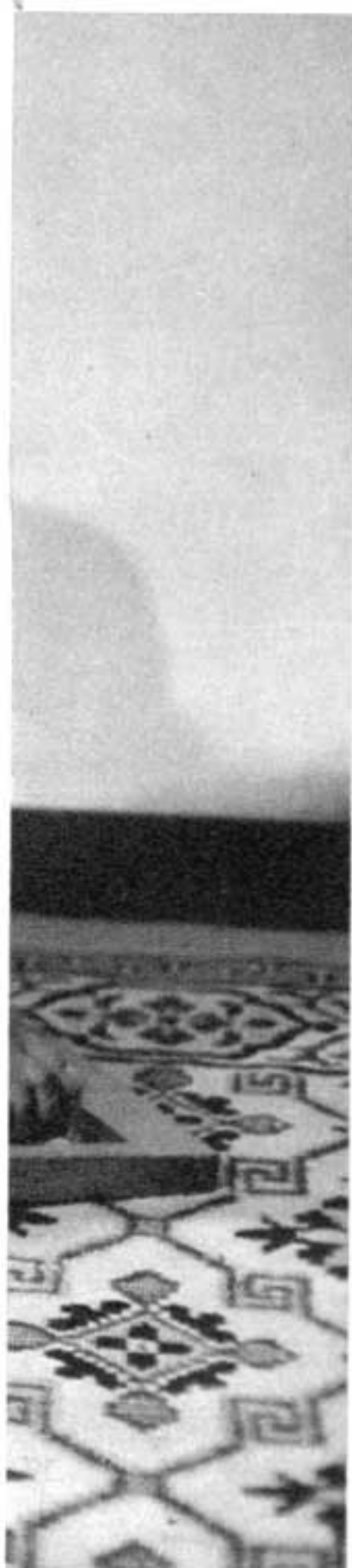
凄艶切腹の図

はだけた白肌が つややかに光り 豊麗な乳房が 陶器のようにかがやく 下腹に突き刺さる刃の冷たい光

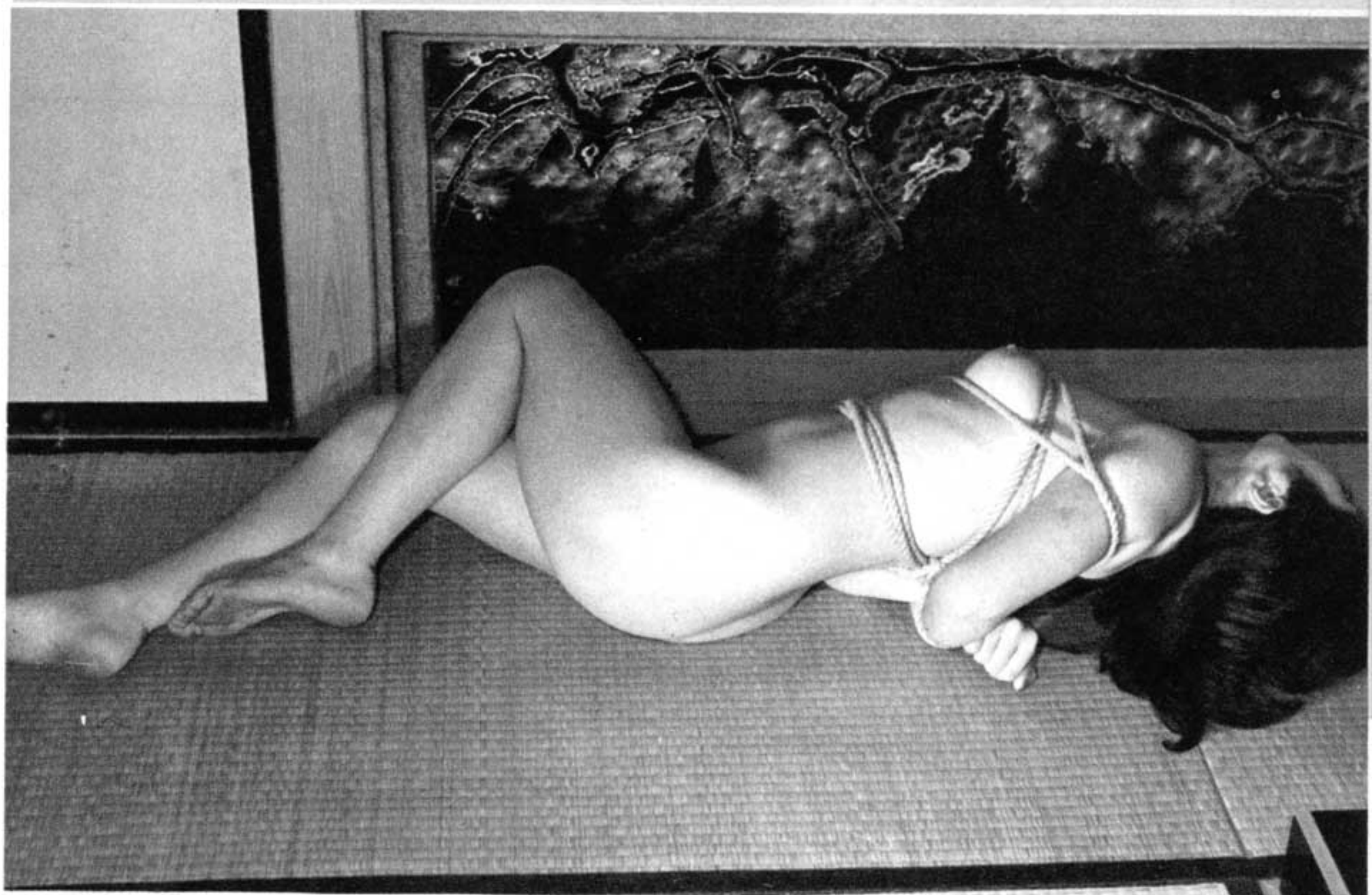


制服椅子責め

セーラー服をむきとられ 横にした
椅子に縛られて あわれ あおむけ
の少女よ 頭に血が下がり その充
血の苦痛! <モデル・西牧えり子>









裸身ながながと

全裸にむかれた女体は 羞恥にふるえ 縄目を受けて 疼痛に身も
だえする その妖しい魅力が 肌に輝き出して ああ 悦虐の姿態







なまめかしい受縛

昔から 女の色気は むき出しよりも チラ
リズムにある といわれている 緋の長じゅ
ばんもなまめかしく乱れて 乳房がこぼれ
膝がはみ出す しかもそれが 縛られている
のだから 奇妙な色気がにじみ出てくるのだ





ころがされた縛姿

うしろ手にされたうえに　ぐるぐる
縛りで〈モデル・風早由美子〉



古風な雰囲気で

江戸風の町あんどん 紙には火の用心の四文字が浮きでている 髪を乱した女は 縛られたポーズが そのまま 芝居から抜け出てきたようだ





テーブルの上の裸女

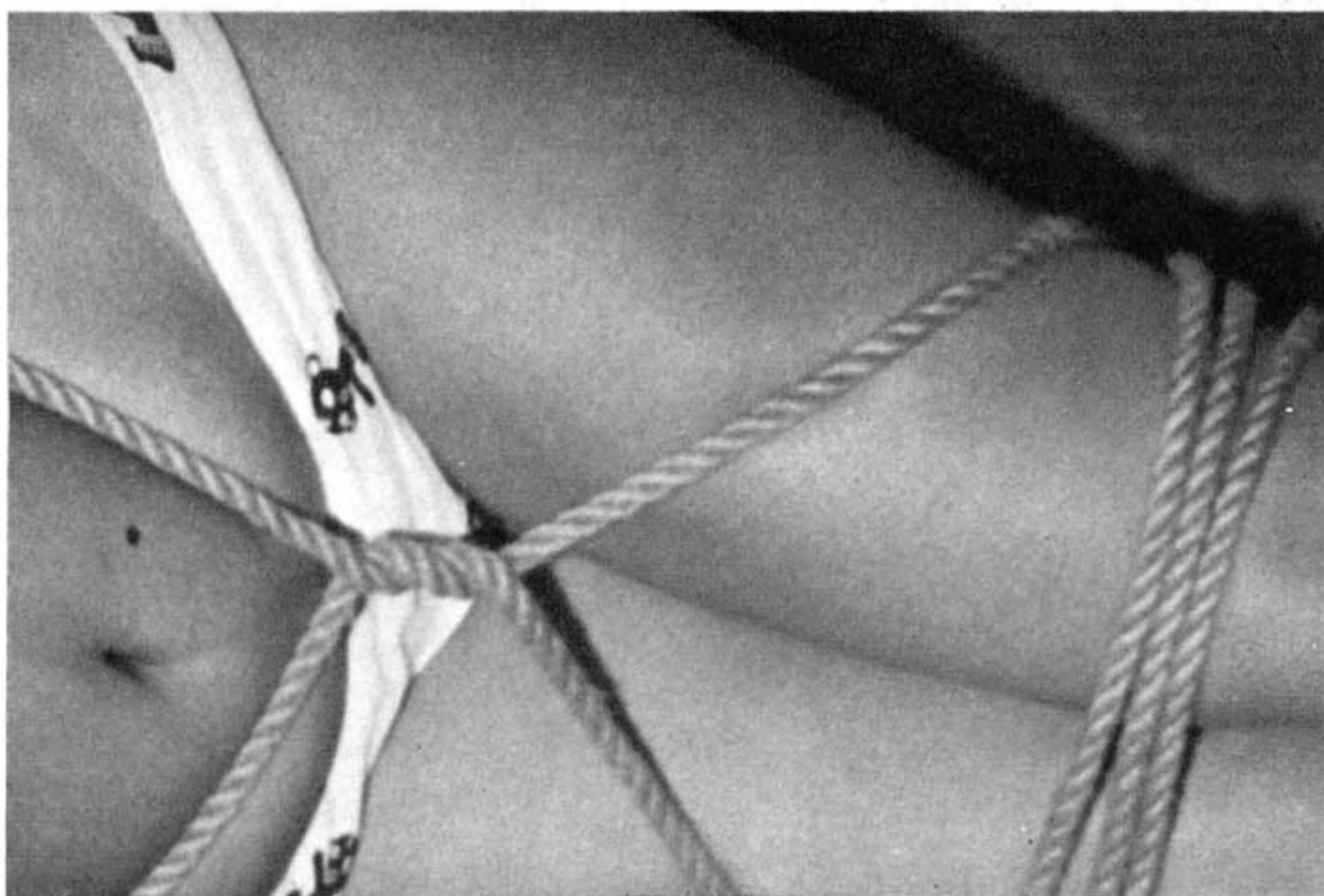
うしろ手縛りの女がテーブルの上におかれて これは なんの見せ物？





乳房を縛る

もて余すほどのボリュームの乳房を責める緊縛の縄へモデル・西条さくら





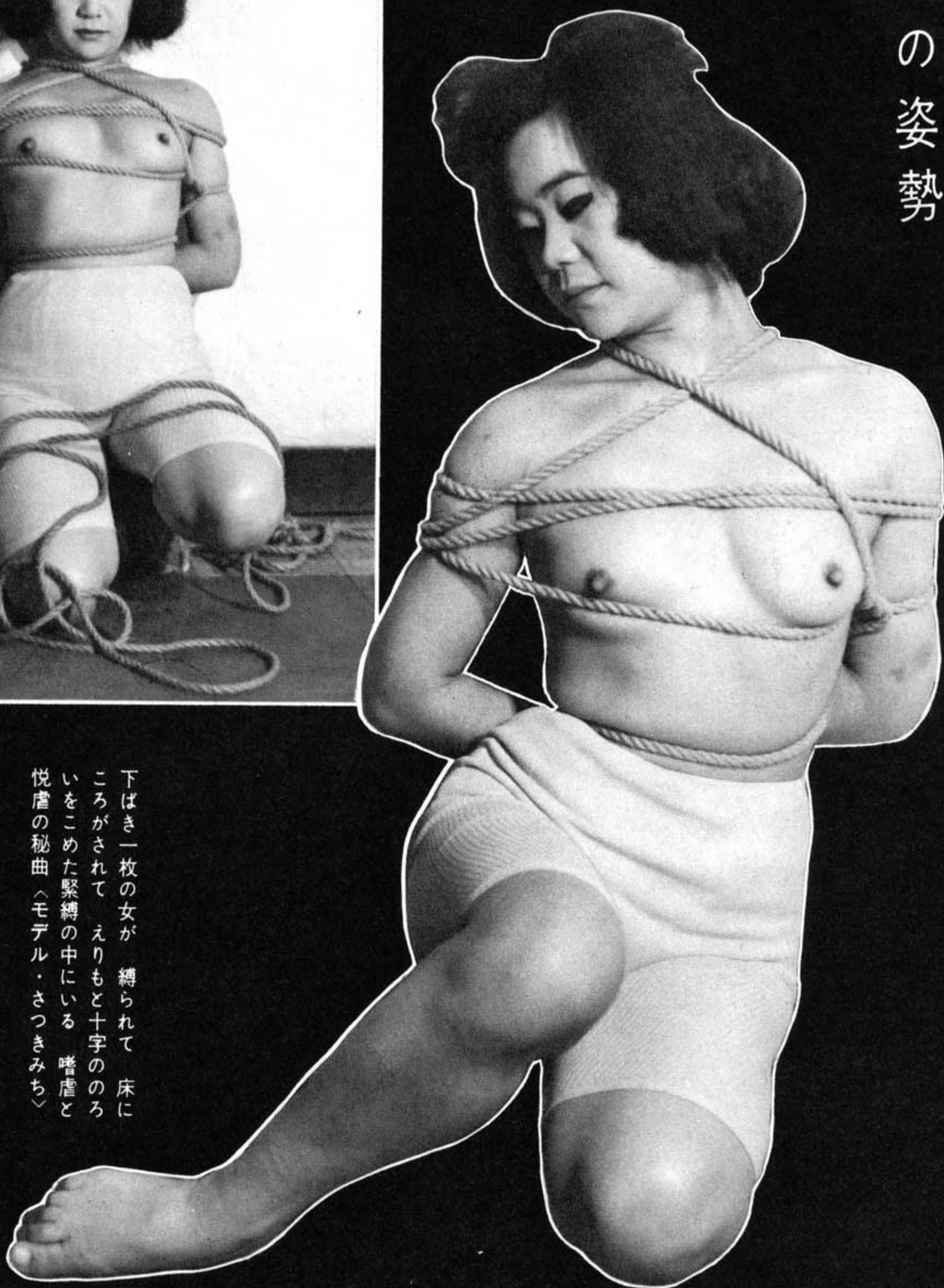
足を責める

ハダカでうしろ手に縛られ 足首に皮ベルトをひっかけてグッと引きしめ 足で踏んづける 苦痛が 女体を貫いて悲鳴がもれる





呪縛の姿勢

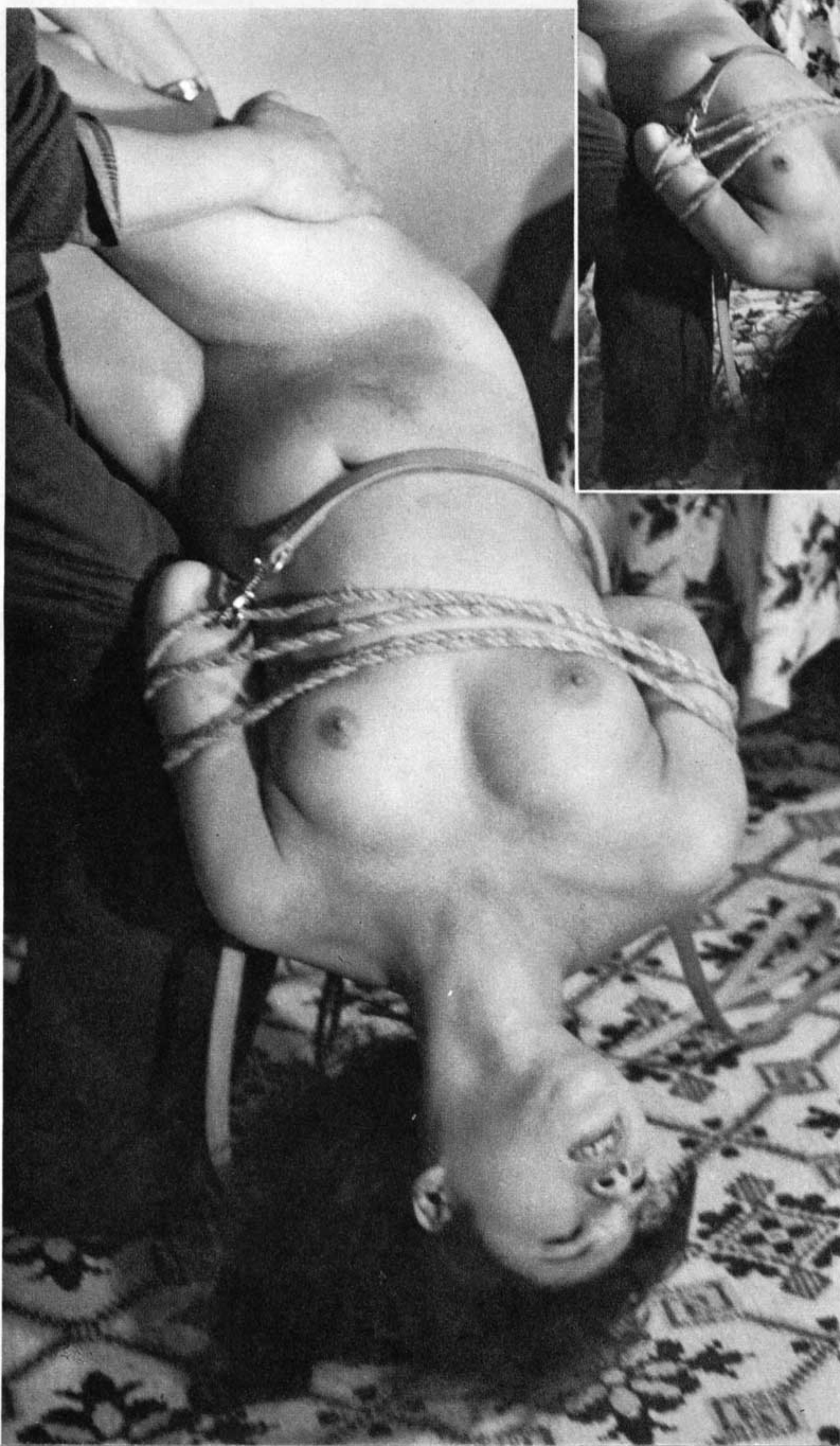
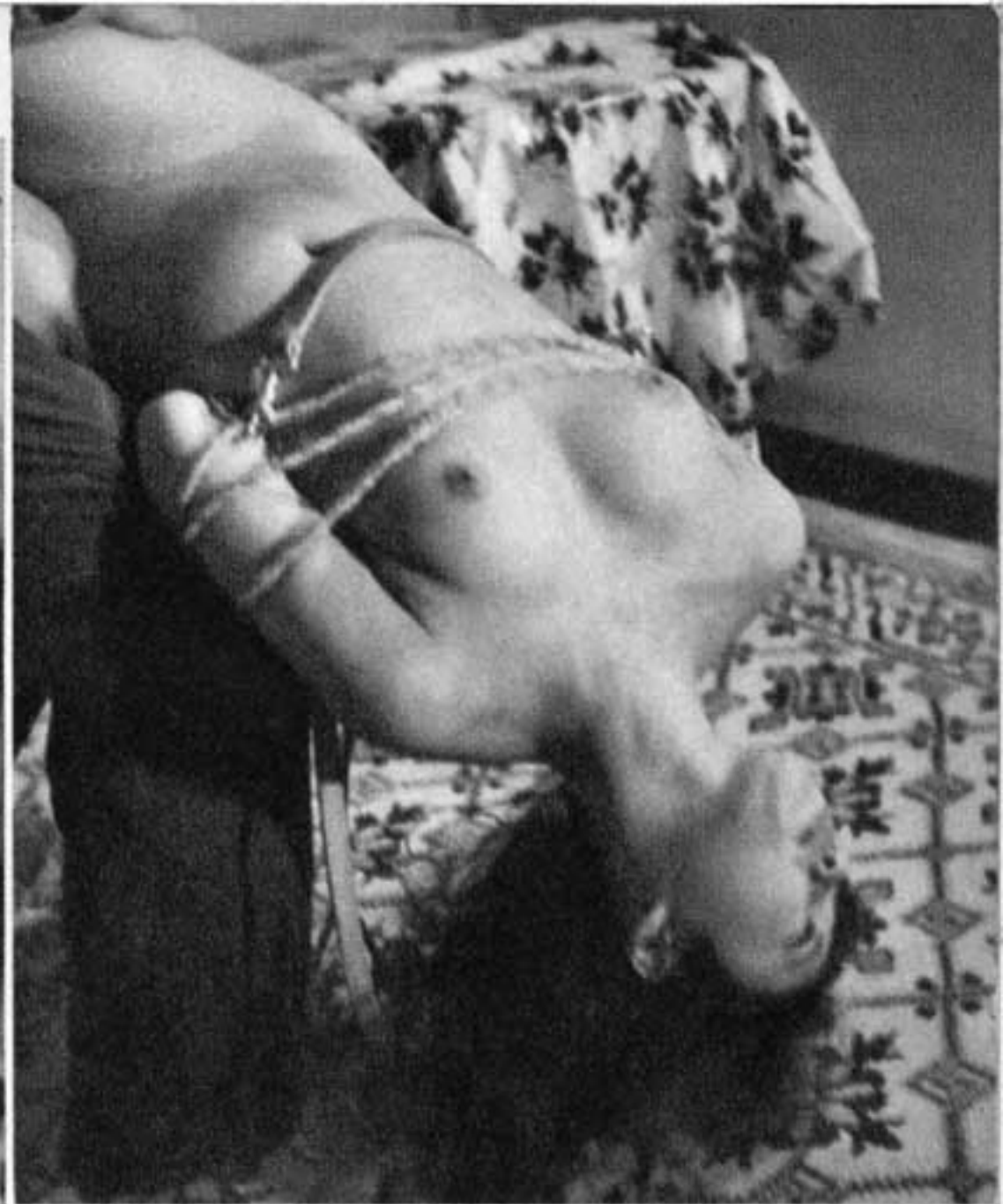


下ばき一枚の女が 縛られて 床に
ころがされて えりもと十字ののろ
いをこめた緊縛の中にある 嗜虐と
悦虐の秘曲〈モデル・さつきみち〉



さかさ女

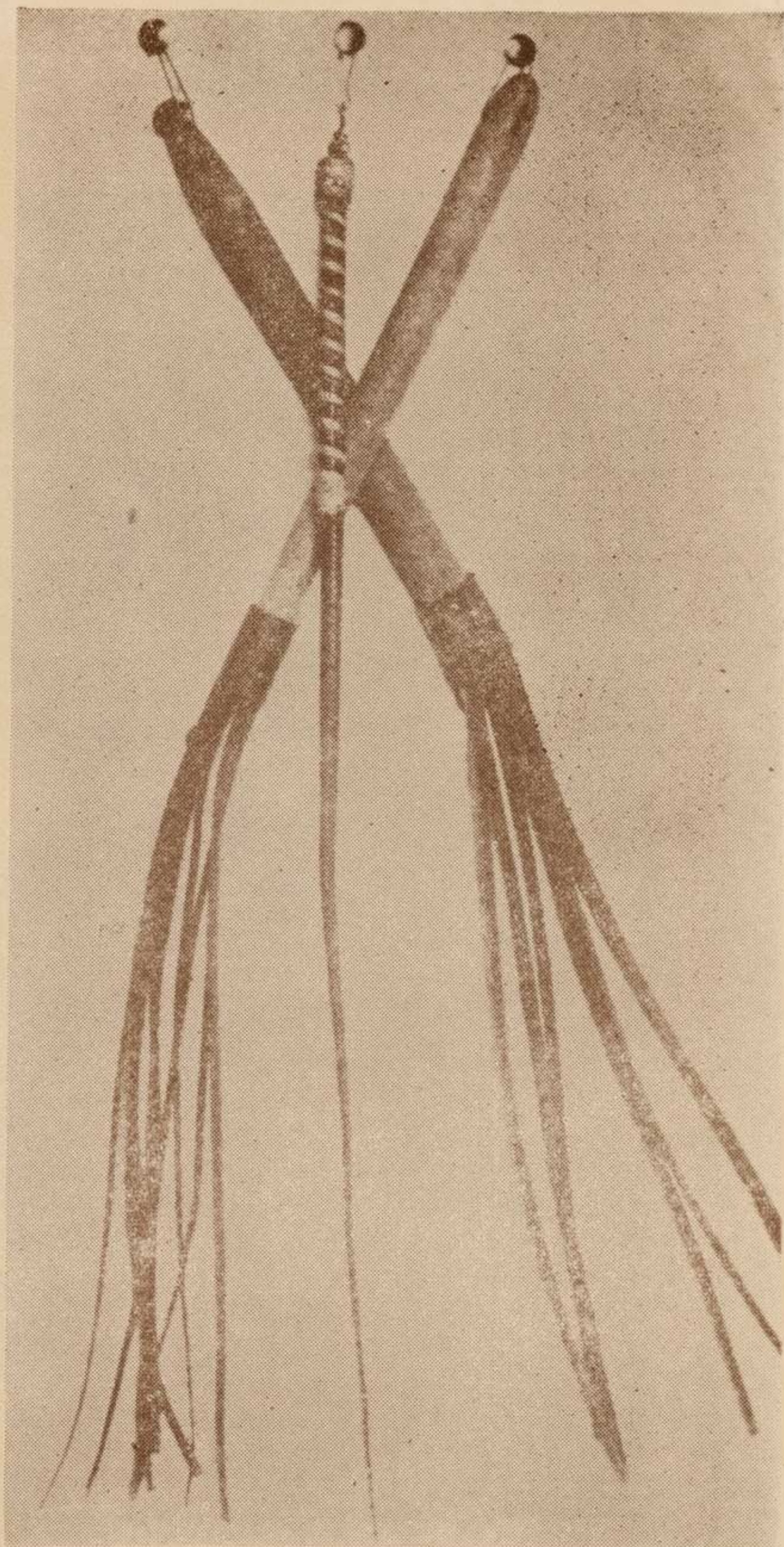
縛られた女が　ぐいと足を持ち上げられて　頭に血が
下り　やがて意識がもうろうとしてきて別世界へ昇天



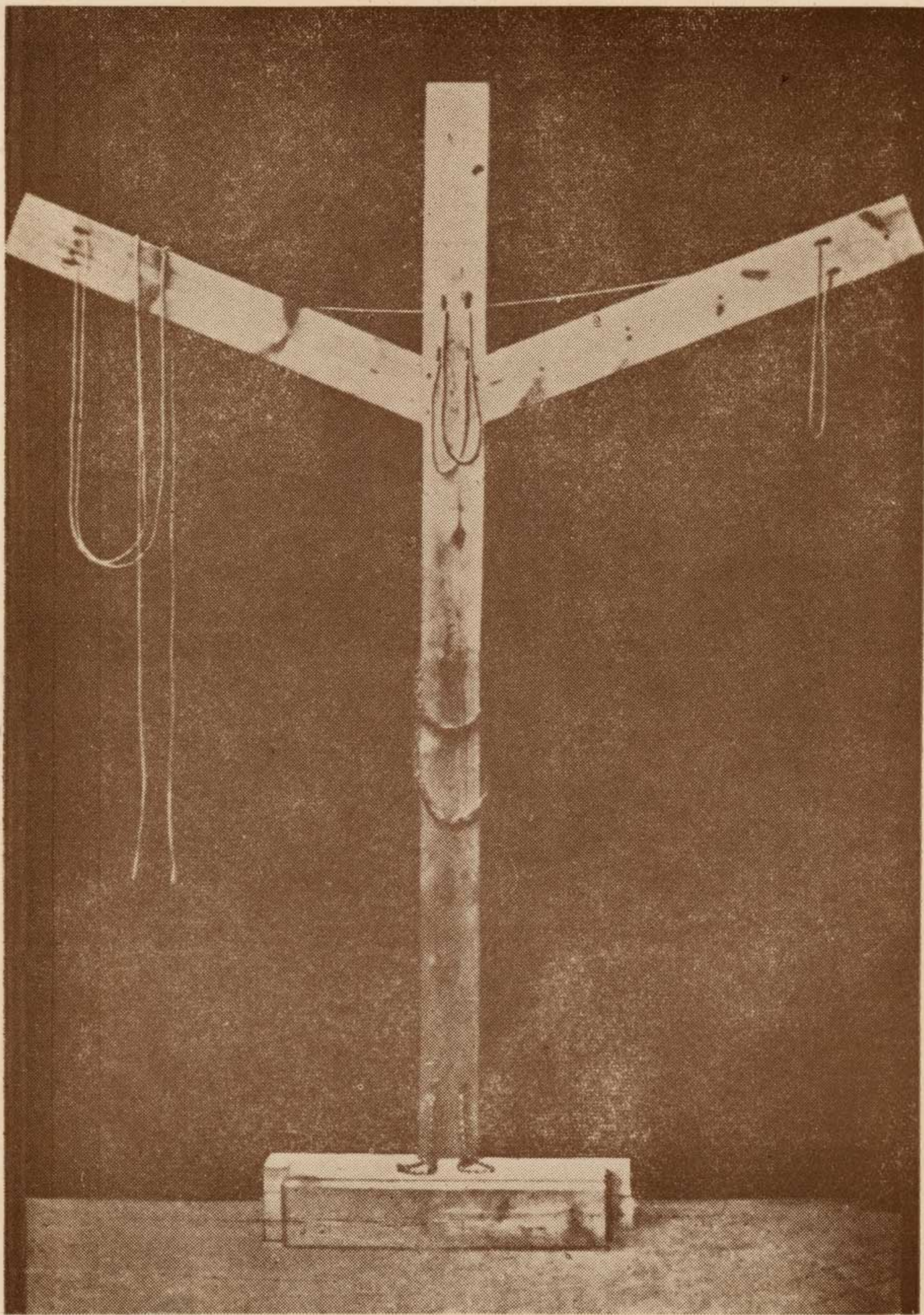
妖異の世界



乳房、尻および頭髮フェチシズムを示したパリのレス
トランのメニューの表紙（ハンス・ザックス博士蔵）



(右)サディストの使用した三種のムチ。中央は犬ムチ、左右の二本は九尾のネコのムチ。(左)職業サディストの女が用いた処刑台。いずれも、ベルリンのマグヌス・ヒルシュフェルト性科学博物館の所蔵品



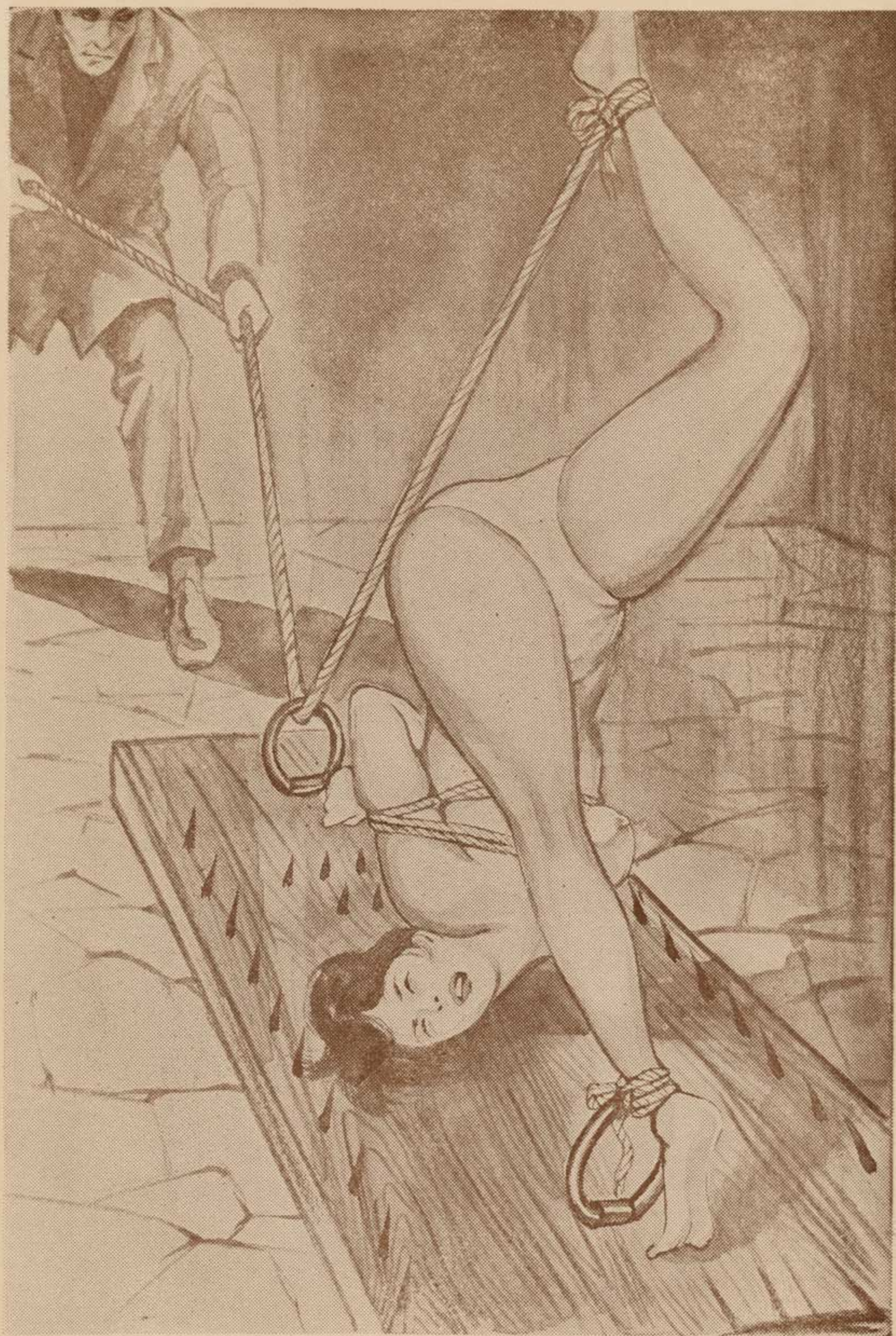


「長靴を祭壇に擲げて礼拝する女たち」（靴フェチシストの希望で描かれた作品・ヒルシュウェルト生科学博物館所蔵）





グライNDER地獄——からだをそればグライNDER かがめば蠟燭く江馬美久・え>



また裂き変型責め——片足は鉄環に もう一方を グッと引き裂く<江馬美久・え>



車責め——車輪が回るたびにももがこすれて血潮が流れる無残さ<田上恵子・え>



納屋の首吊り——手足を広げたあられもない姿で首を吊られて一夜<田上恵子・え>



あやつり責め——身を動かせば 首がしまり 乳房がしめつけられる<田上恵子・え>

譚奇俗風

1961年・3月号

マゾヒストの世界

奥村世紀男

マゾヒストとは、いうまでもなく、サディストとの対比においていわれることばである。そして、それは、異性によって苦痛を与えられ、それに堪えることによって性的快感を享受する異常性欲者のことである。

このマゾヒストは、先天的のものと、後天的のものとあるが、元来、女性を受動的な面が多いところから、女性にマゾヒストが多いと、一般に言われている。

ことに、売春生活を長くして、多くの男性に接してきた女性のなかには、ふつうの性行為では満足せず、変態的な行為で性快感を満喫しようと、マゾヒスチックに傾くものが少なくない。もちろん男性のなかにも、そういった性向をもつものもいる。

したがって、両性のうちの一方がサディストであり、他方がマゾヒストである場合、外部から見ると、いつもケンカしたり、口論したり、あるいは殴打し虐待し合って、きわめて不和に思えるのだが、事實は、熱愛の結果から生まれたもので、自分たちの肉体的・官能的な満足を得るための行為にすぎないことがある。

こういったマゾヒストにとっては、相手の異性は、サディストであろうがなかろうが、自分に性的満足を与えてくれるものであればよいのだ。だから、現在の相手よりも、さらに満足させてくれる相手が現われた場合は、新しい異性を手に入れることに努力するのは、男女間の愛情と同じである。

だが、受動的な性格から、内心では相手に飽きていても外に表わさず、がまんしている。しかもその相手は、あきたとはいえず、しいたげられるせつなには、やはり一応の満足をうるのである。しよせんマゾヒストの世界とて、人情の機微に変わりはないといって、さしつかえあるまい。

ク・ストーリー➤

争残酷4つの物語

菅 良 太

1. 股裂きになった男女

北支戦線の皇軍慰問隊のなかに、しゅくらんほう 肅蘭芳という歌手がいた。二十四、五歳で、やや大柄で、はっきりした目鼻立ちの美人で、そのころ流行した「蘇州夜曲」や「白蘭の歌」などを歌って将兵を喜ばせていた。むっちりとした肌に、エンジの縞しま子の支那服がよく似合っ
て、慰問隊の支那芸人のなかでは、圧倒的に人気をもっていた。

この肅蘭芳が、だれ言うことなく、重慶政府からの間諜スパイだといううわさが立った。慰問係の榑伍長さかきは、必死でそれを打ち消していたが、ついに、憲兵隊の取り調べを受けることになった。

肅蘭芳は、悪びれず落ち着いた態度で、尋問にはきはき答えて、少しもスパイらしい疑惑をもっていないかった。ただ、将兵のなかで比較的軍機にあずかっている尉官級の軍人が幾人か、彼女と関係をもっていることが判明した。彼女の熟した肉体は、実に巧妙に将校たちの心を捕えて、深みへ引きずりこんで行く力をもっていた。

憲兵隊は、必死で、彼女の宿舍や所持品の

搜索を行なったが、証拠らしいものが何一つ発見できなかった。このうえ取り調べを行なえば、スパイの証拠を発見するより、将校連のスキャンダルを明るみに出す結果になりそうになったので、憲兵司令部では、釈放しようと考えた。

司令部内でも、敏腕びんわんをもって鳴る池内大尉は、ふと彼女の所持品のなかにある胡弓こきうに目をつけて、胴を振ってみると、何かぼってりと重みを感じた。

大尉は、ハサミを胴皮につきさすと、皮をべりべりとはがした。中から出て来たものは重慶側の要人からの書類や、皇軍の戦線の配置図その他、彼女が探索した秘密書類がぎっしりと詰まっていた。

証拠品をつきつけられた肅蘭芳は、さすがに色を失ったが、それから、すらすらと自白して、何一つ隠し立てをしなかった。

情報の多くは、榑伍長から聞き取られたものであったため、榑伍長は、軍機漏洩の罪で取り調べをうけた。

榑伍長は、彼女がスパイだということを知

マゾスヒチツ

戦

って色を失った。そして、自分の軽率さを後悔した。

憲兵隊は、苛酷な拷問によって、かれを責めた。峻烈な池内大尉は、かれひとりを罪におとしいれ、ほかの将校たちのスキヤンダルを打ち消そうとして、ふたりの情交関係の自白をした。

「覚えはない」

と連呼する櫛伍長を、フンドシ一本のすっ裸にして、逆吊りにして鞭うった。その前には、これも赤い支那服を上半身むかれた肅蘭芳が、肩や胸に鞭をうけてもだえていた。池内大尉は、若い男女を交互に責めさいなむのをたのしむかのようなであった。

「櫛伍長には、罪はありません。あたしだけを罰してください」

と叫ぶ肅蘭芳に嫉妬を感じるのか、池内大尉は、焼きゴテの灼熱したものを、露出した彼女の乳首に押しあてた。

「ああ、うーむッ」

ともだえるのを、心地よさそうにながめた。そして、今度は、櫛伍長のほうをみて、
「どうだ、きさまの色女の責められる姿をよくみておけ」

といって、もう一つの乳首にあてた。

苦痛のあまり意識を失いかけている肅蘭芳をしり目にかけて、池内大尉は、逆吊りにされている櫛伍長のフンドシを引きはぎ、すっ裸にすると、

「きさまに罪はない、皆、こいつが犯した罪だ。苦しいのを耐えろ」

と言いながら、仰向けに臍のあたりに垂れ



下がった陰茎をわしづかみにすると、灼熱した焼きゴテを亀頭に押し当てた。

「あッ、うーむッ、うう」

彼の亀頭は見ると見るうちに茶褐色と化し、異様なにおいがあたりに立ちこめ、伍長はのたうち回った。

こうして男女ふたりは、二、三日して、憲兵司令部の裏手の林の中で処刑されたが、一糸まとわぬふたりは、木の股を利用して逆に股をひらいたYの字型に縛られ、大きく開いた股間目にかけて、池内大尉の日本刀が一刀の下に斬り下ろされた。

2・女 匪 の 責 め 苦

漢口^{ハンカウ}の軍司令部から、偵察機で北支上空の偵察に向かった加賀中尉は、重慶軍の高射砲の砲撃を受けて機体を炎上し、操縦士を失い、九死に一生を得て山間をさまよううちに、山地に巣窟^{そうくつ}をもつ匪賊^{ひぞく}の手に捕えられた。『紅匪』とよばれるこの匪賊は、頭目^{とうもく}に、胡彩姜^{こさいきやう}という若い女性を仰ぎ、その配下にも、多くの女性がまじっているのが特徴であった。

胡彩姜は三十を二つ三つ過ぎた年増であるが、豊満な肉体をもった美しい女で、巣窟と

肅蘭芳^{しゅらんほう}は一言、「日本鬼！」と池内大尉に罵声を発したが、それが終わらぬうち、藥物^{やくぶつ}によってヘソのあたりまで斬り裂かれ、ボタンの花のように朱^{あけ}に染まって果てた。榊伍長は、「無実だ」と叫んだが、これも、ことばの終わらぬうちに斬り下ろされ、唐竹割^{からたけわり}りになって死んだ。

皇軍の醜聞^{ういぶん}を守ろうとして、一兵を犠牲にしたサディスト池内大尉は、その後、ソ連軍の捕虜^{捕虜}となった。そして、戦犯の罪に問われて禁固^{こくど}され、発狂して悲惨な死をとげたということである。

はいえ、豪華な建物の中に、女王のように、多くの配下をかきかき生活していた。必死の抵抗のいかにもなく、数十名の匪賊に生け捕られた加賀中尉は、無念にもだえる身を、がんじがらめに縛られ、頭目の眼前で、嚴重な身体検査を受けた。

まず軍用カバンは没収され、名誉ある空軍将校の軍服もはがれ、越中フンドシ一本の姿で、女頭目の取り調べをうけた。女頭目は、かれに、皇軍の軍機の機密の自白を強要した

が、拒んだために、刑架^{けいか}に大の字ハリツケにされて拷問^{ごうもん}をうける。

加賀中尉は二十八歳の、よく引きしまった男らしい好男子で、ことに逞しいその肢体は女獣のような女頭目の異常な興味を引いた。

嗜虐^{しやく}的な嗜好のある彼女は、ウシの陰茎で作ったムチをふるって加賀中尉を責めさいなんだ。

しかし、ガンとして口をつぐんでいるのを見ると彼女の嗜虐^{しやく}の心はいっそう高ぶった。彼女は、この傲岸な日本軍人を思いきり恥ずかしめることによって苦悶^{くもん}を与え、自白させようとして、彼女の配下の女匪五、六名に命令して、凌辱^{りやうじやく}的な拷問を加えることにした。

女匪たちは、加賀中尉の口を割って強烈な支那酒をしたたかのませるとフンドシをはずし、全裸にすると、寄ってたかって、全身をくすぐり責めにした。わきやヘソをくすぐる者、股間や尻をくすぐる者、果ては足の裏にまで執拗^{しやくおつ}な女匪の責めは及ぶ。

「クク……うーむ、コ、殺せ……むッ」

と呻吟し、刑架が苦悶のためにキシキシときしんだ。若い逞しい四肢から、あぶら汗が湯のように湧き溢れて、床をぬらした。興奮と苦痛によって生じるかれの肉体の変化は、

彼女たちの嗜虐の心をいっそう駆り立てた。

小一時間責められてぐったりした加賀中尉のからだは、頭目の胡彩姜の部屋に運ばれ、なまめいた緋色の寝台の上に運ばれると、仰臥大の字に緊縛された。

彼女は、気を失っている加賀中尉に、気つけの酒を与えたが、まだモーローとしているのを見ると、ロウソクをもって来て、かれのからだの上にロウを垂らして、六本のロウソクを立てた。両乳の上、両股の上、そして他の一本は、臍窩の上に、最後の一本は、急所の草むらの中に立てた。

そして、どのロウソクが先に肉体に燃えつくか、女たちは、かれを取りかこんでながめた。水火の責めにも動じない豪気な加賀中尉も、このなまめかしい女性の責めに、羞恥と屈辱のカセにもだえ苦しんだ。

彼女は、かれの苦悶の中を、胡弓を弾かせて美しい声で歌をうたった。やがて、六本のロウソクは、加賀中尉の皮膚に焦げついた。

「う、うーむ、うーッ」

と身もだえするうちにも、なまめかしい弦歌はつづいて行く……。

皇軍匪賊討伐隊が、女匪の巢窟を急襲した

のは、それから三日目の朝であった。討伐を知った女匪たちは、風を食らって失踪した。もぬけの殻の巢窟の奥の女頭目の寝室と思われるなまめいた部屋に、真紅の絹ヒモでがんじがらめに緊縛された加賀中尉の全裸の姿を発見した討伐軍の将兵は、その残酷をつくした

3・L 收容所の女妖

フィリピン人のL收容所長ホーキンスは、オーストラリア人で、老人であったが、二十も年下のエリザベスという妻をもっていた。

この收容所には、日本軍の将兵が三百名近く收容されていた。長島大尉も、中隊長として、多くの部下とともに收容されていたが、かれは、独房に、ほかの兵と隔離されていた。

この收容所の一つの習慣は、毎朝点呼の時には、フンドシ一つの裸体で営庭に集合し、体操を行なったあとで、身体各部の厳重な検査を受けた。検査の時は、みな一斉にフンドシをはずして足もとに置いた。收容所長はい

つも、妻をつれて、この検査に立ち会った。捕虜とはいえ、異性の前での全裸の検査に

若い将兵たちは、羞恥に顔を赤めるものもいるが、エリザベスは、顔一つ赤らめずに、気

かれのからだをみて、慄然とした。全身にのこるムチの跡、火傷の傷跡、太股や尻や亀頭にまで印された入れ墨の跡など、さすが豪気な将兵も、思わず足をすくませたほどであった。加賀中尉も、その苦痛の中で、みごと舌をかみ切って息が絶えていた。

に入った兵の前になると、いつまでもその肉体を鑑賞していた。

ある朝、このエリザベスの目が、長島大尉の若く逞しい裸体の前でくぎづけにされた。そして、一同が命令によって解散した時、エリザベスはかれの耳もとで、

「今夜、部屋のカギをあけておくから、あたしのところにおいで、ホーキンスは、当分留守だから、心配はないよ。おまえの独房の看守に案内をさせるから」

と口早にささやいた。

長島大尉は、黙って返事もしないでいると、「あたしじゃ不服なのかい。不服なら、あたしにも考えがある。命令にそむいた罪をでっち上げて、拷問させるよ」

と脅迫するのであった。

その夜、案の定、長島大尉のところに看守兵がはいって来て、

「所長室に取り調べがあるからすぐ来い」

と言って、かれを連行した。所長の私室では、薄化粧をしたエリザベスが寝台の上に腰をかけていた。看守兵は万事承知したようにかれをその部屋に置くと、出て行った。

彼女は、かれのところに寄って来て、酒をすすめたり、たばこを与えたりした。すでに酒に酔って来た彼女は、下着一枚になり、その豊満な肉体は、溢れ出るように美しく、久しく女性の香に飢えている長島大尉の若い心を悩ませた。

彼女は、かれを、美男だとか、男らしいとか、肉体の逞ましきなど、顔を赤めるようなことを言っただけ、かれのシャツのボタンをはずし、フンドシもはずすと、ついに全裸にし、ベッドの中に引き込んだ。

長島大尉は、捕虜とはいえ、敵国の女のもてあそび物になるのも屈辱に耐えられず、抵抗したが、彼女の年輪を経た性の技巧には、屈服しなければならなかった。彼の肉体は、エリザベスの巧みな手管に、思うままもてあそばされた。快感と苦痛にかかれは、しばしばうめき声を発して、興奮の果て、次第に意識は

もうろうとしていった。

その時、ドアがけたたましく開いて、所長のホーキンスと、看守長と、五、六名の看守が、その部屋に乱入して来た。エリザベスは早くも着物を着ていて、

「早くこの乱暴者をこらしめてください」

と連呼していた。全裸の長島大尉は、寝台から引きずり出され、ホーキンスや看守たちになぐり倒された。

「捕虜のふんざいで、痴行をはたらくとは、もってのほかだ。存分な仕置きをしてやる」

とどなった。エリザベスも、打倒されている長島大尉の顔や胸を靴で踏みにし、

「あたしを恥ずかしめた憎いやつです。うんと拷問してやって恨みを晴らしてください」

と言った。怒りに狂ったホーキンスは、長島大尉を床の上に仰向けにして、四名の看守に手足を押さえさせると、その上に馬乗りになり、医局用のガラス棒をもって来て、かれの陰茎をつかむと、尿道に挿入した。

「うーむッ、ううう」

と、苦悶にもだえるのを、微笑をもってながめながら、もっと入れてみると、かたわらから言った。ガラス棒が没入する局限まで入れると、また抜き、同じ苦痛を幾度かくり返

された。

これだけでは腹がいえないと言って、ホーキンスは、ゴムの細い管で、長島大尉の陰茎を、罌丸もろとも緊縛し、さらにうしろ手に縛し上げると、営庭の中央に、柱にしばってさらし物にした。かたわらには、姦淫の罪をこまごまと書いた制札を立てて、まる二日、排尿も許されず、炎天のもとにさらされた。

事情を知らぬ日本兵たちは、哀れな隊長の姿をみて、同情したが、中には、かれの醜行を責めるものもあった。

上官の橋本少佐は、激昂して、かれのほおをなぐりつけて行った。

長島大尉は、無念と屈辱と交錯した煮え返る思いで、ほおを熱涙でぬらし、全身をあぶら汗にまみれて、この処刑に耐えていた。

エリザベスは、朝昼夜と三回見まわりに来た。ゴムひもで緊縛されて、紫色に腫張した長島大尉の罌丸を、乗馬ムチでたたいたりこづいたりして、そのつどなぶり物にした。

朝の点呼のラッパがひびき渡ると、L收容所の捕虜たちは、また、全裸体の点呼に整列した。多淫な女妖エリザベスは、その腫れをかがやかせて、捕虜の肉体を物色し、きょうも新たな獲物をさがしとめるのであった。

4・ガダルカナルのハラキリ

ガダルカナルで全滅したK小隊に、九死一生を得た某一等兵の目撃した実話。

果敢な抵抗もむなしく、海陸から上陸した米軍に、少数をもって対したK小隊は、衆寡敵せず、みな殺しの運命に落ちた。

米軍が某高地を占領したとき、高地に、日本軍のおびただしい死体が四散して、丘を血に染めていたが、なかに、数名の仮死状態の将兵がいた。指揮官は、直ちに生存者をさがし出して運ばせた。

海軍陸戦隊の小隊長の由木中尉は、太股に貫通銃創をうけて呻吟していたのを発見されて、連れて来られた。

「うーむ、残念だ。早く殺せッ」

と連呼したが、指揮官はせせら笑って、「早く傷の手当をして、捕虜として存分に訊問しよう」と言った。

やがてかれは、血に染まった軍服をむかれて、全裸のからだを洗い清められ、傷ついた貫創部に包帯を施された。

「おれをいったいどうするのだ」と苦しい息のもとから由木中尉がきくと、

指揮官は、

「たぶん、本国に連行して取り調べを受けることになるだろう」と言った。

「なに、捕虜としてアメリカに連行されるッ」

かれは、将校として、捕虜の屈辱に耐えられず、

「どうか、ここで自決させてくれ、軍人の情けだ、たのむ」と哀願するのであった。

将校として米本国に連行されての、死にまさる屈辱を思うと、かれは、ここで部下とともに名誉ある死を選びたかった。

指揮官は、ほかの将校と相談していたが、やがて、サムライの死として、ハラキリを許すことにした。由木中尉は、居並ぶ米軍の将兵の前で、日本武士の切腹の方式によって割腹することになった。

全裸の姿なので、せめて軍人の名誉のために、フンドシを許してもらいたいと申し出たが、フンドシとなる布がなかったので、包帯を幾重にも股間に巻きつけて、フンドシとし

た。少し刃のこぼれた日本刀を引き抜き、由木中尉は声をはり上げて、

「大日本帝国海軍中尉由木鉄三、ここで割腹して果てる。アメリカのヤンキーども、日本軍人の最後のさまをよくみておけ」

と呼びながら、大刀の切っ先を、左のわき腹にぐっとさし込んだ。

「ううううーむ」

とうめきながら、切っ先を大腸のへんにさし込むと、ぐっと力を入れて、右へ一文字に引いた。

若い、あぶらののった皮膚は、ま一文字に切り割かれて、どす黒い血潮があふれるように流れて、まっ白なフンドシを染めた。

「ううう、うッ」

と、じゅうぶん右のわき腹まで引くと、刀を左手にもち替えて、右手をぐっと腸の創口に挿し込むと、大腸をつかみ出し、ずるずると引き出して、眼前の砂の上に投げつけると、カバツと前のめりに伏した。

二十七歳の由木中尉の若い生命は、こうして戦場の花と散ったのである。さすがの米兵も、かれの豪胆に驚き、遺骸をなんごろに葬った。今次大戦に残された、ひとつの武士道秘話である。

が、するするとおりてくると、その一本の端を、美加を結えた腰の胸のまわりのナワに、堅く縛りあげた。その二本の綱をひくと、天美加のからだは床を離れ、やがて、天井高くつるしあげられた。

青美しき虐魔

雨 妙 院 一 太

小 田 利 美・え

醜にも魅せられる女

三年前に遭遇したあの出来事を、宮野井美加は、恐怖と悪感と、そしてこれは心の中だけのひみつであるが、いくらかの性的な興奮をもとめないながら、ときどき思いだす。いや、大学の文科に学んで、小説かきのまねごとをしている今では、そのことに多

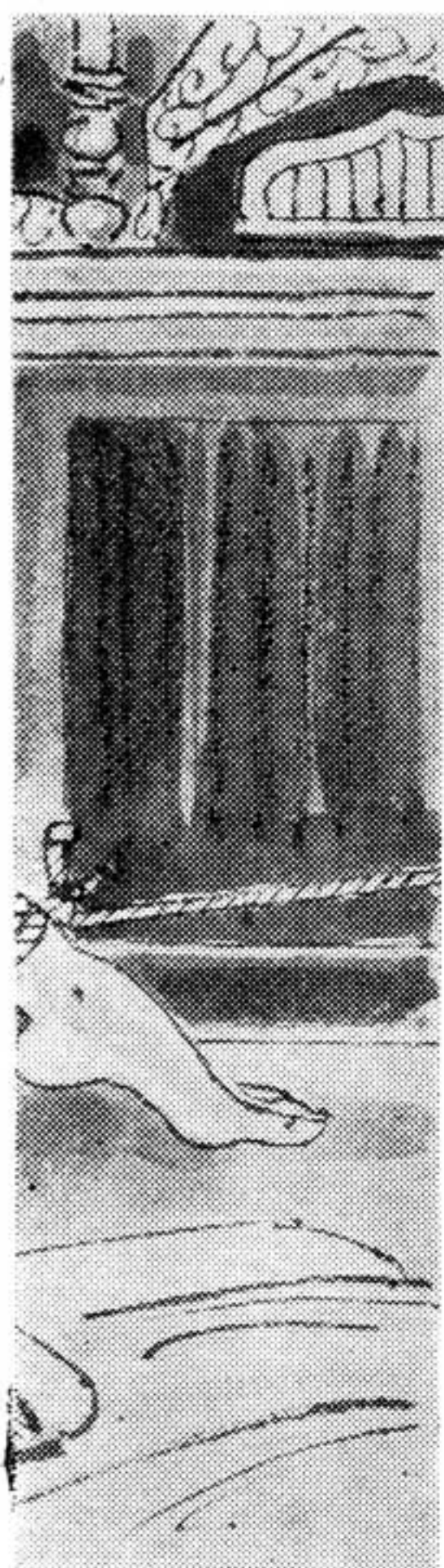
少の理念——分析的な——すらも道連れにして……。そのころ、美加は十九歳、すでに東京の大学にはいっていたが、そのときは冬の休暇で、母と二人の姉妹のいる日光市内の実家に帰省していた。

そうした十二月末のある日の午後、かねて病臥していた母の状態が急に悪化したので、奥日光の小田代に嫁いでいる長姉の家に、すぐに知らせにゆくことになり、美加がその役を買って出た。

バス、ケーブルと乗り継いで、積雪の深い小田代の原の中にポツンと一軒立っている姉の家に、美加がたどりついたときは、あたりは、もう闇につまれていた。

ところが、姉の家は全部、戸をたてきられていて、あかなかった。

——姉さんたち、二人でスキーにでも出かけたのだろう。



天井のロクロからさがった二本の綱
あたりのナワに、ほかの一本の端を
井のロクロがぎりッぎりッと回って



と、美加はしかたなく、ポケットの手帳の紙をひきちぎって、事のしだいを走りがきすると、戸のすきまにさしこんで、もと来た道に戻りはじめた。

すでにケチはつきだしていた。美加が歩きにくい夜の雪道を、湯滝下のバス停留所まで来たとき、最終の車は出たあとだった。

——せめて菖蒲^{あやめ}が浜のバスにまにあわせなくては……。

と、美加は、夢中で駆け走った。が、そこから出る終車にも、五分ほど遅れていた。

——こんなことになるなら、スキーをかついでくればよかった。姉がいたら、義兄^{あに}のスキーをかりて、きょうだい二人で、銀盤をすべらしながら、わが家へ戻ろうと考えていたのに……。

と、勝ち気な美加も、泣きだした。いような気もちだった。疲れた足はグラグラとくずおれそうだった。

が、帰らねばならぬ。美加はトボトボ歩きたした。

こんなときに、えてして不吉なおとし穴がパツクリと口をあけてま
っている！

ヤマバトやフクロウの声が、陰にこもってきこえてくる、人けのな
い山道を、ようやく般若ノ滝のあたりまで美加が来たときだった。
うしろのほうに、サクサクと雪をふむ音をきいて、美加はふりかえ
った。

と、ちょうどガマのような格好のセムシの男が、二メートルほども
あとを歩いてくる。雪明かりに、その顔形までみとめられた。三十
五、六、どこかでみおぼえのある顔だと、美加は瞬間かんじた。

が、気味がわるいという念のほうが先だった。美加は足を早めた。

「……おまちなさい」

男が声をかけた。からだつき、顔形に似ても似つかぬ、しずかな品
のよい声音だった。

美加は、なぜか射すくめられたようになってしまった。

男はちかづいてくると、いきなり、美加の腕をつかんだ。

「なになさるのッ」

美加は、その手をふりはらおうとした。が、男のつかんだ力は強
く、ビクリともしない。それに、こんなことをしていても、男のどこ
にもいやらしいかけが感じられなかった。美加は抵抗の手のにぶりか
けたのを覚えた。

男は、そうした美加のようすをじっとうかがっているふうだった
が、やがて、

「あなたに用があるのです。私といっしょにおいでなさい」

というと、美加の腕を握ったまま歩きだす。

背丈こそ自分よりははるかに低い、ガッシリと頑丈なからだつ

き、力ありげな相手をみては、かしこい美加は、へたな抵抗をあきら
めてしまった。

いや、なにかほかに、抵抗しがたいものも、意識せぬままに感じて
いた。

人間は美に魅せられるとともに、ときに醜にもまた、悪感とともに
魅せられる、ということ、ちかごろになって美加は、わかったのだ
が……。

美加の足は、男にしたがって動きだしていた。

処刑者の表情で

美加がセムシの男にひっぱられるように連れてこられたのは、大真
名子山と小真名子山との山あい、の古寺であった。

その奥まった庫裡の一室に美加を伴うと、セムシ男は、すぐ部屋を
出ていった。

——こんなところに連れてきて、私をどうしようというのかしら
……？

うかうかとひっぱられてきたものの、相手をつきとばしてでも逃げ
なかったことが、いまさらに悔やまれるおもいで、美加はあたりをみ
まわした。

そこは土蔵の中のような、四面を壁でかこんだ六畳じきくらの部
屋で、わずかに一隅にセムシ男の出でいった、小さなくぐり戸の出入
り口があった。

美加は、ためしにそのくぐり戸を押した。そとからカギがおろして
あるとみえて、戸は開かなかった。

——やっぱり逃げられない。

そう思うと、ふしぎに、かえって気もちがおちついてきた。すっかり観念のほぞをかためた美加は、暗い電灯の真下におかれた寝台——病院の診察室にあるような、狭い無細工な寝台に、どっかりと腰をおろした。

そのとき、くぐり戸のあけられる音がして、一人の僧侶がはいってきた。

年のころ二十七、八にもなろうか、きれいに剃った青頭、広い額、りしい眉、中高の鼻、もみろのぼってりとした唇、すきとおるばかりの色白の皮膚——女にしてもみまほしい端正秀麗な美貌。しかし、みると、そのつづらな眼のなかには、氷角のような、冷たくむごいものがうかがわれ、ややゆがんだ受け口からは、なまぐさい獣性を感じられる。

僧は、美加にじーっと目をすえながら、しずかにちかづいてくる。

美加はさっとたちあがった。

「よいおなごじゃ……」

うめくような声でいうと、僧はすーっと白い手をのばして、美加の頬のあたりをなでた。

美加は、身をよけると、すばやく寝台のむこうに逃げた。

「ふん、逃げることはかなわんぞ」

僧は、薄笑いをうかべてそういうと、二、三步あとずさりして、くぐり戸をどんとけた。

と、それが合図か、さっきのセムシ男が、そこからのっそりと姿をあらわした。

「ハルキチ、おなごをとらえてや」

と僧は、セムシ男に命じた。

春吉という名なのであろうか、セムシ男は、重そうなからだをいかにも軽げに、美加にむかってツツッと走らせた。

美加は、二人の男にはさみうちにとらえられ、床におさえつけられた。僧は、そのからだから服をひきはがそうとする。

美加は、がむしゃらに暴れた。が、いかに負けん気でも、春吉の馬鹿力には敵うはずはなく、たちまち、すはだにされてしまった。子どもものころからスキーやスケートが鍛えた、均斉のとれた肉体が……。

「美しい膚や、プリプリとはりきった処女の膚や……」

いいながら、僧は、美加のからだを末梢から中枢へひとなですると、僧衣のふところから一束の麻ナワをとりだした。

ナワがパラリととかれる。僧は、その一端をつかむと、美加の脚、腹、胸、腕とぎゅッぎゅッと縛りあげていく。ナワは、びーンと緊まった柔肌にくいいて、皮肉が破れるかと思うばかり……。

美加は、声をあげようにも、すでにその口には堅くサルグツツをかまされていた。彼女はしきりにうめいた。

口元のゆがみをいっそうはげしくさせながら、美加の苦しむさまをじいーっとみまもる僧。彼は、ツとたちあがると、一隅の鴨居につるされてあった鞭をとりあげた。

そのまま、処刑者の表情で、床にころがされた美加の足もとにたつ。瞬間、僧の手の鞭が、鋭い電灯の光に一閃、また一閃、また一閃……つづけざまにひらめいた。

鞭が鳴るのか、美加の膚が鳴るのか、そのたびに、びゅッ、びゅッという音が、部屋いっぱいに牙えわたった。

美加にはあまりにも思いやらぬことだった。彼女は、この、女のよ

うな美僧から姦^がされるものとばかり感じていた。ところが、秘所をか
くした布はとりのぞかれず、ただ、からだじゅうをむやみとうちさい
なまれるのだ。

——どうして私をこんなに折檻^{せうかん}するのだろうか？

そんなことを思うひまもないほど、やたらむしように鞭打たれる。
その痛さに、美加は、くねくねと身もだえし、ころころとこぼれまわ
りながら、苦しむのみだった。

が、そのうち、知覚が鈍麻^{だんま}したのか、痛さを痛さと覚えなくなっ
た。美加は、いつしか夢と現^{うつ}の境を彷徨^{うろた}していた。

死屍にむけるカメラ・アイ

気がついたときは、美加は、朝らしい日ざしが障子にあたっている
部屋に、布団の中にねかされていた。

そこがわが家ではないとわかると、すぐに、昨日のことがパッと頭
に來た。姉の家をひきかえしてからの変事が、あれこれと悪夢のよう
に思いかえされる。

——そうだ、こうしてはいられない。

と美加は、床から起きあがったが、身に着けている物をみて、おや
？と思った。それは、真っ白い僧衣の下着なのだ。

反射的に、あたまに手をやった。が、髪は剃られていなかった。

「目がさめましたか」

障子があいて、セムシ男の春吉が、こういいながら顔をのぞかせた。

——ねているまもこの男にみられているらしい。とても、ここから
逃げだすことはできないワ。

と美加は思った。

「こちらにおいでなさい」

と春吉はつづけていって、障子のかげに姿を消す。

春吉が美加をつれてきたのは本堂だった。

本堂の仏前では、昨夜の美僧が、朝の読経^{どきぎょう}をあげていた。春吉は、
そのうしろに四角になって、手のひらを合わせた。美加もしかたなく
そのわきにすわった。

朗々と玉をころがすような僧の声が、広い堂内にたゆとうようにひ
びきわたる。

鈍く光る金色^{こんじき}の仏像の前に端座して、数珠^{じゆず}をつまぐっている僧の姿
は、昨夜あのような淫虐^{ぎんぎやく}の形相^{ぎようそう}で、美加のからだに鞭打ちかかった人
には、どうあってもかんがえられぬほどの、神々^{しんごう}しいばかりのきよら
かさだ。

美加は一瞬、目を疑った。

が、いくどくびをのぼして、その横顔をみても、まごうかたないゆ
うべの僧の顔である。

やがて、読経がおわった。

と、僧はすっとたちあがって、美加のほうには一瞥^{いちべつ}もくれずに、そ
の場を去っていく。

美加と春吉も、つづいて座を立つと、彼女はまた、昨夜の土蔵のよ
うな密室にとじこめられた。

まもなく、春吉の作ったらしい朝食がはこばれた。美加は、昨日の
午^{ひる}からなに一つ食べていないので、腹はすきすぎるほどすいていた
が、箸^{はし}をつける気にならなかった。

一方の鴨居に明かりとりの小さな窓があいていて、そこから、朝の

日がさしこんでいた。美加は、その日だまりのなかに腰をおろしていたが、ふと、自分の足もとの床板だけが、ぜんたいに五ミリほど傾斜しているのに気づいた。

——おやッ？

と不審に思った美加は、立ちあがって、そのくぼんでいる一方を足で強く踏んだ。

すると、床板はズンズンと傾いて、ついに直角となり、下にポコンと大きな穴があいた。

のぞいてみると、そこからまっすぐにハシゴがおりている。

——ここからどこかに出られるのだ。

美加は、憑かれたように、そのハシゴを伝って、穴の中へおりていった。頭の上の床板が音もなく、もとどおりに閉じる。

穴をおりきったところから、横に道がついているらしい。美加は、鼻をつままれてもわからぬような真っ暗な孔道を、手さぐりで、前へ前へと進んでいく。

一〇メートルほども行ったところで、板壁につきあたった。道はそこでゆきどまりになっている。

板壁のすきまから、ほのかに明かりが洩れていた。美加は、壁の表面をなでてみた。

と、端のほうに取っ手らしいものが手にさわった。

取っ手を捻りながら、ぐっと押した。と、壁だと思った扉が開いた。

そっと内をうかがうや、美加は思わず鼻をおさえた。なんともいえない不快な異臭が、むっと鼻を衝いたのだ。

美加は、鼻孔をおさえながら、ドアのむこうに踏みこんだ。

そこは、かなり照明のあかるい八畳ほどの洋室——というよりも、病院の診察室か手術室のような室で、そこここに、血の痕のにじんだ大きな寝台や、メスやハサミを入れた器具棚やらが、置くべきところに置かれていた。

地上の古びた寺院とは似ても似つかぬとりあわせの設備である。

一方の壁ぎわをみて、美加はまたまたギョッとした。

そこには、横に二本ほどの金属性の棒がわたされていて、明らかに人間の皮とみとめられるものが、なめされたもの、生^なまのものなど、いりまじって、そこに、すきまなくつりさがっているのだ。

美加にはようやく、この寺の住職らしい美僧や、寺男らしい春吉の本態が、わかりかけてきた。

ほかの一方の片隅に、大きな書卓がすえられてあった。美加は、まだなにかを発見したい気もちで、そのそばにちかよった。

卓上に、キャビネ型の写真が、数葉ほども重なっておかれている。

美加は、その上のものをのぞいたが、すぐ、「あッ……」と顔を覆った。

それは、死体の写真だったが、その顔や身体がそこここに、かみつかれたような跡が歴然とわかるのだ。そこから流れだしている血痕は、写真には黒く写っていても、美加の脳裡には、ありありと真^まっ赤な鮮血に彩^{いろど}られて映じる。

美加は慄然として、ほかの写真をみる勇気がなかった。

おのが虐殺した死屍にカメラを向け、あるいはそれをメスで切り開く、冷酷無残な「眼」を思い浮かべて、身の毛もよだつおもいなのだ。

——ひとごとではない、自分もいつかはこうされるのだワ。

美加はすぐとそう気づく。

そうなる、なんとしてでも逃げだしたかった。たとえ、かれと格闘してでも……。

が、それには、さっきの部屋に戻ったほうが、その道があるように思われた。

縛る食人者

美加は、もとの密室にもどった。

朝の食膳が先刻のかたちのままで置いてあり、彼女のいないうちにだれもはいつてきたようなようすはない。

美加はほっとして、食膳の前にすわり、冷えた飯をきれいにたべつくした。

そのあと、寝台に腰をおろして、逃げるためのあの手この手、わが家のことなど、あれこれと思いめぐらしているうちに、短い冬の日が暮れた。

ぽっと薄鈍い電灯がつく。

美加はたちあがって、くぐり戸のわきに立った。さっき地下の部屋

から忍ばせてきたメスが、彼女の手に握られている。

なんどきほど待っただろう、やがて、くぐり戸の外に人の足音が聞こえ、戸が開いた。ぬっと青い頭が現われ、つづいてその上半身が……。

美加はさっとメスをつきだした。

なにか手応えはあったとみえたが、とたんに美加は、その場につき倒された。

美加の手からメスがとんだ。

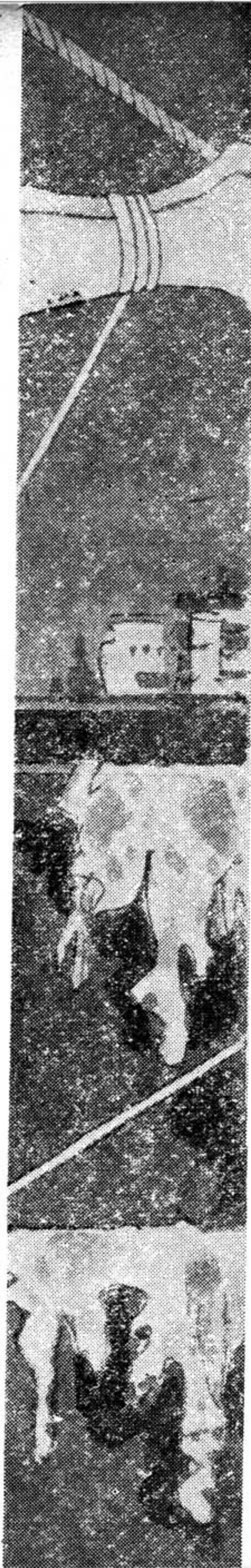
倒れた美加の上に、僧が折り重なった。僧の左の肩先から血が噴いている。赤いひもでもひきだすように流れでる血は、みるみる僧衣を伝って床にしたりおちる。

死にものぐるいに暴れる美加。いきなり、僧の拳が、ガン！と彼女の頬を一撃した。美加は頭がくらくらとなつて、なかば氣を失いかけた。

はっと気がついたときは、すでに、美加のからだは麻ナワでぐるぐるまきに縛られていた。

「阿呆ッ……」

大阪弁の罵声が美加の上におちた。



「地下の部屋をぬすみ見よって、わてを殺す気になったンか。わてはおなごふぜいによろ殺されンわい。そのかわり、きょうはおまえをホトケにしたるゾ、さんざんええ目にあわしたうえでなあ」
突き刺すような冷酷な語気でそういうと、僧は、天井のロクロからさがった二本の綱に手をさしのべた。
すると綱がおりてくると、その一本の端を美加の腰のあたりのナワに、ほかの一本の端を胸のまわりのナワに、それぞれに回して、強く縛りあげる。



僧は、二本の綱の他端を両手につかみ、ぐぐっと引く。と天井のクロがぎりぎりっぎりっと回り、美加のからだがだんだんと床をはなれていく。

ついに天井高く、美加はつるしあげられた。

僧は綱の端を柱の釘に結びつけて、美加のからだを宙に固定させると、長押から撞球のキューのような長い棒をつかみとって美加の下に斜めに構えた。

えいッ！

美加の背が棒の先端で強くつきあげられた。ううッとうめく美加。棒はやすみなく、彼女の肩を、頸を、臀を、脚をと、むしようにつきまわす。

そのたびに、綱がぎゅッぎゅッと膚にくいこむ。美加のからだは車輪のように、宙でくるくると回る。みるみる美加の総身から、あぶら汗がしぼりだされた。

やがて、僧は、美加のからだを寝台の上におろした。そのそばによったかれの手には、さっき美加の手から跳んだメスがつかまれている。

「お嬢はん……」

と僧は呼んだ。

「これからわては、おまえのからだを生きながらに喰らうのや。うまそうなおまえのからだを……血のしたたるような分厚な肉を……」
が、僧は、すぐにはそれをしようとはせず、とらえたネズミを食うまえのネコのように、彼女のからだのそちこちをしきりになでまわしながら、舌なめずりしている。

このとき、しずかにくぐり戸が開いて、春吉の姿があらわれた。そ

のまま、そっと僧のうしろへしのびよったかれの手が、僧の脇腹にドンと当て身をくれた。

もんどり打って僧が倒れる。

春吉は、美加のからだのナワを解いた。そして、死んだようにぐったりとなっている彼女の耳に、

「さあ、おにげなさい」

と、いった。

美加は意外だった。

が、春吉が自分を助けたわけをきこうにも、口をきく気力がなく、かれも語ろうとはしなかった。

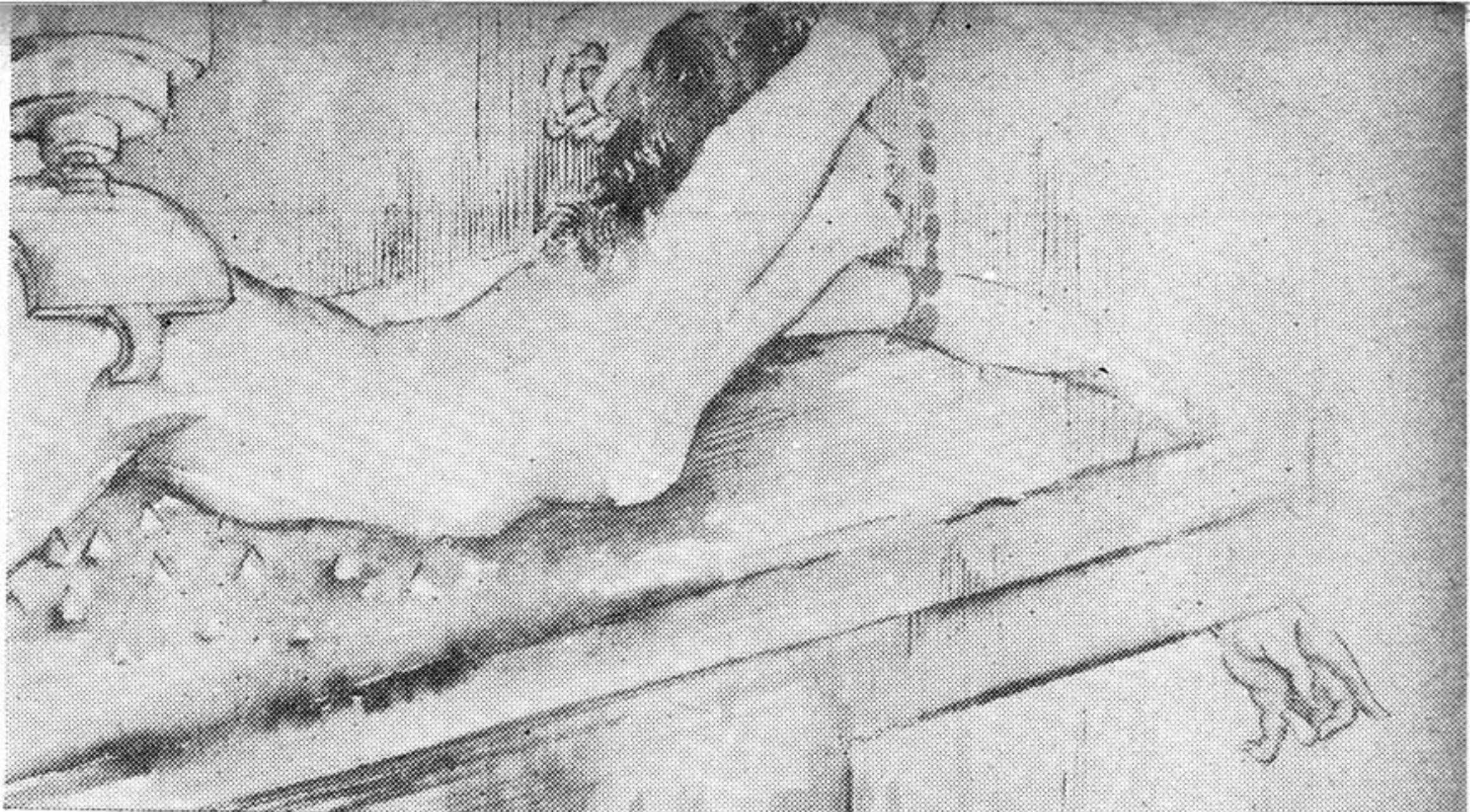
それから三十分ほどの後、美加は寺を逃げだした。

途中でおりよく、通りがかりの車に乗せてもらい、日光市のわが家にたどりつくことのできた美加は、病気をもちなおした母や、きょうだいたちの前に、きのうからの変事を語ったが、そのときはじめて、母のことばで、不審に思っていた春吉のことがわかった。

セムシの春吉に、美加の幼児のころ、彼女の家の近くに別荘をもっていた東京の実業家の息子で、そのころかれは、美加の母を愛慕していたらしいというのだ。

そのかれが、なんで古寺の寺男になりさがったか、それはまた、一編の小説になるが、かれが主人の美僧を裏切ってまで、美加を逃がしたのは、彼女から剝ぎとった服の定期券からでも、その名を知ったからでもあろう。

宮野井家からの知らせで、翌早朝、警察が、大真名子山中の古寺を急襲したが、すでに二人の人影はなく、いまだに、ようとして消息がわからない。

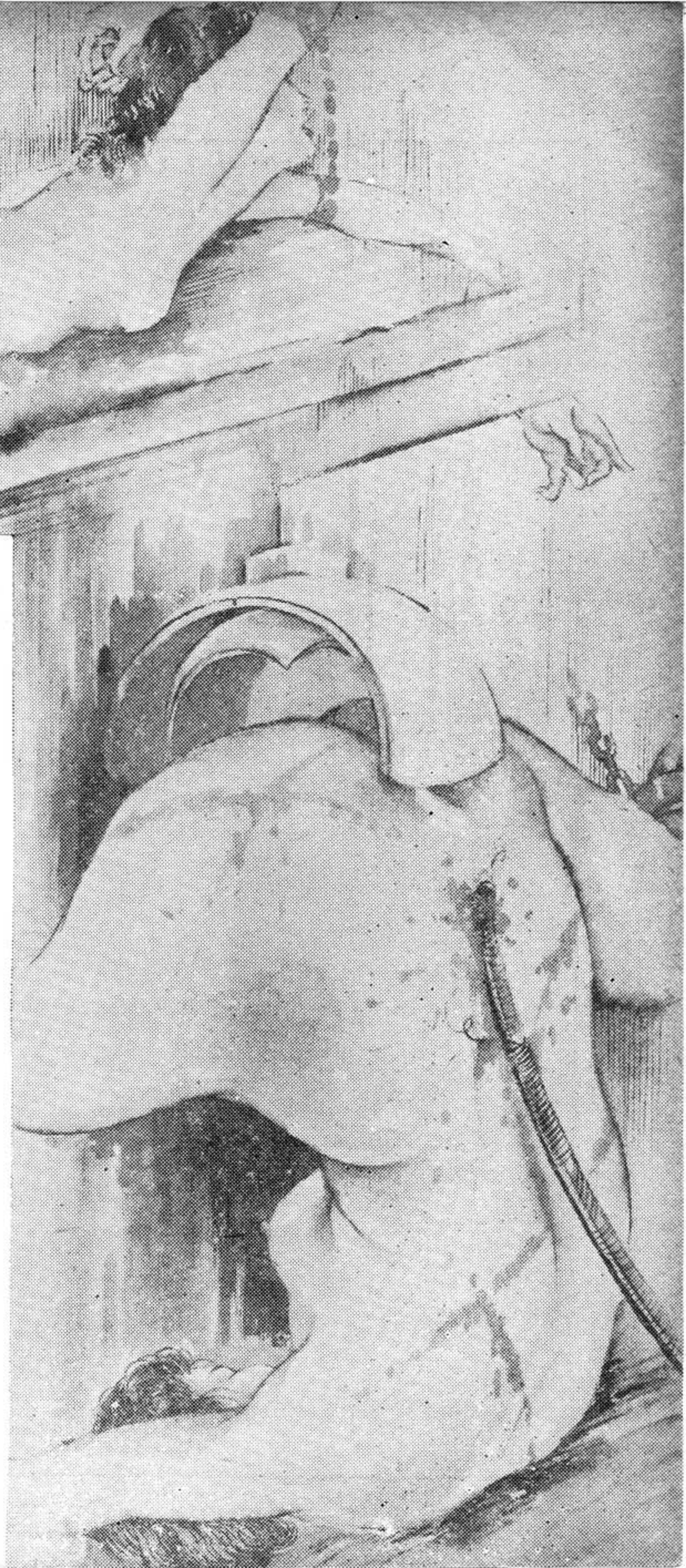


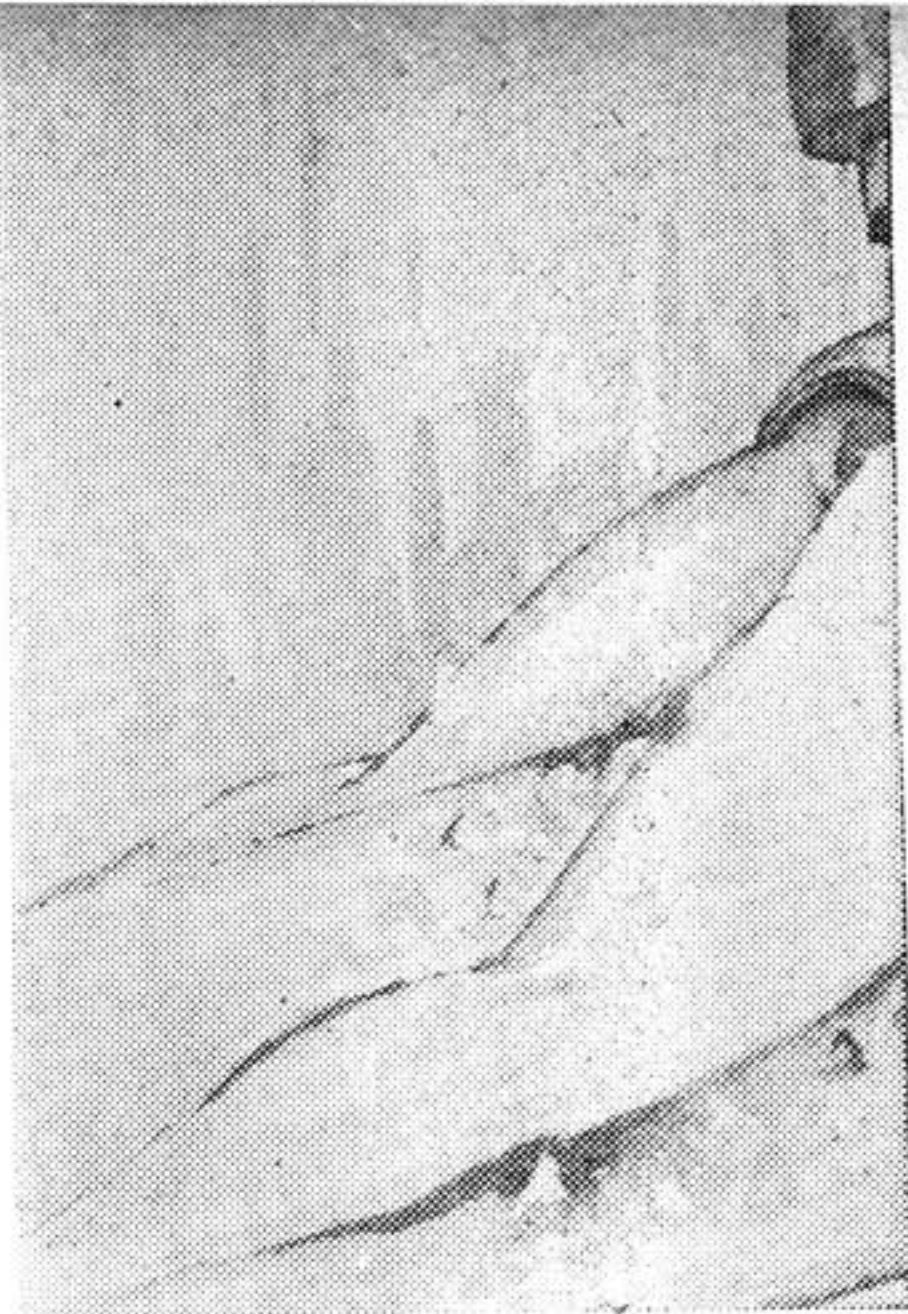
れ

潤

手錠のまま浣腸

丘の上にジープが一台停まっている。
空と、丘の稜線は、目もさめるような鮮紅
の夕映えに色どられていて、ジープが炎につ
つまれているように見えた。夢のようにオー
ボエの音色が丘の斜面を流れていた。
桜子が枯れ芝の斜面を登りつめると、オー





ボエを片手に、ひらりと、黒いたくましい男がジープから下りて、

「ずいぶんおそかったな。そのぶんだけ、罰として鞭をよけいに加えてやる」

「許しよう、ジョー。授業が終わらなかったから、しかたがなかったのよう」

濃紺の清楚な制服姿で桜子は、ニグロの厚い胸にとりすがって言った。

ジョーは冷たく首を横にふり、

「さあ、車に乗れ！」

手荒く、桜子のしりを押し上げた。

夕映えの丘をジープが走り出す。

走るにつれて、桜子の学園であるC女子短大の白亜の校舎が迫って来る。ビルの校舎

<サド小説>

神よ、くたば

北

も、校庭のイチヨウも、門へ向かって校庭を歩いて来るおびただしい生徒たちの白いネクタイも、夕映えの赤い色に染められていた。門の前を走り過ぎる時、桜子は顔を隠していた。だれかに気づかれたくなかったからだ。

黒人青年ジョー・ブラウンのモダンな洋式住宅は、S川のほとりにある。川波の音がたえず聞こえる近さだ。

閑静な、というより、少々寂し過ぎるくらいの場所である。

町からずいぶん遠いから、ジープが着いたときには、S川にはもう薄やみがかかっていた。棟続きのガレージの中へ、ジョーが車をしまうすきに、桜子は、ふいに逃げ出したい衝動にかられた。じっさいに、彼女の足は、ひと足ふた足、裏門のほうへ動いたのだ。

すると、敏感に気配を察して、ジョーの白い目がヒョウのようにこちらを見た。暗い中では目ばかりが、ぶきみに白く光る黒い顔である。

「ノー！ 逃げる気ではなかったのよ！」
暗いガレージの中から、黒いけものようにジョーがおどろき出して来ると、桜子は恐怖して叫んだ。

「なぐらないで」

顔を押えてうずくまった。

「観念してるんだから、顔をなぐるのだけはやめてよ、ジョー……」

前に二、三度、なぐられた経験があるのだろう。桜子は、すくみ上がっていた。

「立て」

とジョーは薄笑って言う。

「なぐらないから、家へはいれ」

彼は、固めたこぶしをほどいていた。

トイレにジョーは灯をつけた。

五十ワットほどの、皎々とした白っぽい螢光灯の照明で、白タイルばりの壁も床も、つややかに輝いて、薄影一つとどめない。ちょうどデパートのトイレのような明るさを、もうひとまわり明るくしたようなものである。

「電球をとり替えたのね……」

桜子は言った。

「まぶしいくらいだわ」

濃紺のスカートが、形のいい細腰をすべり、白タイルの床に落ちる。ついで、桜子はせつなそうに下着を脱ぎとると、ナイロン・スリッパのすそをからげて、腰高の洋式便器にまたがった。

かつて軍籍にあったころジョー・ブラウン

は、N基地でMPの端役のような任務についていて、そのころにくすねた手錠を二個持っている。彼はいま、桜子の象牙のような白いなめらかな臀部のうしろで、その二つの手錠をじゃらつかせた。

ニグロに特徴の、きみの悪い黄色い手のひらが、むきだしの美しい白臀をびしっと一つひっぱたくと、桜子は、両手を前に差し出した。顔はふかくうなだれて、桜子は悲しげにすすり泣いていた。

二つの手錠が、桜子の両手を水洗具の水道管と連結し、桜子のからだのエビのように折れ曲がると、浣腸責めが執行された。

せつなく苦しげに桜子は、うめき、かつ、声を放って泣きじゃくった。白く光るタイル床に、幾つも浣腸器の殻が散らばっていた。

苦悶する美女

いつも浣腸責めのあとには、すぐに鞭打ちが加えられるのだ。

だから桜子は、トイレから室へ連れ戻されると、桃花鳥を染め抜いたじゅうたんの床に四つん這いになって、鞭責めを待って、かわいい豊頬をなみだで濡らしていた。手首には

手錠が掛けられたままである。

ジョーは、戸棚の前でオールドパーを飲んでいる様子だった。戸棚には鏡があり、桜子の哀れな姿態は鏡の中でじゅうぶんにジョーは見る事ができる。かれの黒い首には、黒いヘビのように太い皮鞭が掛けられている。

「さあ、美しいお嬢さん」

酒びんをもとに直して、ジョーは、ふり返って白い歯でにたと笑った。

「……はい」

桜子は、臀筋をひしとひき締め、全身をかくして痛烈な鞭打ちにそなえた。

しかし意外にも、ジョーは、彼女の手から手錠をはずしてやり、

「スカートをはきな」

「——え？」

涙にうるんだ目を、桜子はみはった。

「打たないの？ ジョー、ほんとうに？」

スカートをはきな、と黒いグロテスクな顔はもう一度ひくい声音で言った。

桜子は、むしろ不安な気持ち覚えて、トイレへ戻って、そこに脱いであった、下着とスカートを腰につけた。女に戻ったような感じがした。床に散らばっている浣腸器の殻を手早く始末すると、手を洗ってから室へ戻っ

た。

「外出だ」

ジョーは、桜子の手を握った。

「どこへ？」

「黙ってついて来な」

どこへつれて行く気なのだろう、ジープは暗い寂しい道ばかりを走った。満天の星と、微風とで、夜はかおるようだった。道は、しだいにS川から遠く別れて行った。

「いったい、どこに連れて行くのよう？」

雑木林の道を咬々とヘッド・ライトで照らし出して、ジープがはいって行くと、桜子はおびえてしまっていた。

「なんだかこわいわ……ねえ、これから私をどうするの？——答えてよう、ジョー」

ジョーは答えた。

「うるせえ、だまってろ」

林の道は高台に通じていた。車が停まったのは、その高台の、とある洋風住宅の、アーチ門の前だった。「ハリー・キッド」と外人名の標札が、日本式に門に出ていた。

ハリー・キッドは留守だった。

玄関のドアのノブに手紙がはさまっていて、ジョーにあてた置き手紙らしかった。その証拠に、ジョーは、その手紙の指示によっ

て、ドアのカギを捜し当て、家の中へ桜子を連れ込んでいた。

「ハリーのやつが今夜、おれたちを招待した」客間のソファに傲然と構え、ジョーは、桜子に足のつめを切らせながら言った。

「おれたちはパーティーをやる」

桜子はただ黙って、きたない足を膝に抱え、ていねいにつめを切っていた。

「どんなパーティーだか、気になることだろう？」

と、ジョーはぶあつくちびるをめぐって、長い歯をむきだして笑った。桜子に向かう向きにさせ、かれの足は、形のいい臀部をけた。

「ああ——」

と、そのとき、門の前に車が着いた気配だった。

「待たして悪かったな、ジョー」

その声から先に、威勢よく室にはいつて来たハリーは、やはり黒いニグロだった。やはり、というのは、家の調度品の下卑た趣好と一種体臭に近い強い臭香が桜子の吸覚を突いていたからである。

二人のニグロの相貌はよく似ていた。背丈はハリーのほうが低い。声がひじょうに悪声

のだみ声だった。

ところで、そのハリーには同伴者がいた。

三十年配の、上品な感じの婦人である。地味な和服姿がほっそりとして優雅で、細面の美貌をそなえていた。

「ジョー、この女が芳江だ」

片目をつぶって、ハリーが言うのと、

「この女子大生が桜子さ」

ジョーの黄色い手は、黒髪をつかんで、桜子に頭を下げさせた。芳江と呼ばれる美婦人は、うつむいてしまっていた。

「この女には子供がいやがるもんで、なかなか連れ出すのに手間がかかってな、ジョー、それでおそくなったんだ」

「男の子か？」

と、ジョーは芳江にきいた。

「ノー。女の子です……」

「赤ん坊さ、まだ」

ハリーは、だみ声で言って、

「さ、トイレに行ったり！」

と彼女のなで肩を押しやった。

廊下で芳江は羽織りを脱がされ、そしてハリーとともにトイレの中へはいった。ドアはあけたままだ。

「見学しようぜ」

桜子の耳たぶにジョーの熱い息が触れた。パーティーの特殊な意味をすでに悟って、物も言えず奇麗な顔を青ざめさせている桜子の、「いやー」という拒否は、しょせんむなしい。たくましい腕に抱きすくめられて、からだは宙に浮き上がり、廊下を運ばれて行った。

芳江は、顔を壁にねじ向けていた。髪をいじられたと見え、便器の縁に触れるほどに長と乱れ下がっていた。水洗式だが、便器はジョーの家のサイホンジェット式ではない。水洗式和風便器である。

「芳江、二分間こらえろー」

ハリーがどなった。

「ううっ——む、むむう——ああっ——」

「まだこらえるんだー」

「むむう」

苦悶する美婦人の様子を、あごをしゃくつ



て、けたけたとハリーがあざ笑うと、ジョーも歯をむきだしてにたにた笑いながら、「桜子、遠慮せずによく見な！」

桜子のからだをはがい絞めにして、ジョーの指は彼女のまぶたをこじあげた。

「ノー……見たくないわ——見たくない」

桜子は身もだえたが、ジョーのたくましい腕は、びくともするものではない。クモの網にかかったチョウのように、むなしい抵抗である。ジョーは、かえって、桜子の身動きをたのしむように、白い雪のような足にちびるを押しつけていた。

「ハリー、もうゆるして……」

芳江が叫ぶ。壁に、その叫びが悲しく高くひびいた。二度目の流腸をハリーは加えた。

刑罰の室

客間の隣の広い室を、『刑罰』の室と、か

れらは呼び合った。この女どもを刑罰の部屋へぶち込もうぜ、とハリーは、嗜虐のよろこびで光る目で、そう叫ぶように言い、

「刑罰の室へ！」

とジョーも歌うように言った。ふたりの醜いニグロは、すでに皮鞭を手にし、それをびゅうびゅうと素振りして、芳江と桜子をその加虐室へ追い立てて行った。

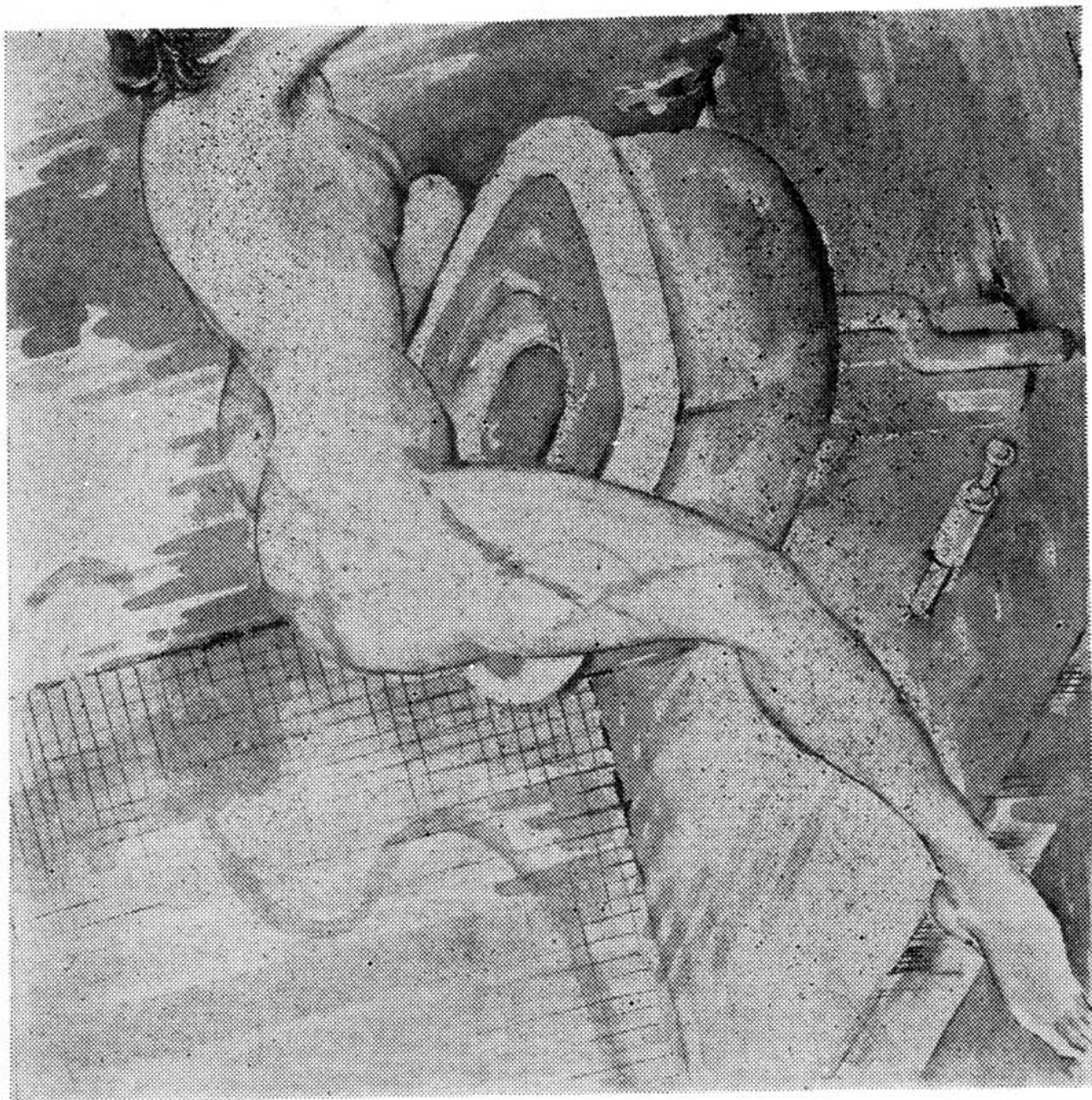
畳で言ったら十畳敷きあまりの広さを持ったその室の、四囲の壁はすべて鏡張りで、天井には鉄骨が組み合わされ、まるでサーカスの舞台のように、鉄骨から何本もロープと鎖が垂れ下がり、トゲのある鉄のベッドがあり、ハリツケ台があり、電気仕掛けの尻打器が備えられていた。

鏡の壁は、それらの刑具を冷ややかに、幻想的に写していた。

着物を脱ぐ芳江の姿が四つの姿で写った。

彼女は、この特殊な責め部屋に、すでに何度かなじませられていると見え、あきらめきった態度で、肌を脱いでいる。

すっかり脱ぎ終わって、その白い美しい女盛りの裸身を、芳江がハリーの前に立たしたときもまだ、桜子のほうは、上着も脱ぎ得ずに、ジョーの足もとにひれ伏して、



「お願いですから、ふたりきりで責めてください……！」

鞭を首に掛け、ジョー・ブラウンは薄笑って見下ろし、ハリーはけたけた笑っている。

「願っても、どうせむだよ、お嬢さん」

芳江が小声で言った。彼女は全裸の姿に白金のイヤリングだけを妖美にきらきらきらめかせ、声を高めて、「むだなのに」と言った。それを聞くと、桜子はおえつしながら、清楚な濃紺の制服を脱ぎだしていった。

脱衣をためらった罰として、桜子は四つん這いで室を一周させられた。

次に、もう一度、今度は芳江といっしょに並んで、二匹の犬のように、室を一周した。芳江の黒髪は床をすり、豊かな乳房がせつなく揺れた。

パ、パ、パ、はこうしてはじめられた。

奇妙なことに、ジョーはオーボエを吹き、ハリーはだみ声を張り上げて黒人独得の、陽気で、またなんとなし物悲しい歌をうたう。

神よ くたばれ

この世のじゃまっけなやつ

おまえがいなくても

日は昇る

夜は絹のようにおりて来る

人が生まれ

人が死ぬ

おまえなんざなくても結構

われらは黒き悪魔

女を鞭打たん！

女を鞭打たん！

ああ

神なんざくたばれ

かれらの白い目は、加虐と歌の調べとに陶酔し、熱っぽくうるみを帯びて光っていた。

女の苦痛の悲鳴は、そのふたりの頭の上で絶えまなくほとばしっていた。

天井の鉄骨から垂れ下がる太いがんじょうな鉄鎖に、芳江も桜子も両手万歳の形で宙吊りにされ、電気仕掛けの自動尻打器の、飛び出しナイフのようにびしっと鋭く襲う針金の鞭で打たれているのだ。一メートルほどの長さの針金の鞭は、びゅっとしなつて箱から飛び出して来ると、横なぎに、びしっ！と痛烈に臀を打ち据え、もう一度反復して、びしっ！と打ち据え、それから箱の中へ一気に沈んで行って、また、たちまちびゅっとしな

って箱の中から飛び出して来る。箱の中では、いうまでもなく、モーターがめぐるっている。ゴトゴトとぶきみにうなった。

「ひい——！」

桜子が甲高く叫べば、

「ああッ！ 痛いッ——」

と芳江も叫ぶ。悲鳴の二重奏だ。ふたりの足の下で、ちぢれ毛の黒い頭が二つ、ひとりはおーボエを吹き、ひとりはだみ声で歌う。加虐のよろこびと歌のリズムとに、渾然融和し、白い目を熱っぽくうるませて酔いしれている。

……

われらは黒き悪魔

女を鞭打たん！

女を鞭打たん！

ああ

神なんざくたばれ

乳房をたたく

美川桜子が、たそがれの校庭を足早によこぎって校門へ向かって来ていると、
「お嬢さん……」

横合いから声がした。ものういその遠い声に呼ばれて桜子が立ちどまると、大きなイチヨウの木陰から、ひっそりと芳江が姿をあらわした。嬰兒を胸に抱いて。――

彼女は、黒みがかったお召しを着ていて、顔もうなじの色も、ひときわぬけるような雪の白さで映った。

「このまえは、おたがい……」

芳江は、白い美貌を薄赤くして言った。ハリーの家での、あの責めパーティーの模様がまざまざよみがえって、桜子は耳たぶまで燃えるように赤くなった。

「……なにか、あたくしにご用？」

「ええ、ちよっと」と芳江は小声で言い、「行きますよう」と歩みをうながした。

「授業が終わるのを、ずっと待っていらしたの？」

「ええ、二十分ほどね」

「どういうご用？」

「別に……」

芳江は微笑して、桜子の顔を見た。その美しい微笑に誘われて、美少女のくちびるもほころびた。

丘の上には、きょうはジープの姿はない。おーボエの音色が、丘の斜面を流れてもいな

い。

しかし、どこかそこらに、ハリーのワゴンがひそんでいるのではないか、と桜子は、なんとなくあたりを見回すふうだったが、道は制服の生徒たちでいっぱい、どこにも車の姿はなかった。

丘を越えて家路につく生徒もいる。芳江のすすめで、ふたりもまた、枯れ芝の斜面を登って丘を越えた。

「ここよ、あたしのうち」

丘のすそ手になった住宅街の、神社の近く、の古びた平家の冠木門に「菊村芳江」と陶製の表札が出ている。

「どうぞおはいり」

芳江は桜子の手をひき寄せた。

「雨だわ……」

庭先のハツ手の葉を、しめやかに霧雨が濡らしたのを、桜子のほうが先に気づいた。

紅茶ちゃわんを座卓に置いて、ガラス戸のほうへからだをねじり、彼女は、庭に降る静かな雨をながめた。

ジョーと知り合った夜、かれと並んで舗道を歩きながら、こういうふうにもなく霧雨が町へやって来ていた。ジョーとのなれそめ

のことを芳江に話していたところだったから、桜子は、霧雨の様子に、なんとなくころをひかれた。

「今度は奥様の番だわ」

目を戻して桜子は、芳江に言った。

「ミスター・ハリーとはどうして知り合ったの？——いや、言わなきゃあずるい」

「そうね……」

ほおづえを突いて芳江は微笑して、

「なんとなくだわ」

「まあ、ずるい」

「かれの歌を聞きに行っているうちに、なんとなくひかれてしまったのね」

と、芳江は、まじめな表情で言った。

ハリー・キッドはジャズメンで、盛り場のデラックスなナイト喫茶でドラムをたたき、かつ歌をうたう。歌手兼ドラマーだ。子持ちの未亡人の菊川芳江は、ハリーのものになってから、洋裁店の縫い子の仕事をやめ、ハリーから月々手当をもらって暮らしている。

ジョー・ブラウンのほうはといえば、これは、あるプロ拳のコーチである。オーボエはしろうと離れて上手だが、ハリーの生きる芸能界とは無縁であった。無名のボクサーを鍛え上げ、リングへ送るのが彼の仕事であ

る。彼にコーチされると。選手のからだは皮帯のように強靱に、精強になった。

やがて桜子は、雨が小降りのように帰るところにして腰を上げた。芳江は別にひきとめようとはしなかった。

「むりに引っ張って来て悪かったわね、桜子さん」

玄関で傘を差し出しながら芳江は言った。

「いいえ、いろいろお話ができてよかったわ」

たがいの胸に親密な感情が通い合っていた。親密感をかもすために、芳江はわざわざ、桜子を家によんだものにちがいがなかった。そうして、それは成功した。

「これから遊びに参りますわ」

桜子はそう言って、雨のそぼ降る中を帰って行った。

桜子が辞去してしばらくしてから、ハリーのワゴンが菊川家の前に停まった。

芳江の黒い小柄な恋人は、部屋に通るとすぐに、芳江に胸を出させ、その豊満な白い乳房を手の甲でびしっぴしっとたたいて責めつけた。乳の張った乳房は特別に痛かった。

はなはだしい苦痛にあえぐ美女の凄艶な表情をたのしみながら、ハリーは、手をゆるめず、しつように乳房を責めつけた。

ナゾの西洋館

乳房責めが許されると、芳江は身づくろいをし、眠っている嬰兒を胸に抱いて、ハリーの車に乗った。

ハリーの家の、あの刑罰の室で、じっくりと責めを加えられるのだろう。彼女は、それを観念し、車のクッションに、すなおに身を落とした。

霧雨はほとんどやみかけていて、町には夜が来ていた。ネオンのきらめく繁華街を、ハリーは歌を口ずさみながら車を走らせた。芳江は黙って、彼のハミングに聞きほれていた。コースが途中から違って来た。ハリーの家へ向かう道順ではない。

「どこに連れて行くの？」

芳江が言うと、

「いいところさ」

「あなたの家で責めるんじゃないの？」

「むろんだ。だが、その前に、連れて行くところがある」

ハリーは片ほおに笑いを刻んでいた。

場末の町の一劃にある暗い西洋館だった。暗い廊下を、芳江は裸体で歩かせられた。フラッシュが幾つもたかれ、何人かの男た

ちが彼女の裸形をカメラにおさめた。

「どうしてこんなことを……」

廊下を往復して戻って来ると、芳江は、ハリーの胸に裸の胸をもたせて、泣き声で言った。暗い廊下のすみで、だれかが彼女の嬰兒をあやしてくれていたが、その黒い人影だけは男性ではなく、どうも少女のようだった。

「よし、もう着物を着ていい」

ハリーが芳江の裸をたたいた。

その西洋館にいたのは、わずか十分あまりだったが、そこに漂う妖しい不思議な雰囲気は、外に出てからもなお、霧のように芳江の感覚をひたしていた。

芳江は当然わけをただしたが、

「ノー・コメント」

すげなくハリーは首を横に振った。車は、

フル・スピードで走り出した。

家に着くと、ハリーはすぐに芳江をトイレ

へ連れ込んだ。

便器にまたがって、むきだしにした白い臀を、ハリーはびしびしとたたきながら、浣腸責めを執行した。

「ハリー、たたくのはあとにして……」

芳江は悲しげに言い、うめいた。

二つ三つと、からになった浣腸器が、タイ

ル床に捨てられて行く。

「おお、ハリー、もうかんにんして……」

芳江は苦悶した。

「鞭で打たれたほうがよっぽどましだわ」

部屋で、突然、嬰兒が火のついたように泣きだした。ハリー・キッドは舌打ちして、浣腸器を投げ捨てた。それが五つ目の浣腸器の殻である。芳江は、顔色が蒼白くなって、ほとんどぐったりとしてしまい、便器から腰を上げる気力もない様子だった。嬰兒は乳を慕って火がついたように泣きつづけている。

「早く乳を飲まして、あのうるさい泣き声をやめさせろ！」

ハリーは猛烈に芳江の臀をひっぱたいた。

芳江はよろよろと立ち上がった。

嬰兒の柔らかい口に乳房をふくませると、吸うだけ吸って、それから無心に嬰兒はまた眠りについた。

「眠ったわ……」

芳江はふりむいて言った。美しいママは、ほおのあたりが妙に薄赤くなっていた。寒そうだった。さっき奇妙な西洋館で裸で歩かせられたのがたたったものらしい。熱がでてきていた。

だがハリーは、芳江が悪寒にふるえていて

も、冷酷に、彼女を刑罰室で全裸にさせ、トゲの植わった鉄板の責めベッドの上に、その艶麗な白いからだを腹ばいにさせて、手足をひろげさせてベッドの上に縛りつけ、背中と臀部へ激しい鞭打ちをしつように加えた。乳房と腹は、トゲで責めつけられた。

尻を焼く

桜子はとき色花模様の和服を着ていた。そのきわだってつややかな姿で、町角の喫茶店の、通りに面した席にすわっていた。通りには、三月の薄暖かい日が降っている。天気の良い日曜日なので、人通りがばかに多い。

コーヒーのお代わりをして、もうずいぶん長く桜子は、こうして、ジョーがN拳クラブから出て来るのを待っているのだが、しかし、いっこうに、黒い恋人は出て来る様子がない。

向こう側のN拳クラブの前に、かれのジョーがほこりだらけの姿で停まっているから、かれがクラブにいることは、まちがいないだろう。

クラブに行けばジョーに会える。しかし桜子は、なんととはなし、皆に顔を見られるのが気がひけるのだ。クラブに電話を入れること

さえも、なんだかためらわれてならない。

桜子は、だが小一時間近くもたつと、とうとう電話を借りていた。

おれひとりなのだ、とジョーは言った。それがもう十日近くも会わないでいた恋人の、冷たい感じのする声だった。どうしたものか、ひどく冷たい感じがあった。桜子は、たまらない寂しさと不安に襲われて、喫茶店からクラブまで走るようにして行った。とき色のでやかな着物のすそを風にあおらせて。

広い練習場の壁ぎわの片すみで、ジョー・ブラウンは、ほんとうにたったひとりでイスに掛けていた。黒い顔の中で目だけがいやに白く底光っている。かれは、その目を一度ゆっくり閉じ合わせてから、ここに来い、と落ち着かないでいる桜子にあごをしゃくった。「会いたかった、ジョー……」

あれ以来、丘の上で一度も私を待っていることはなく、だれかほかにいいひとができたのでしよう、と桜子はすねるように言った。着物姿のせいばかりではなく、その桜子の態度は、ひどくおとなっぽく、色っぽかった。

「うふふ」

ジョーは笑った。

「……ひとところ忙しかったんでな」

「うそよ」

「うそじゃねえよ。試合が五つもあったんだ。おかげでコーチのおれはくたくたさ」

「信じるわ」

桜子はほーっとした表情で言った。電話の声が冷たくひびいたのも、ジョーが疲れていいたせいだろうと思い直した。二階へ上がれ、とジョーは命令口調で言った。

「ここの二階で責めるの」

「おれの家はたたんでしまったよ」

意外なことを、かれは言った。

「……」

「上がれ」

びしっ、と臀に手が飛んだ。

二階は、わりに小奇麗な洋室だったが、そこには、ほんとうに、ジョーの家の家財道具が、目ぼしいものばかりえらんで、移されていた。

桜子が何度行っても、行くたびにかれの家に錠がされていたわけだが、これでわかった。すでにあき家になっていたのだ。それはわかったが、なぜ家をたたんでしまったのかはわからない。びっくりしてしまっている桜子に、

「ハリーのやつも家を売ったぜ」

とジョーは言うのだった。

「ハリーも……？」

「うむ」

ジョーが目顔で命じたので、桜子ははじらいを隠しつつ、帯をほどきながら、

「いったい、どうしたわけ？」

「おれとハリーとで、近いうちにパーティーを催すんだ。その資金さ」

ジョーは、それだけ言い、それ以上は説明しようとしなかった。

二階にトイレが付いていて、桜子は、そこにはいつて、しゅしょうに浣腸責めを待ち受けた。若いしなやかな白裸の姿が可憐に映った。浣腸器でポケットをふくらませて、ジョーがやって来た。

桜子は、ふいに涙ぐんで、その濡れた瞳で一度ジョーの顔を仰ぎ、それから両手を差し伸べて、手錠で水道管に固定された。

「三分間こらえろ」

と、ジョーは腕時計の秒針を見守り、桜子は身をよじってあえいだ。

「二分にして……二分に！」

「三分！」

「むむう——」桜子はひと声高く、「かんにんよう」

「だらしないお嬢さんだ」とジョーはにーっと歯をむきだして、

「罰だ」

「あ、熱……！」

ロンソンのライターの炎の舌先が、臀部をあぶるのだった。

「ひーッ」

甲高い悲鳴がほとばしった。

部屋へ戻って、鞭打ちを加えられると、赤い血アザが幾条も無残に両臀に交差した。激痛に耐えきれなくなると、桜子は手錠の金属音を立てて横ざまに倒れ、哀願しながら鞭をのがれようとはいずりまわった。

そのむだなはないあがきを、くねる腰の線や乳房の揺れを、ジョーはたのしみながら、皮鞭を大きく振りかぶって、うなりをたてて振り下ろした。

桜子の臀は血まみれになった。

血まみれの肌に、そのまま下着をとおして行く桜子の悲しい姿を、ジョーは、オーボエを吹きながら満足した表情でながめていた。

桜子は、陶磁のような白さの顔色で、美しいまゆが苦痛に痙攣していた。とき色の和服姿に戻ると、桜子は女に立ち戻った感じがし、身を二つに折るようにして、非情な恋人

の前によろめきながら進み寄って、黒い顔のぶ厚いくちびるに触れ、

「あたしを捨てないで……」

と、せつない声音で言うのだった。

「おまえを連れて行くところがある」

と、キスのあとにジョーは言った。たくましい膝の上で、きゃしゃな身をよじり、

「責めるのはもうかんにんして——」

桜子が嗚咽すると、

「もう責めはしねえよ。あるところだな、ちよっと裸になって歩くだけさ」

「い、いやだわ、そんなこと……！」

「なに言ってるやがる。おまえは、おれの奴隷なんだぞ、おい」

ふるえる白いえり足に、かれはくちびるを押しつけた。

ジープに乘せられてもまだ、美川桜子はかすかに嗚咽しつつづけていた。うしろのシートに腹ばいになって、奇麗な手が顔をおおっていた。ジープの幌の中にも、薄い夕暮れが漂い、もう、いちはやく灯をともしはじめた繁華街を、ジョーは飛ばして行った。

繁華街からずっと遠い、場末の町の一劃にある暗い西洋館だった。

その西洋館の暗い廊下を、桜子は裸体で歩

かせられた。

幾人かの黒い人影がうごめき、フラッシュの青白い閃光が幾つも放たれ、傷ついた痛ましい桜子の裸形が、カメラに収められた。

パーティーのために

もう二度と芳江とかつてに会うことはならない、おまえは奴隷らしく孤独でいなければならぬ、と、その夜、別れぎわに、ジョーは桜子に言った。西洋館の玄関の石だたみに、桜子はひざまずいて誓わせられた。

連絡はこっちからする、かつてにクラブにやって来てもいけない、とジョーは、言い加え、桜子はもう一度ひざまずいて、それも誓った。

車で送ってくれるでもなく、玄関の前でジョーが別れて行ってしまおうと、桜子は、とうもない寂しさに襲われ、しばらくその場にたたずんで動けないでいた。

ジョーが桜子に言ったのとそっくりのことを、ハリー・キッドもまた、二、三日のち、芳江の家に来て彼女に命じた。ハリーは、どうやらジョーから助言されたものらしい。

芳江もまた、黒い恋人の足もとにひざまずいて誓わせられた。



「おれの家は売っちゃったんだ」

と、ハリーはだみ声で、言って笑った。

芳江がびっくりしてわけをきくと、「大きなパーティーをやるためさ」

それだけしか、かれは答えない。芳江は質問をあきらめ、みずからすすんでトイレの中へはいって行った。

「赤ん坊は大丈夫だろうな。このまえみたいに泣きだしたりしねえだろうな」

ハリーは浣腸器をとりだした。

「さっきたっぷりお乳を飲ませましたから」

「そうか」

まるい豊かな白臀をびしゃびしゃとたたきながら、ハリーは片手で浣腸を執行した。いつものように、何回となく繰り返すしつような苦しい責めである。そのうえ、黄色いてのひらがびしびしと臀をたたくのだった。

「ハリー、ゆるして……」

やはり、芳江は、きょうも音を上げた。顔が青ざめ、便器からやっと腰を上げていた。

たすきのように肩にヒモがまわされ、それが手綱になった。四つん這いのウマになったその芳江の背中に、ハリーがまたがると、きしゃな中肉の背の骨はきしきし、芳江は懸命にひじを突っ張ってハリーの重い体重に耐え

た。

「歩め！」

ハリーは手綱片手で、短い小ぶりのなめし皮の鞭で、美しい人間馬の臀を打ちすえ打ちすえ、廊下を歩ませて行った。

台所までやっと這い進んで行くと、芳江はへたばって突っついてしまった。ハリーが激しく鞭をふるっても、悲鳴もかすれ、美しい馬は、冷たい板の間に横わったまま、ただもう鞭で打たれるままになっていた。

悲鳴がとだえ、死んだように見えた。それでハリーは、思わず色を変え、鞭を放した。

「おい」

肩をゆさぶると、反応があって、

「ハリー……」

ささやくような弱々しい声を出し、芳江はキラキラと目じりになみだを光らせた。

「もっと打ってもいいのよ……」

と、言う。ハリーのくちびるから、ひくく歌がもれだした。

神よ くたばれ

この世のじゃまっけなやつ

おまえがいなくても

日は昇る

夜は絹のようにおりて来る

人が生まれ

人が死ぬ

おまえなんざなくても結構

われわれは黒き悪魔

女を鞭打たん！

女を鞭打たん！

ああ

神なんざくたばれ

醜い黒人としてこの世に生をうけた運命への呪咀と、なげきとが重く底に流れるその歌の調べに、ハリーはみずから酔い、白い目を妖しくきらめかせて、ふたたび高く長鞭を振りかぶった。ハリーの歌に、生気を吹き込まれたように、芳江は腰を胴よりもずっと高くして、けなげに鞭がなるのを待ち受けた。

数珠つなぎの裸女

その夜は皎々とした月明だった。春月が中天にさえ光っていた。

美川桜子が、とある公園でジョーと落ち会った時刻は八時二十分ごろだった。八時までに来いとジョーは連絡しておきながら、二十

分も遅れて来た。桜子は、月光に染まって、その二十分をおとなしく待ちつづけていた。

「今夜がわれわれの大パーティーだ」

ジープをスタートさせて、ジョー・ブラウンは言った。声はずんでいたし、もう目が何かきらきらと酔った輝きだった。その黒い横顔は妙に美しく、桜子の目に映じた。

パーティーの場所はどこなのか、かれは言わないが、桜子はおよそ察しがつく。

あの西洋館にちがいないだろう。

「捨てないで、捨てないで。いつまでもあたしを奴隷にしている」

走る車の中で桜子は、ジョーの耳にくちびるを押しつけてそう言った。

「愛しているわ、ジョー……心から」

場末の区画にはいった。桜子が思ったとおり、やはりあの奇妙な西洋館へむかっているのだ。

西洋館の石門から、月光に白く輝く小じやり敷きのポーチへ、勢いよくジープはすべり込んだ。十数台の車の列の中に、すでにハリーのワゴンが停まっていた、玄関のそり屋根の下に、小柄なハリーの姿がたたずんでいて、手をあげた。その様子では、かれは受付係を買って出ているふうだった。おびえる桜子の

手を、ジョーはひっ張った。

桜子が、芳江の姿をみとめたのは、屋内にはいつてからだだった。広い廊下の、一方の壁ぎわにずらりと二十人近い数の女たちが、いずれも裸で、うしろ向きに一列に並んで両手を差し上げ鉄管に手首を縛られて、立っていた。見ると足もとにも鉄管が差し渡され、彼女たちの足首は、それに固着されている。咬咬と電灯がともり輝き、無残に明るく裸女群を照らしている。

菊川芳江は、その中ほどに縛られていたが、壁に顔をむけ、目をして、桜子を目にとめることはなかった。女たちはみな、壁を向いてかたくまぶたを閉じていた。

ジョーの手によって、一番てまえ端に桜子は縛りつけられて立たされた。脱がした衣服をジョーは手に拾いにとって、こういった。

「この女たちはみな、人妻や女子大生や令嬢たちで、しろうどばっかした。おれたちは、全財産をつっ込んで、これだけの女たちを狩り集めたんだ。金で契約したんだ。このひと夜のために、莫大な金で！ カメラでうつしてえりすぐったすばらしい女たちばかりなんだ！」

おそらく桜子が最後のメンバーだったのだ

ろう、鞭打ちが寸秒を置かずはじまった。豪華な責めパーティーの開幕だった。

……

われらは黒き悪魔

女を鞭打たん！

女を鞭打たん！

ああ

神なんぞくたばれ

十二、三人の黒人たちが、その呪咀と怒りとなげきのこもる歌を合唱しつつ、手に手に鞭をとって裸女を打ちすえながら、ぐるぐるめぐり歩いた。

横列の裸女群は、悲鳴をコーラスした。背骨をきしませ、腰をゆすり、次から次へと襲う鞭の激痛に、泣きわめいた。

鞭をふりふり黒人の列は、とめどなくぐるぐるめぐり、呪文のように歌の合唱は、たんたんをつづいた。歌声とすさまじい悲鳴の二重奏が、廊下いっぱいにこだました。

——ジョーとハリーが、日本を去ったのは、その翌日だった。黙って去った。



藤 美

愛 妾 惨 殺

小田竜四郎は、ひとり身の、味気ない晩飯あじきを食べると、ごろり、満腹感から横になった。「うむ、今夜は冷え込むわい、この寒さだと明日は大霜になるわい」
寒やも二月だけに、江戸の風は冷たい。木枯らしが無気味な音をたてて吹きすさぶ。

トン、トントン、だれかが雨戸をたたいた。「小田氏、拙者せっしゃじよ、杉下じゃ」戸外の声は低い。あたりをはばかりているようにも聞こえた。「あッ、ご家老かろう」
杉下という氏名を聞くと、竜四郎は、あわてて座を立った。「ご家老。さ、さ、むさ苦しいところです

白 亜 楼

血 の 紅 白 試 合

志 乃 田

が、どうぞ……」

竜四郎は、雨戸をあけて、丁寧に迎え入れた。

「さっそくじゃが竜四郎、そちに折り入って頼みたいことがあっての」

老武士のひとみが鋭く光った。

「ハハッ、竜四郎でできますれば……」

「そのように堅くせず。竜四郎、実は……」

と、老武士は、戸外に鋭い視線を向けると膝を押し進め、

「若殿に困ったことができての」

「えッ、若君様が。で、ご家老、お困りというのは、若君がご放蕩でも」

「単なる放蕩なら、わしもさほど心配はいたさぬが、それがのう、竜四郎」

と、竜四郎がきいた、家老と呼ぶ老武士の話によると、こうであった。

老武士は、丹後の国、宮津藩の城代家老・杉下玄内であった。

当時、宮津藩城主・奥平少将治昌は、二年前から病床にあった。治昌は五十二歳、まだ病いに臥す年齢ではない。この治昌、生まれつき不幸にめぐり合うような運命にあったのか、三十八歳の時、正妻・八重をなくした。

二、三年は、八重の優しさと美貌に惹かれて

か、女体から遠のいたが、それも長くは続かなかった。八重が死んで四年目、側近のすめめで、腰元千江を側女に迎えた。治昌四十二歳の時であった。

久しく忘れていた治昌の情炎が、若い千江によって掻き立てられた。夜ごと、治昌は、若アユのような千江を愛した。

だが、千江が治昌の寵愛をうけて三年目。ちょうど夏も八月の、ある朝のことである。

千江の方の惨殺死体が、裏庭で発見された。

何者かに殺害されたのである。しかも、その殺し方は、見るも無残に、双眼がえぐりとられ、高い鼻がそがれていた。さらに、黒髪は、すっかり立ち木にゆわえられてあった。

察するところ、犯人は、千江の髪を樹木に縛り、恐怖におののく彼女をシリ目に、女の命である乳房を一刺しにしたうえ、まだぬくもりのある千江の小高い鼻をそぎ、両眼をえぐったのだらう。

「うむ、これはヒドイ……」
検死に当たった役人たちも、あまりのむごたらしさに、眉をひそめたほどだ。

愛妾・千江の方を失った治昌は、嘆き悲しんだ。やがて、日がたつにつれ、狂暴性をおびてきた。

それから二年、千江の死がからだにひびいてか、治昌は病いに臥したのである。こうして約六年、歲月とともに治昌の病いは悪化、あしたもわからぬ状態を保っていた。

「そのあいだに、よくあることだが、お家をねらう悪人が陰謀を企みはじめた。そして、若君をそそのかし、主君父子を廃人同様にしておぼろげにしてしまおうというのだ。その張本人は次席家老の大貫大膳である。」

やがて、若君・長二郎の姿が時おり城内から消えるようになった。

「ご家老、最近、若君様がお城を……」

「ふむ。そうらしいのう。で、貴公、なにか心当たりは……」

「それが、サッパリ」

家臣たちのだれもが、異口同音、長二郎の行き先がどこであるかはわからなかった。

ただ、わかっていることといえば、夜中にかかわらず、裏庭に出ることであった。ある夜、玄内の命を受けた若い家臣が、長二郎が部屋を抜け出し、庭伝いに松山に向かったさうい、そっと尾行したときだ。ちょうど、長二郎が、治昌の愛妾・千江の方が惨殺された築山に來た時、ピカリ、白光がひらめいた。

「う、うううッ」

若い武士がのけぞった。みごと、武士は、胴中深く斬り裂かれ、一刀でこきれていた。

お家の仇

「と、いう訳で。竜四郎、おぬしの気持ちをはわかる。だが、惚れた好いたの場合ではない。千江も、とうにこの世にない身、しかも、ただの死に方ではない。のう、わかってくれ、拙者の心痛とお家の安泰を……」

ここまで話すと、玄内は、家老の身分も忘れ、素浪人・竜四郎の手のひらを力よく握りしめて哀願した。

玄内の両眼に、キラリ、涙がにじんだ。

「で、お家をねらうのは大貫大膳」

竜四郎のひとみが怒りの色に変わった。

「さよう。大膳は、この拙者の跡目をねらいおる。さらに、あわよくば、長二郎殿をなき者にして宮津藩を——」

「ふむ。大膳め！」

竜四郎の眉が怒りにふるえた。

小田竜四郎は十年前、治昌のもとで、勘定方であった。

美男の竜四郎は、若い腰元たちから、好かれた。なかには、そっと恋文さえ手渡す腰元もいた。だが、竜四郎は、剣の道に励んだ。

指南役の小野寺鉄斎も、竜四郎の剣に舌を巻いたほどだ。

その堅物の竜四郎にも、恋する女人があった。それが千江であった。幾度かご法度であるはずの城中で、愛をささやいた。将来を誓う仲にさえ愛情が発展した。だが……愛する千江の美貌は、城主・治昌の目にとまった。

「千江を側女に！」

鶴の一声、千江は、涙をのんで、愛する男、竜四郎から、治昌の寵を受ける運命にあったのだ。

千江を失った竜四郎は、翌日、宮津藩をあとに江戸へ出た。そのさい、路銀まで与え、竜四郎を慰めたのが家老の玄内だった。

「ご家老、千江殿の恨みは竜四郎がキツと」

「竜四郎、よくぞ言ってくれた」

姉妹責め

深夜——そうである、草木も眠り、家の棟が三寸沈んで見える、という丑満刻であった。ここは宮津の城下町の一隅。

「若殿。こよいは、美しい姉妹責めをご覧に入りたいと存じ、お招きした次第で」

と、ニヤリ、下品な笑いを浮かべているのは、次席家老の大貫大膳。それにこたえるか

のよう、酒杯を口に当て、これまた、ニタリ、気色の悪い笑いをほおに刻ませているのは、驚くかな、宮津藩の若殿、長二郎君であった。

「大膳、早よう、そちのいう姉妹責めというやつを見せてほしいぞ。うん、昨夜の軍鶏責めより、ぐんとおもしろいだろう、のう」

女人のような紅い唇を酒滴でヌメヌメと光らせながら、長二郎は、好奇にひとみをギラギラと輝かした。

と、それを待ちうけていたように、重い唐紙がスーッとすべるように左右に開いた。そして、

「若君、いかがですナ。あの美しい姉妹の背中合わせは」

「大膳が目を細めながら、長二郎を見つめた。

「うむ。美しい女人じゃのう」

長二郎のまなざしが怪しく燃えはじめた。

それもそのはず。年のころは十七、八歳の女と、花恥ずかしい十五、六の娘ふたりが、燃えるような緋の長じゅばん姿で、しっかりと背中合わせに縛られていた。しかも、泣き叫ぼうにも、声すら出ないよう、口中には手ぬぐいが含まされていた。

「若君、右側が姉でお花。左が妹でお京。若殿はご存知ないと思いますが、両名は、ご城

下で材木商を営む田島屋加兵衛の愛娘。いずれも、まだオボコ。これ、清乃、早よう若君に芝居を——」

大膳は、姉妹ふたりの身元を説明すると、あごをしゃくった。と、それが合図なのだろう、ふすまの陰から、腰元がふたり、縛された姉妹に小走りに駆け寄った。そして、長二郎に一礼するや、姉妹のじゅばんに手をかけた。その時、キラリ、腰元ふたりの手に白刃がひらめいた。懐剣である。

「う、ううう……」

「う、ううう……」

一瞬、お花とお京は、恐怖の悲鳴をあげた。だが、声にはならない。身をよじり合いながら、冷たく光る刃を見つめておびえた。

「早よう切らんか！」

大膳が一喝した。

「はッ」

腰元たちが、懐剣を、姉妹の腹部に当てがった。

「ううッ、うう……」

「うッ、ううッ、うう……」

お花とお京のふたりは、鋭い切っ先から逃がれようともがいた。その時、白刃が二本、同じ早さでひらめいた。

プスッ！ 静かな広間に物の切り裂かれる音がした。

「う、ううう……」

お花とお京のうめきが同時にモレた。ハシリ、腰紐が切られ落ちていた。かくそうとしても、背中合わせに縛られている姉妹は、どうするすべもなく、自然、白桃のような四つの乳房をあらわにした。

長二郎は、生ツバを飲み込んだ。あまりにも美しく、まばゆい光景であった。長二郎の目が、軍鶏のように血走っていた。

次いでふたりの腰元は、目礼すると、半裸の姉妹の膝に下肢をこごめた。これまた、緋の湯文字だけに、白い素脚が灯火に美しく折り曲げられた。

「う、うううッ……」

「う、ううう……」

お京とお花があえいだ。美しい柳眉を羞恥からへの字に寄せ合った。それもそのはず、腰元ふたりの手中には、朱腕が握られ、双の白桃にふせられていたのである。そしてその腕が上下に動かされた。そのたびに、

「う、ううう……」

「あう、ううう……」

姉妹はあえぎうめいた。それは、苦痛から

でもあり、恥じらいからでもあった。

「大膳、美しいのう、今宵の余興は」

長二郎は、いっそうひとみを燃やしなが
ら、酒杯をあおった。

「若君、これからが、また一段とおもしろく
なりますれば、ごゆっくりとご観賞を」

ニタリ、笑うや、大膳は、

「苦しいじゃろう。口中の布をとるがよい
ぞ。さぞかし、よい声を張り上げるによつて
のう。さ、さ、早よう若君に、鈴のような美
声を聞かせるのじゃ」

手ぬぐいが、姉妹の口からとりのぞかれた。

「ああッ、お許しを……」

「お姉さま……」

お花とお京は同時に哀訴した。だが、腰元
ふたりの腕責めは、姉妹の泣いて哀願する姿
を笑いながら、なおも続けられた。

「ああ……」

「こ、殺してエ……」

妹お京がまず音を上げた。次いで、姉のお
花が、苦痛と羞恥から、歯ぎしりした。

「清乃。もう一責めするがよいぞ。殺してた
まるものか。死ぬ前に、それ、たンという声
を張り上げるがよいぞ」

そう言う、大膳の声も、この場の異様な光
景に酔いしれていた。

血と血の争い

そんなことがあって二日後、長二郎は、宮
津城から約一里ほど離れた、通称、*「白亜楼」*
とよばれる古寺にいた。

長二郎が上座にすわった。若い腰元が酒杯
をすすめた。なみなみとつがれた酒を、長二
郎は一息に飲み下した。さらに二杯、長二郎
はたてつづけに飲んだ。

「大膳、はよう、その血踊りとかいうやつを

披露するがよいぞ」

長二郎は、朱唇をヌメヌメと光らせて大膳
をせきたてた。

「ハハッ」

大膳大膳、長二郎に一礼するや、

「清乃、若君のご所望じゃ、早よう試合を」

大膳の合図で、腰元ふたりが障子に手をか
けた。寒風が流れ込み、行燈の火がゆらいだ。

寒月がさえざえと中庭を照らしつけてい
る。風がビューッと吹きすさぶ。枯れ葉がコ
ロコロとこるがる。

「さ、勝負じゃ。なにをぐずぐずしておる。
出るのじゃ！」

図太い男の声とともに、ヨロヨロッとひと
りの女が突き出された。

女は地上に身をうずめている。しかも裸身
のままである。わずかばかり恥部を隠すとい
えば、白いフンドシだけである。まだ二十歳
前後なのだろう、美しい女人であった。

「清乃、さ、遠慮はいらぬ。勝負をするがよ
いぞ！」

大膳が残忍な笑いを片ほおにきざませ、も
うひとりの女を見据えた。これまた透くよう
な白い裸身、しかも、地上に身をかがめた女
とは逆な赤いフンドシで前部を覆っていた。





赤フンドシの女がふり返った。女は腰元・清乃である。

「若様、ごゆるりのご見物を……」

清乃は、ニッと長二郎に微笑をおくった。が、すぐにその微笑は、清乃の顔から消え去った。

「さ、刀をとりや！」

と清乃は、小刀を正眼にかまえ、若い女を

正視した。

「お、お情けを……」

若い女は恐怖におびえた。ジリジリっとあ
とずさった。が、

「たッ！」

清乃の紅唇から鋭い気合いがほとばしっ
た。

「ヒューッ」

若い女が絹を裂くような悲鳴をあげた。清乃の突き出した刃が、グサリ、女の乳房を突しつらぬいていたのだ。
さらに、清乃の二の太刀が、はい逃げる女の豊かな臀部をないだ。

「ギエーッ！」

女がのけぞった。その乳房をめがけ、清乃の三の太刀が突き刺された。

「う、うううッ……」

女の断末魔の声が長二郎の耳に飛び込んだ。長二郎は動じない。いや、むしろ、それを好むかのように、

「清乃、みごとじゃ、次の試合を！」

長二郎は、さらに酒杯をあおると、中庭の清乃に感嘆の声を発した。

「清乃、次の女子を」

大膽があごをしゃくった。さらにひとりの美女が、どんとくらやみから中庭に突きころがされた。

白刃をしっかりとつかみながら……と、その女は、

「お、お助けを……」

そう叫ぶと、女は、長二郎のすわっている広間へと駆け込んだ。が、それもムダな仕草であった。

「たッ！」

清乃の気合いとともに、白刃が横に流れた。女は、鋭い悲鳴をあげると、なおも、長二郎に哀訴しようと、縁をはい上がった。その女の黒髪にむんずと手をかけた清乃は、力いっぱい手元に引いた。

「ひーッ！」

女は、さらに悲鳴をあげた。形のよい乳房が左右にゆれた。ズルズルと女は庭先に引きずられた。赤と白とのフンドシ姿、赤フンドシの清乃のスラリとした長身にひきかえ、白いフンドシで前部を覆っている娘は小肥りだけに、豊満な臀部を座敷に向けて突き出していた。

「ふむ。これは美しいのう。大膳、余は満足であるぞ」

長二郎は、ニタリ、満足の笑みを浮かべながら、酒杯をかたむけた。

「お許しを……」

清乃は、どんと、女の背中を蹴り上げた。白フンドシが内股にピタリと食い込んでいた。

「あッ、お、お許しを……」

小肥りの女は、臀部を突き出すような格好で地上に顔を埋めずめた。その豊かな尻をめが

け、

「こうしてくれる！」

血に酔った清乃の小刀は、まるで牛の臀部を突き刺すように、女の肉塊へと刺き立てられた。

「ヒイッ！」

女は飛び上がった。その背先へ、二の太刀がたたき込まれた。

「ぐえーッ！」

女は半回転しながら、ドサリ、凍てた地上にたおれた。また枯れ葉がコロコロと舞いながらころがっていった。

「清乃、みごとじゃ。これ、酒をとらすぞ」

長二郎は、酔眼を見開き、清乃を座に招いた。その長二郎の口から、タラリ血滴がしたり落ちた。

それは、酒ではない。たったいま、清乃の刃にたおれた若い女の生き血であったのだ。清乃は、赤フンドシのまま、長二郎の高座に近づいた。

その時、大膳が目配せした。清乃がうなずいた。

「若君、お命ちょうだい！」

と、清乃の小刀が、長二郎の胸板にひらめいた時だ、

「たッ！」

くらがりから、短いが、鋭い気合いが飛んできた。

「ぐえーッ！」

奇妙な声をあげながら、清乃がのけぞった。白い首すじに、グサリ、手裏剣が刺さっていた。

「うぬ、なにやつ！」

大膳が大刀を握った。それより早く、ひとりの浪人が飛び込んだ。

「くたばれッ！」

浪人は、立ち上がろうとする大膳の頭上をめがけ、拝み打ちに大刀を抜いた。

「うーッ」

一刀で大膳はことされた。浪人は、小田竜四郎であった。

「若殿、よくご無事で」

竜四郎は、長二郎に両手をついた。が、当の長二郎は、

「清乃、みごとじゃ、ハッハハ、大膳、今宵の趣向、長二郎は満足であるぞよ」

酒杯をあおりながら、空虚な目を天井に向けてながら笑った。

北風がビューッと吹きすさんだ。まだ落ち葉がころがった。

コルセット フェチシスト のために



蜂腰の女 (L・ビネの銅版画)



あるコルセット・マニアの考案によって描いた鞭打ちのための保護コルセット



拘束衣 (G・シュミット画)



下 着 の 夢 (F・マスレエヌの木版画)



飾り窓の魅惑（ドーミエの版画）



コルセット・フェチシスト発案の特殊サポーター（女性用）



強すぎるわ！ (H・クレーン画)

長短数十本のパイプによって構成された奇怪なベッドは、巨大な昆虫の触覚のように動きはじめた。そしてこの非情なメカニズムは、寸時の間に、膝と膝の距離をはなした。左右の太腿が「ハ」の字に割れていく。

△サド・スリラー▽

大都会の夜の底で

青山三枝吉

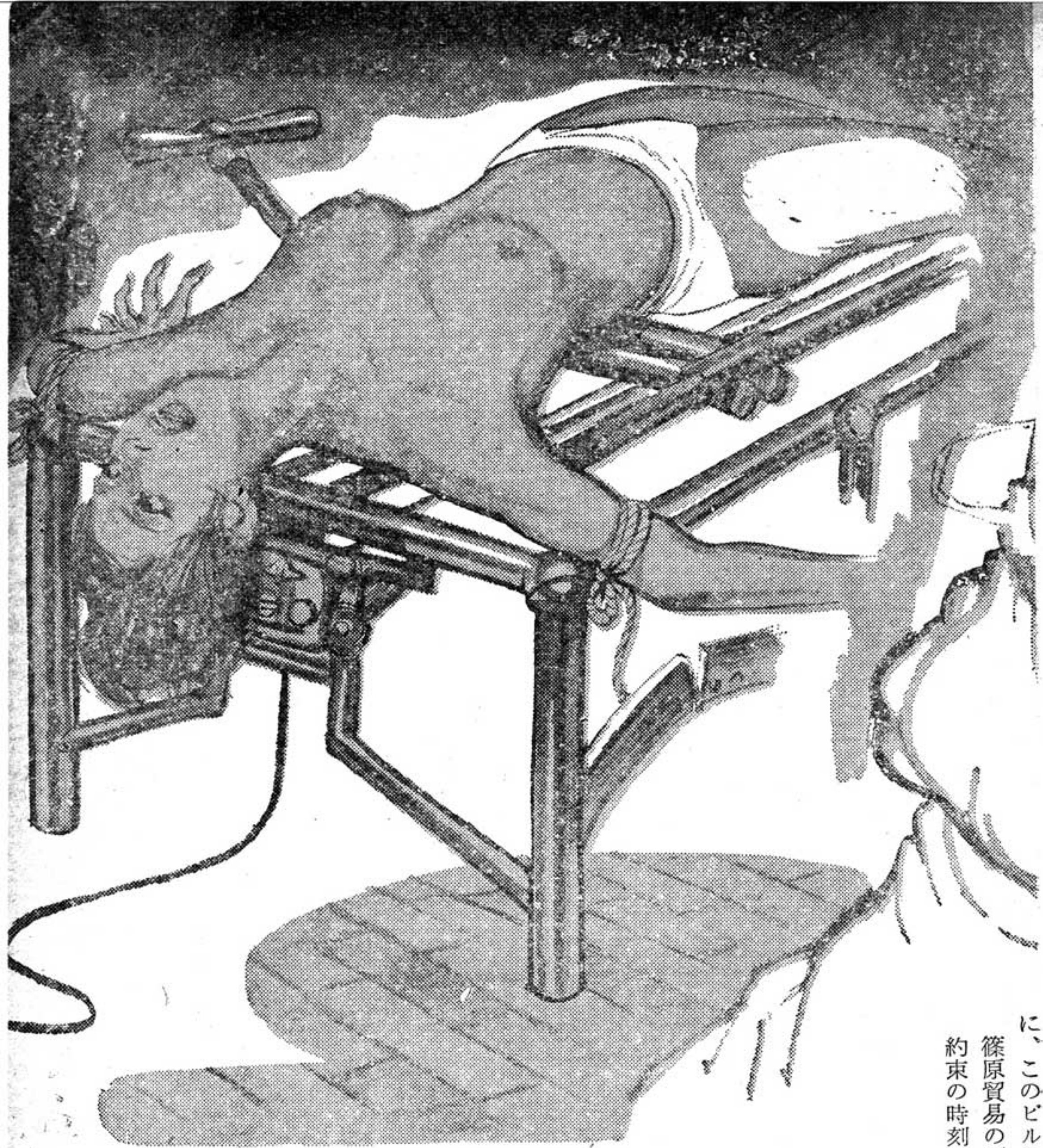
江馬美久・え



1

つい数刻前まで、さんざめき踊り狂っていた歓楽街の屋根の下も、いまは大部分が夜の底に沈みかけていた。毒々しい色で夜空を焦がしていたキャバレーやバーやジャズ喫茶のネオンも、つぎつぎに黒い眠りにおちていく。

美保子は、セントラル・トルコ風呂会館ビルの裏手にきた。ここで人を待つのだ。巨大な墓場のかげのよう



に、このビルの裏の闇は濃い。

篠原貿易の副社長、篠原恭吾との待ち合わせだった。約束の時刻は、午前零時三十分。五、六分も待てばよい。

篠原恭吾の運転する自家用車が、この場所までくることになっていた。時刻が時刻だけに、ほかに待ち合わせる所がなかった。

美保子は、高級バー「ウィップ」の女給。

客との交際は自由だが、勤務中はもちろん、自分勝手な行動をゆるされない。デートが閉店後になるのは、当然のことだった。

——遅いわ。

美保子は腕時計をみた。美保子の背後にそびえるビルの頂上に、消え残っているネオンがある。そのあかりが、彼女の腕時計にわずかに届いた。

——零時二十五分。

いつもは、約束の十分前に、きちんとその場所に車を停めて待っている篠原恭吾だった。美保子に待たせたことは、あまりない。

恭吾の父は、横浜辺に社屋をもつ三流貿易会社の社長ということだった。その

ために、恭吾は副社長の位置にある。父親の片腕として、なかなかのやり手という噂だった。

三流ながらも、莫大な利益をあげている会社だということを、美保子は、ほかの客の口からきいたりして、ぬけめなく調べていた。

美保子にとっては、またとないチャンスに思えた。下品に言えば、絶好のカモである。

バー勤めの女給だが、「ウィップ」は一流だった。

一般のサラリーマンには、ちょっと足を踏みこめない豪華な雰囲気と酒の値段の店である。大会社の部課長クラス以上が顧客に多かった。女給たちもプライドをもっていた。

まして美保子は、すぐれた美貌で、ナンバー・ワンというところである。貿易会社の副社長との交際も、店から外へ出たら対等だった。

おまけに恭吾は、自分かなりの愛情を抱いている、と美保子はみている。誇張していえば、ぞっこん参ってる、と美保子はうぬぼれていた。

——零時三十分。

約束の時刻だ。だが、恭吾の車は、まだ姿をみせない。

美保子は眉をひそめた。

——帰ってしまおうか。

と思った。しかし、短気は損気、と自戒した。もうすこし待てば、恭吾との甘美な一夜がすごせるのだ。ぞっこん参っているのは、どうやら、美保子のほうかも知れなかった。

美保子は、ぬりなおしたばかりの赤い唇に、タバコを一本くわえた。口紅型のしゃれたライターをだして、火をつけた。

カチリ、と鳴った。小さな炎が、美保子の白い美貌を照らした。

この瞬間から、美保子の運命は激変した。

ライターの炎が合図のように、一台の高級車が、ライトを消して、すうッと美保子に近づいてきた。

——あ、恭吾さん。

声にだして遅刻をとがめようとしたが、すぐに彼の車でないことに気がついた。

車の左右のドアが同時にひらいて、二人の大きな男がおりた。とみるや、無言のまま、美保子に迫った。

本能的に、美保子の足が三、四歩しりぞいた。唇からタバコが落ちた。

二人の男は大股に接近し、美保子に襲いかかった。

「あッ！」

しかし、悲鳴をあげるひまはなかった。一人の男の手からハンカチがのびて、美保子の鼻と口をふさいだ。クロロフォルムの強烈な臭気を、美保子はぞんぶんに吸いこんだ。

たちまち、脳髓がしびれた。美保子のからだはのけぞり、のけぞったまま男の腕に抱きとめられた。もがこうとしたが、肩にも腕にも力はいらなかった。三呼吸ほどで、美保子は気を失った。

2

目の前が乳白色にかすんでいる。

胸の上に大きな鉄板でものせられているような息苦しさに、美保子は意識をとりもどした。鼻孔の上、目と目のあいだのあたりに、まだ薬くさいしびれが残っている。

からだか、ひどく堅かった。無意識に起きあがろうとして、美保子はうめいた。胸部と腕に、異常な圧迫感があった。

美保子は顎をさげて、自分の胸もとを見た。愕然とした。スリッパ一枚のしどけない半裸の姿になっているのだ。しかも、

——縛られている！

異常な息苦しさは、このためだったのだ。

美保子の腰は、つめたい皮張りのソファにぐったりと寄りかかっていた。

——どうしてあたしは縛られているのかしら、ここはどこかしら、あたしは、どうしてこんな所へ？……

しびれていた思考が、徐々によみがえってきた。美保子の視線は、この、見たこともないうす暗い部屋のなかを見まわした。

なんの装飾もない、ねずみ色の殺風景な壁が四方を取りかこんでいた。テーブルと椅子と、それから片隅に、美保子がいままでに見たこともないような奇妙な形の道具が置かれてある。

——夢だろうか？

おそろしい悪夢か。しかし、この緊縛感はいまにもなまなましい。

一方の壁に、黒っぽいドアが取りついていて、いかにも頑丈そうなドアだった。

窓はどこにもなく、この部屋の出入りは、そのドアだけらしかった。

肩を左右によじって、美保子は半身を起こした。このとき、ドアのノブが、かすかにきしみ音をあげてまわった。

ぎくり、と美保子の目がノブに吸いつけられた。

ドアがあいた。二人の長身の男が、前後して室内へ入ってきた。

——あっ！

口のなかで、美保子は声をあげた。二人の男は、日本人ではなかった。

「おう、気がつきましたね」

灰色の髪と、灰色の瞳をもった男が、軽く片手をあげていった。かなり巧みな日本語だった。ダークグレイの背広を、きちんと着ていた。

「うつくしい！」

感嘆するように、もう一人の男がいった。

赤い髪のがっしりした体軀で、赤いチェックのシャツを着ていた。「助けてください。あたしは、どうしてこんな所に——」

美保子は、思わず哀願の声をあげていた。そして、スリッパだけの自分に、ハッと羞恥をおぼえた。膝を縮めた。

「あの書類を、私に渡しなさい。いのちだけは、助けてあげます」灰色の瞳が、静かにいった。

「書類？ なんのことです？」

美保子の耳には、意外な言葉だった。

「とぼけては、いけない。今夜零時半、セントラル・トルコ風呂ビルの裏で、あなたが、G国のスパイに渡すはずになっている、機密書類のことですよ」

赤髪の男がいった。この男の日本語も流暢なものだった。

二人の外人の口から発音される日本語の、あまりの巧みさが、かえって無気味に感じられた。

「知りません！」



美保子は強く否定した。

「あたし、そんな、G国だとか、スパイだとか、そんなことにいっさい関係はありません。間違いです。あなた方は、とんでもない間違いをしていらっしゃるんです!」

「とぼけるな!」

きびしい声を発して、赤髪の男が一步前へ踏みだした。

「われわれは、正確な情報をつかんでいる。早く白状しなさい!」

「そ、そんな!」

「あなたのハンドバッグ、調べました。あなたの洋服も、靴の底も調べました。だけど、どこにもない。しかし、あるはずです。爪の間にも隠せるような小さな紙ですからね。だしてください!」

灰色の瞳の底が、けわしく光った。

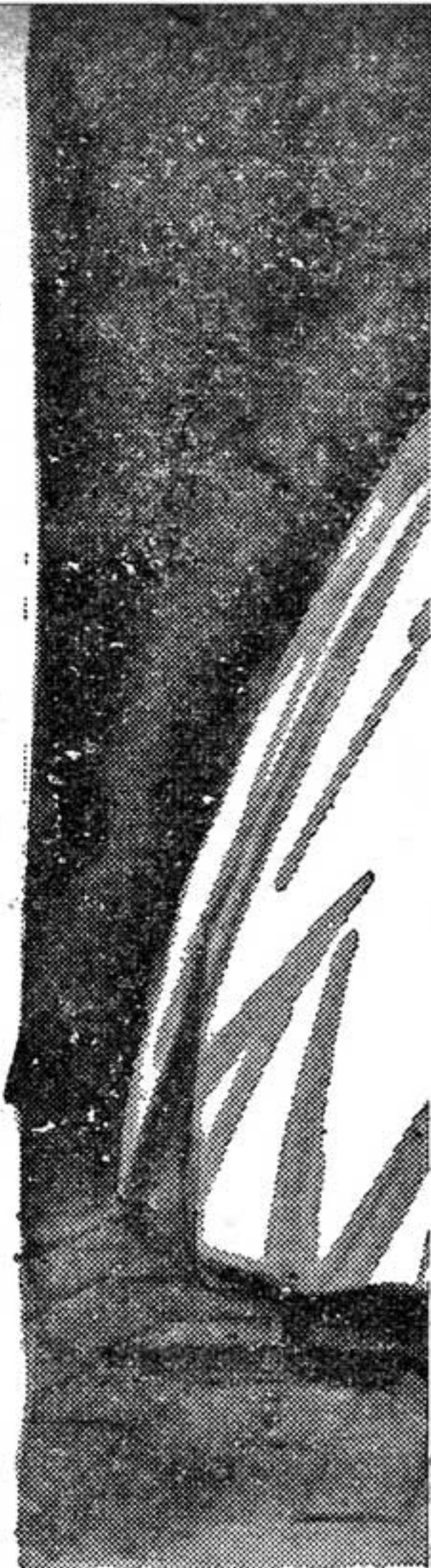
「知りません、あたし、本当になにも知りません!」

恐怖が具体性を帯びて、美保子の胸に迫った。間違えられているのだ! しかも国際的な背景をもった秘密組織の一員に――。

いつのまにか、美保子は次元の異なる、どす黒い世界に身を置いているのだ。美保子は戦慄した。偶然の畏が、なんの罪もない自分の両足首に、がっちりとかいこんで離れないのだ。

なんという不運、おそろしい畏!

「よろしい、強情ですね。しかし、私たち、かならずあ



下にも、縄が二重三重にまわり、うしろ手首につながっていた。

彼女の縄尻をとっているのは、意外にも小柄な日本人の男だった。

——日本人がこんな怪しげな外人の一味にいる！

美保子は目をみはった。しかし、不思議なことではなかった。ここは日本なのだ。

金髪の裸女は、背中を突きとばされ、灰色の男の前にひ

ざまずいた。

「カームズ！」

と、さけび、それから、何やら哀願らしい訴えをした。その表情には、疲労と恐怖の色があった。灰色の瞳の男の名がカームズだった。

「トクラー——」

カームズが、日本人の男を呼んだ。あきらかに雇い主の口調だった。傲岸である。

「はい」

トクラと呼ばれた日本人は、卑屈な顔を、カームズにむけた。卑屈だが、鋭い目だった。いかにも、こうした裏側の世界に雇われている人間の挙動だった。

「ポニイを責めるのだ。あの道具を使って。ジョオも手伝いなさい」カームズは命令を与えた。

日本語ばかりを使うのは、このリンチの内容と経過を、美保子に説明しようという意図らしかった。美保子に恐怖を与えるために。

カームズの顔が、無気味な微笑をうかべて美保子にふりかえった。

「ポニイは私たちの同志だった。それが、裏切った。わずかばかりの

3

まもなく、光る波のように豊かな金髪が、この部屋へつれてこられた。若い白人の女だった。金髪をふりみだし、泣きわめいている。

うしろ手に縄で縛られていた。むごたらしいことには、ブラジャーとパンティーだけを、かろうじてまとっただけの裸身だった。乳房の

それを自分に見せつけて脅迫しようというのだ。美保子の背すじに、つめたいものが走った。

羞恥どころではなかった。

——仲間同士のリンチ！

灰色の瞳が暗い微笑をただよわせている。あせらずにやるのだ、とその瞳は自分でうなずいていた。スリップの胸もとからこぼれている乳房のふくらみを、灰色の目はゆっくりと楽しみはじめた。

金が欲しいために……。私たちの国の秘密を、敵国のG国へ売り渡そうとしたのです。その直前に、運よく私が発見した。それで、提^{おきて}にしがたい、罰を受けるのです。見ていなさい」

「あたしは、本当になにも、なにも知らないんです！」

美保子は、縛られている胸をゆすってさげんだ。泣き声になっていた。

カームズは無気味な微笑のまま、無言だった。

トクラと赤毛のジョオが、リンチの準備をはじめていた。室内の片隅に置いてあった奇妙な形の道具を、中央にひきだしてきた。鉄のパイプを組み合わせて作った、ベッドに似たしろものだった。銀色のにぶい光を放っていた。

数十本の長いパイプ、短いパイプ、折れ曲がったパイプが、ネジでつながれ、複雑に組み立てられている。バネの部分もあった。裏側には、ハンドルのようなものも取りついていた。

「よろしい、縛りつけなさい」

カームズが乾いた声でいった。

ポニイが悲鳴をあげて逃げようとした。このパイプ製ベッドの残酷性を、じゅうぶん知っているすさまじい金切り声だった。金髪がさか立った。

トクラがあわてて縄尻をつかみなおした。が、奔馬のようなポニイの力に、ずるずると引きずられた。赤毛のジョオが手を貸した。

ポニイの抵抗はむなしかった。四本の男の腕におさえこまれた。うしろ手の縄はいったん解かれたが、たちまち、パイプのベッドに大の字型に縛りつけられた。

白い咽喉^{のど}が激しくふくれ、あえいだ。

青い瞳が、恐怖と憎悪に燃えて、カームズをにらみつけた。ジョオの大きな手が、乱暴にブラジャーをひき剥^はいだ。床に叩きつけた。

「ヒャアッ！」

という、せつない悲鳴があがり、ポニイの胸がのけぞった。

みずみずしい弾力にみちた二つの隆起が、三人の男の目の前にさらけだされた。ベッドに縛りつけられた肉塊が、羞恥のくねりにゆれた。さすがに白人の女である。偉大ともいうべき豊満な乳房をつけていた。仰向けに縛りつけられても、その隆起は沈まずに、ぷりぷりとふるえた。

そのふるえを押えつけるかのように、縄がぎりぎりとしめつけた。左右の腕はひろげて手首をくぐられ、両足首も堅くパイプのベッドに固定された。もう動けなかった。

そのベッドの脚には、黒いコードがついていた。赤毛のジョオが、そのコードの先端を、壁^{かべ}際のコンセントにさしこんだ。

「スイッチを入れなさい」

石で刻んだ面^{めん}のように平然と、カームズがいった。

スイッチは、コードの端に、悪魔の爪のように赤い目印と一緒についていた。ジョオの手が、そこにのびた。

——あッ！

はじめて、美保子はさどった。慄然として息をのんだ。

黒いコードの内部には、なにがひそんでいるのか。電流だ。それにちがいはなかった。

「ひいッ！」

鋭い悲鳴があがり、ポニイの裸身は、ぎくんツと硬直した。

スイッチが入ったのだ。同時に、銀色のベッドには、何ボルトかの電気が流れた。

4

美保子の目前、三メートルほどの近さで、電気責めがはじまった。

電流は、ポニイの金髪の本一本本までに通じているかにみえた。苦悶のうめきが、若々しい白人女の肌からにじみでた。

それほど強い電流ではなかった。しかし、ビリビリ、ビリビリと、ポニイの肌を絶え間なくけいれんさせていた。

なぶり責めともいえよう。じわじわといたぶるのだ。

白い裸身は、金網の上にのせられた一匹の巨大な魚だった。金網の下には、とろ火が青い炎をあげている。

やがて、魚の肌からは、あぶらがにじみ流れるのだ。

ポニイの青い目が、醜いほど細く吊りあがった。上下の歯が強く噛み合わさった。舌までもしびれるにちがいない。乳房の先端のうす赤い実が、堅くとがった。

苦しいのだ。無気味な電流が全身を間断なく犯しているのだ。ぬけるほど白い腹部が、波のうねりのような大きなあえぎをみせていた。

わずかにひらいて縛りつけられている左右の太腿のその内側の部分が、水気をふくんだ白パンのようにぶるぶるとけいれんした。

「ウウッ、ウウッ、ウウッ！」

歯のあいだから、赤児がしゃくりあげて泣くようなうめきが噴いた。そのうめきのなかに英語の罵声が、うわごとのように交じって吐きだされた。日本語でいえば「ちくしょう」とか「おぼえていろ」と

かいう意味にちがいない。呪咀と憎悪にみちた語勢だった。

加虐者たちにとって、これは、らくなりンチにちがいなかった。電気ベッドにスイッチを入れて、あとはポケットに両手を突っこみ、ガムを噛んでいればよいのだ。

カームズの視線は、ポニイと美保子の両方を交互に見くらべていた。うすい唇に微笑を洩らして眺めていた。

ポニイの苦悶は、肌にくいこんだ嚴重な縄目をひきちぎるほどくねった。

美保子は正視できなかった。首を折ってうつむいた。呼吸が苦しい。自分の素肌にも電気が流れているような錯覚に襲われた。目を伏せても、ポニイの悲鳴は、美保子の耳に、心に、突き刺さった。

耳をふさぐことはできない。両手は背中に縛りあげられているのだ。

「あなた、見なさい！」

カームズが命令した。いつのまにか、カームズの手には皮鞭が握られていた。サーカスの調教師が使う、細く長いしなやかな鞭だった。彼は威嚇するように、それを両手でしごいた。

「見なさい！」

カームズは強制した。美保子の目が、ポニイから逃げることをゆるさないのだ。

ひゅうッ！

皮鞭が尾をひいてうなった。鞭は、美保子のスリッパからはだけている肩さきに、吸いつくような音で鳴った。

「あッ！」

鋭い痛みに、美保子はすくみ、顎をのけぞらせた。視線はいやおう

なしにポニイの裸身にむいた。

ポニイの仰向けに縛られている腹部のへこみに、汗がたままって光っていた。

あぶら汗だ。にじみでた苦悶の汁液がたまっているのだ。

ポニイは齒をひらいていた。赤い舌をだしていた。乳房をゆすり、はあッはあッという犬のような息をついていた。目の色が濁っていた。両眼の周囲は死人のように黒ずみ、手足のあがきはすっかり弱まっている。

——死ぬかもしれない！

ぞおッとして、美保子はまた顔をそむけ、ふるえあがった。

びしりッ！

と、しなやかな鞭が、また美保子の首すじを打った。

「やめてください！」

美保子は髪をふり乱してさげんだ。

「いくら脅しても、あたしは何も知らないのです！ あなた方は卑怯です。何の罪もないあたしを、どうしてこんなに苦しめるの！」

「おだまりなさい。私たちも、こんな手間はかけたくない。だが、私たちは、私たちの祖国のために、こうして働いている。あなた、早く白状しなさい。G国のスパイから受けとった密書、どこに隠しましたか」

「でたらめです！ あたしはスパイなんかじゃありません！」

「G国の秘密情報組織は、日本人の男女スパイを十人使っているのだ。あなたはその中の一人。白状しなさい。さあ、どうぞ」

灰色の瞳が、針のように細くなり、スリッパからはみでた美保子の素肌をなめまわした。いやらしい視線のうごきだった。

「ちがいます！」

美保子は、きちがいになりそうだった。どうしたら、このおそろしい誤認を解くことができるのか。

「どうしても強情をはるのなら——仕方ありません。それでは、あなたを責めましょう。私、日本のお嬢さん大好き、いじめたくありません。しかし、これもお国のため、ゆるしてくださいね」

ねちねちしたカームズの語調は、あきらかに美保子をなぶっていた。恐怖にゆがむ美貌を、余裕をもって楽しんでいた。

ポニイの裸身が、ようやく電気ベッドから解き放たれた。

縛られたまま、彼女は床の片隅にころがされた。金髪は乱れ、白い肉塊は濡れた雑巾ぞうきんのようにぐったりしていたが、死んではいなかった。咽喉ぼとけのかすかなあえぎが、それを示していた。

「馬鹿女めが！ おれたちを裏切りやがった罰だ！」

赤毛のジョオが、ペッと唾を吐いた。

カラになった電気ベッドが、こんどは美保子の目に、新しい恐怖と成ったのしかかってきた。

5

——なにかが、どこかで狂ってしまったんだ！

そうとしか思えなかった。このような苦痛を受ける覚えは、髪の毛一筋もないのだ。

不運な偶然が彼女に重なりあい、このようにがんじがらめに縛りあげてしまったにちがいない。

「あなた、美しい」

スパイを自白させるには関係のない言葉をつぶやいて、カームズは美保子のそばへ歩み寄った。灰色の瞳に妖しいきらめきがよぎった。カームズの右手が、美保子の縄尻をつかみあげた。背中にくりつけられた両手首が、ぐいっと吊りあがった。

「ああ、ゆるして！」

本能的に泣き声をあげて、美保子は卑屈な哀願をした。高級バー「ウィップ」のナンバー・ワンのプライドは、みじめに崩れ去っていった。

——恭吾さん！

と、胸の中でさげんだ。しかし、篠原恭吾が、この地獄の底へ彼女を救いに現われるはずはなかった。

待ち合わせの場所で恭吾は、美保子のいないことを知り、失望しただろう。彼女の違約に腹をたてたかも知れない。

おそらく、自分が誘拐された二、三分後に、彼の車は、あのビルにやってきたにちがいないのだ……。そう思うと、美保子の胸は悲しみに圧しふさがれた。この恐怖のなかにいて、きゅうに恭吾への思慕がつのってくる。

「ああ、やめてえッ！」

黄色いさけびがほとばしった。

縄がゆるみ、ホッとした瞬間もむなしく、美保子はスリッパをひき裂かれた。ポニーと同じく、パンティー一枚の裸身にむかれた。朝晩の手入れを惜しまず、磨きぬいた皮膚だった。なめらかに白く、牛乳を塗るかためたように光っていた。

その素肌に、一度はゆるんだ縄が、あらあらしい感触で襲いかかった。両腕が背中にねじあげられる。肩の骨がきしんだ。

「ああッ、痛ッ！」

左右の手首が背骨の上で重ね合わされ、ぎりぎり巻きついた。乳房の上と下に縄がまわってぐいこんだ。その部分は、ことにやわらかく、縄はみごとに陥没した。

この作業は、赤毛のジョオとトクラが合同してやった。二人は、舌なめずりに似た卑しい笑いをうかべながら、美保子を縛りあげた。日本人でありながら、トクラは、はっきりと彼女の敵だった。カームズ一派に雇われているスパイにちがいない。美保子はそう思った。

肌がくびれをみせてしめあがり、美保子の唇が痛みにゆがんだ。せいいっぱいの抵抗を示したが、無駄だった。

「あなた、美しい、ほんとうに美しい。やっぱり、日本の女、一番ね」カームズが、大げさな身ぶりで賛嘆した。この男の目から、いままでポニーを責めていたときのような陰険な光が消えた。

「ゆるして！ お願いです！」

かすれ声だった。いまはただ、その哀願だけだった。

「日本の女の肌、このなめらかさ、世界にありません。あなた、日本の女性の中でも、とくに美しい！」

カームズの指が、美保子のなだらかな首すじから、えりにかけての曲線に這った。その指は長く、湿っていた。

「ひえッ！」

氷をあてられたようなさむけに、美保子はすくみあがった。全身が総毛だった。だが、逃げることも、その指を避けることもできなかった。

「パイプを立てなさい」

カームズが奇妙な命令をだした。

いままで金髪の裸女を責めさいなんていた電気ベッドが、縦にひき起こされた。あぶなげなく脚をひらいてベッドは立った。そういう仕掛けにできているのだ。

「さあ、こんどはあなたが、あのベッドでおやすみになる番です」

こともなげにカームズがいった。美保子の両膝から力がぬけ、よろめいた。気の遠くなるような恐怖だった。

——殺される！

と思った。死ぬのはいやだ！

こんな、どこの穴底ともわからない暗い湿った部屋で、素性も知れない外人のために、虫けらみたいな殺され方をするなんて！

だが、美保子の両肩は、堅くつめたいパイプを背負うことを強制された。うしろ手に縛られたままである。背にまわされている腕や手首が、パイプに押しつけられてつぶれた。

電流は切れていたが、美保子の背は、無気味なショックに、板のように堅くなった。

トクラの手にべつの縄束が握られ、美保子の足や胴を完全にパイプへ固定させるため、びしびしと音たててさばかれた。

「お願い、やめて！ あなた、日本人でしょ、あたしも日本人よ。あなたの方のお仕事に、あたしは何も関係していないのよ。信じてちょうだい！ あなたからも頼んで、あたしを助けてちょうだい！」

美保子は、涙をうかべてトクラにすがった。

トクラは無言だった。腹のなかで、せせら笑っているようだった。それが、感情のない鋼鉄のようなスパイの顔にみえて、美保子は絶望した。

トクラの手は、綿密に、執拗に、美保子のからだを、パイプのベッ

ドにくくりつけていく。まるで楽しんでるかのよう。

美保子は、声をあげて泣きだした。泣きながら、獣のように吠えた。哀れな白いとらわれの女獣だった。涙が頬にながれ、形のいい顎のさきから、乳房にしたたり落ちた。

——恭吾さん！

もう一度、胸のなかで呼んだ。だが、彼は現われない。奇跡はおきない。

「おう、あなたの涙、真珠よりもきれいな、ははは！」

カームズが笑い、ジョオも笑った。

二人の白人の瞳が、嗜虐の色に濡れて光った。恍惚の色さえみせていた。

カームズの指さきが、美保子の乳首にたった涙のしずくを、ピーンとはじいた。

6

美保子が背負ってから、電気ベッドは、羞恥を強制するベッドに変貌した。

そのパイプの組み合わせは、まるで、みだらな意志をもった生物のようによごきはじめたのだ。

ベッドの裏側に数個の小さなハンドルがあり、トクラが自動車でも運転するような格好でそれを握った。そして回転させた。

長短数十本のパイプによって構成された奇怪な銀色のベッドは、すると、巨大な昆虫の触覚のようによごきはじめたのだ。

精巧な仕掛けだった。このベッドの本来の目的は、単純な電気責め

よりも、この、残忍にして、いくらかユーモラスなりンチのために製作されたのかも知れなかった。

ユーモラスというのは、ここに縛りつけられた人間は、自分の意志とはべつに、その手足や胴をうごかさねばならないからである。人形使いに踊らされる人形のように。

「ひいッ！」

美保子が絶叫した。驚愕のために瞳孔がひらいた。彼女の腹部が、

いきなり、ぐんぐんと前方にせりだしはじめたのだ。

背の裏に密着しているパイプが突き出てきたからである。腹の筋肉が緊張した。

「むうッ、うッ、うッ！」

白くやわらかい腹部が、みるみる

うちに弓なりにそった。まるで

妊婦のようだった。肩も腰



も、そのまま直立の位置で、腹だけが極端に出っぱったのだ。

反動的に、胸にかかった縄が、いよいよ堅く肉にくいこんだ。呼吸すら困難になってくる。

トクラが、このままハンドルをまわしつづければ、美保子の腹の皮は裂け、背骨は折れてしまうかもしれない。

「ぐッ、ぐッ、ぐッ！」

という、踏みつぶされたカエルのようにみじめなうめきが、美保子の口から吐きだされた。咽喉の皮が破れ、内臓がとびだすかと思われるほどの苦しげな声だった。美保子の白い額から、あぶら汗が粒となつてにじみでた。

このとき、赤毛のジョオが、たまりかねたように口からガムを吐きだし、ベッドの裏側へまわった。トクラと並んで、べつのハンドルをまわしはじめたのだ。おれにもやらせろ、といった顔つきだった。

とみるまに、美保子の両足が、かなりの速度でひらきはじめた。両足首を縛りつけているパイプが、左右べつべつの方向に移動しはじめたのだ。

「あれッ！」

はげしい羞恥が、美保子にのしかかった。目がくらんだ。なんという残酷な仕掛け。

もし、パンティーをつけていなかったら、美保子は屈辱のあまり、息がとまったかも知れない。一片のナイロンが、美保子にとって救いだった。

非情なメカニズムは、寸時の間に膝と膝の距離をはなした。左右の太腿が大きな「ハ」の字に割れた。しかもジョオは、まだハンドルの操作をやめなかった。口笛を吹き、おもしろがっているのだ。

——あ、あ、あ、裂かれる！

咽喉の奥でさげんだ。全身がひきつって、声にならない。アクロバット・ダンスのように、両足の間隔は極度にひらいた。

「ウウウウッ！」

美保子は天井に顎をのけぞらせて、この凄惨な苦痛を耐えた。しかし、いつまで正気で耐え得ることができるか。

「へい、ジョオ！」

カームズが、なにごとかを赤毛に命じた。ハンドルは停止した。トクラも運転を中止した。美保子の両足も大きくひらいたまままで停止した。腰骨が割れるかと思うほど痛んだ。

いま、カームズの目の前一メートルの近距離に、美保子の柔肌のすべてが突きだすようにして固定された。腿と尻の白い肉が、不自然な形に盛りあがっている。

「おう、まったく、キメこまかいですねえ」

カームズは、大きなゼスチュアで顔をふってみせた。彼は興奮していた。美保子の肌のすみからすみまでを、吟味するような目でたしかめた。なめるような熱心さだった。秘密書類の詮議などは、もう彼の眼中にはないようにみえた。

にっこりと、カームズの唇が笑った。その濡れたような唇の艶には、あきらかに彼の飽くことを知らない嗜虐性があった。彼の高く突きでた咽喉ぼとけが、ごくりと鳴った。

彼は、またあの長い皮鞭を鳴らしはじめたのだ。美保子の美貌を、自分の手によって汚し崩したかったのだ。

背骨を押されて、弓なりに突きでた腹の上に、カームズの皮鞭は、ぴしーりッと巻きついた。

「ひいッ！」

焼け火箸を押しあてられたような熱い痛みが、腹部に走った。美保子の裸身は硬直してのけぞり、背負ったパイプをかたかたと鳴らした。乳房だけがやわらかくゆれた。

「よろしい。それではあなた、秘密書類はもうださなくともよいです。そのかわり、私は、G国に雇われたスパイでした、という証文にサインをなささい。そうしたら、いのちだけは助けてあげましょう」鞭をしごきながら、カームズがいった。

「でも、あたしは本当に……スパイでは……ありません」

美保子の声は、とぎれとぎれにかすれた。

その否定と同時に、美保子の白肌に、嵐のような鞭がふりおろされた。

胸に、腹に、赤紫色の条痕が交差した。磨かれたなめらかな肌だけに、その鞭の線は、血をふくんで駆けめぐった。

どういう手練か、糸のように細い鞭の先端が、小さな乳首にくるりと巻きついた。そのまま、きゅうッと鞭を引く。

「くうッ！」

乳首だけが、つままれたように引っぱられた。こまかい責めどころだ。乳房がのびた。鋭い苦痛にちがいない。

「アッ、アッ、アッ、ヒイッ！」

美保子の唇が大きく裂け、火のような悲鳴が天井にふきあがった。白いきれいな歯が、犬のようにむきでた。

ついに美保子は、この激痛のために意識を狂わせた。いや、死にたくなばかりに、肉体がさけんでいたのだ。

「ああッ、ごめんなさい！ あたしはG国のスパイです！ なんにで

も署名します！」

美保子は屈服したのだ。

すると、嘘のように鞭のうなりがやんだ。

「よろしい。このサインをしたからには、あなたは絶対に私の命令に服するのですよ」

カームズは、快心、といった笑顔になってうなずいた。そして、怪しげな紙片を美保子の前にさしのべて見せた。

だが、心身ともに衰弱し果てた美保子は、その紙片に記された文字を読む氣力を失っていた。

パイプのベッドから解き放たれることが、最大の望みだった。

7

それから三十分後。

調度のととのった応接室で、カームズは一人の日本人の客と談笑していた。

二人の間のテーブルには、高価なウィスキー瓶が置かれてあった。グラスが二個。なごやかな空気がただよっていた。

「すばらしい、まったくすばらしい。じゅうぶんに調べました。感心しました。さっそく本国へ連れて帰り、私の女中にします」

カームズの灰色の瞳は、きげんよく笑っていた。

「女中ですって？ ははは、奴隷でしょう、女奴隷、ははは……」日本人も笑った。立派な背広を着た青年紳士だった。

「女奴隷、そうです、まったく。いや、これはどうも……」カームズは、少年のようにてれた。

半生記

弥生

柔らかい絹の肌
ざわり、あの、チ
リメンやキンシャ
の柔らかい肌ざわ
り、幾本かの細紐
で、美しいいろい

子供のあ
こがれ

ろな衣装を身にまといつけられ、厚い幅広
の帯でぎゅっとお太鼓に結びつけられる時
の、なんともいえない胸のときめき、それ
が私には、たまらない魅力なのです。なに
ものにも替えがたい最高の魅力なのです。
私は、愛知県のK市に、興行師の長男と
して生まれました。父が興行界にいた関係
で、幸か不幸か、幼少のころから、芝居の
楽屋などを自由にのぞく機会に恵まれてい

ました。男が化粧をしてカツラをかぶり、
美しい女の着物を着て、女の仕草をする。
こんな異常な世界を毎日のようにながめ、
子供心に不思議に思いながらも、いつかそ
の妖(あや)しい美しさにひかれ、女形を見
ることに異常な興奮を覚えるようになりま
した。
こうして、私の女装願(めがね)は、こ
うして、私の女装願(めがね)は、こ

「それにしても、カームズさんはたいした俳優だ。スパイとか、G国
の秘密書類とか、また、とんでもなくスリリングなドラマを考えつか
れたものですね。隣の部屋できいていて、私はもうすこしで笑いだす
ところでしたよ」
「そのヒントは、ポニーから得ました。ちょうどポニーを処罰しなけ
ればならない事故があったので」
「その話は、ジョオさんからききましたよ。なんですか、まじめな職
業をもつてきた恋人ができたので、この組織から逃げだそうとした
そうですね」
「そうです。それは、私たちの掟にそむくわけです。そこでポニーを
リンチしました。そのリンチを美保子さんに見せたのです。いかにも
スパイ・ドラマらしくね。おもしろかったです。彼女の恐怖の顔、あ
ははは……。まったく美保子さん、すばらしい。あなたに感謝します」
「私だって、あの女性をカームズさんにプレゼントしてしまうのは、
いささか惜しい気がします。でも、商売のためなら、仕方がありませ
ん」

青年紳士は、精悍な表情でいった。
「おう、あなた、商売熱心ね。いつも感心しています。それでこそ、
あなたの会社に信用おけます」
「カームズさんの会社の商品では、とくに儲けさせていただいてます
から、このくらいのサービスはしないと……ははは」
青年紳士は、卑屈に笑った。
「それでは、篠原さん——」
カームズは椅子から立ちあがって、相手に手をさしのべた。別れの
握手だった。
「カームズさん、うちの社との取り引きを、これからもよろしくお願
いしますよ」
愛想(あいさく)のよい笑顔を見せ、篠原恭吾はカームズの手を握りしめた。そ
の手から、うす気味悪い嗜虐(しやく)の湿りを感じてゾッとしたが、恭吾はそ
れを表面にはださない。
一人の罪のない女性の犠牲のもとに、篠原貿易は莫大な利益のあが
る密輸麻薬の取り引きを、この夜、成功させたのだった。

読者サロン



★正面からの男の写真を

二月号をとびつくようにして拝見しました。前号よりも男の写真が多くて、ドキドキしました。モデル君も前号よりいいですが、なんとなくポーズに無理を感じます。もっといいポーズをつけ、照明なんかも、もう少しこれば、もっとイカすのができるのではないのでしょうか。

フンドシ姿のほうもそうです。全裸体のほうなんか、とくに戸口にへばりついてるのうに見えて、残念です。もっと、うしろ姿ばかりでなく、横向きも、前向きもほしいと思います。もし、顔がまともに写りすぎたり、Pの処理が問題になるのだったら、部分的に影をつけたり、修整してもいいだろうし、

小道具的なものでかくすことだ
ってできるわけです。

また、これはよく個人の意見ですが、たとえばPなんかにしても、正々堂々と見えてもいいと思います。女の裸体写真の場合合だって、ちゃんと、正面から見せている作品だってあるのだし、男の場合だけ局部を露出してはいけないという法はないでしょう。

ナマイキなやつと思わないで、今後も、いい作品をたくさんのでてください。それから、一般からも募集されてもおもしろいものが集まるのではないのでしょうか。(東京・Fマニヤ)

★縄目をもっときつく

次回写真発表のせつは、隆々たる筋肉美の男性が、全身汗み

どろ(オリーブ油を全身にぬりたくり)に縛られている姿、全裸でもけっこう、また、ふたりの場合、責めるほうは野性美あふれる筋肉労働者がいいと思います。

ナワ目は、もっときつく筋肉に食い込むように縛るほうがいい。海老責め、駿河責め、逆吊り、両手両脚を大の字にひろげた姿も、ぜひ欲しいものです。あまり極端なマゾ・サドフォトは望めないまでも、それに近い「憲兵狩り」のような場面のフォトも、ぜひ欲しいものです。(香川・松本吉朗)

★フンドシを謳歌しよう

編集者のお努力と愛読者皆様のご助力により、ますます貴誌のご発展を祈りおる者です。

最近、貴誌の愛読者となり、発刺たる希望が湧き、健全な明るい毎日を過ごせることを感謝しております。貴誌は全くよき相談相手になり、悩みを解消してくれ、また、理性を養ってくれます。他人に迷惑を掛けず、おのれの健康に害を及ぼさない程度に、思いきり胸のときめきと陶酔の淵に私を引き入れてく

れ、慰め、欲求を満足させる道は、男性ヌードと六尺フンドシです。そして、男性被虐の写真とさし絵であります。

画報⑥集、風奇二月号の男性ヌード、フンドシ姿5態およびフンドシ姿二人プレイは、小生の求めていたもので、一見して胸の鼓動を禁じ得ませんでした。とにかくすばらしいの一語に尽きます。

しかし、どうも、フンドシを締める位置が少々高いように思います。東京の百田様も言っておられるように、ヘソ下二、三寸ぐらいに締めたほうがよいのではありませんか。木綿の肌ざわりも心地よく、Y型に食い込むほどの締めりは、マニヤのみの知る喜び、欲望ではないでしょうか。

爽快な気分、日々の活動の原動力も、快楽の源も、この締めりから生まれるのではありませんか。

マニヤの皆様とともに、ますます六尺フンドシを謳歌して、さし絵、写真の掲載が、ますますその数を増すよう希望し、今後を満喫しようではありませんか。(京都・禪生)

★女性にいいめられたい

突然このようなお手紙を貴社にお送りして、まことに相済みません。

『風俗奇譚』という本をみて、全くびっくりしました。だれにも話せないこと、ひみつにしたいと思うことが、グラフになっていたのですから……。

九月号の本です。ぼくはグラフのマゾ女性と違って、マゾに興味を持つ男です。もっと詳しく言うと、女性から両手、両足をしばられることです。

同じ所に勤めている年配者の人から、十月ほど前、ハーモニカ・プレイというものを女にしてやるととても快感して喜ぶというのを聞きました。ぼくがもしマゾになれば、それをしてみたいと思っています。ぼくは自分より相手の女性に喜ばれればそれでよいと思います。

ぼくは、あまりハンサムではありません。昭和十一年生まれ、独身のサラリーマン、小柄な青年です。マゾの経験などまだ一度もありませんので、一度よいチャンスがあればと思っています。

でも、ぼくなんかダメかもしれません。よい相手がなかなかみつかりません。希望年齢は二十〜三十歳ぐらいの女性。もし相手がみつかったら、その時は相手の女性をキツと満足させたいと思います。(大阪中瀬生)

★児玉さんがすばらしい

まず、おめでとう！
二月号、キタイをしていたのに、男性しぼりが出ていないので落胆しました。

モデル氏も、せっかく全裸にまでなってくれているのに、すまないことながら、前号の児玉さんの半分の魅力もないのは、全く気の毒です。それに、男の全裸はつまらない。前向きが撮れないから……、やはり、フンドシをしめたほうが魅力もあり、ポーズも大胆になれると思う。

児玉さんのフンドシ姿やしぼり写真、新しいポーズで、どんな出してください。あの引きしまったからだに締めこまれた白フンドシの魅力、たくましい臀部に食いこんでいるフンドシ、考えてみただけでもコーフンします。ぜひ、しぼりものを

出してください。

前号に出ていた、しぼり物(さるぐつわされたもの)の前向き撮ってあるんでしょう、ぜひみたいです。

今までのモデル氏のなかでは児玉さんがナンバー・ワンです。あの前袋のフクラミに、そつとふれてみたい、唇をね(これはないしょです)。必ず児玉さんにつたえておいてください。誌上で、あのかたの住所や本職、ご返事ください。たのみます。(S生)

★モデルの住所を

貴社発行の雑誌『画報風俗奇譚』に収載されている写真のモデルについて、お知らせください。

左記のモデルの住所、氏名、年齢、趣味について、できるだけ詳しくお知らせください。

モデルの名まえ——西牧えり子、西条さくら、村上ユキ、井神せい子、舟木喜代子

△東京・品沢V

▼——モデルの住所などのお問い合わせが毎月相当あります。が、いろいろの事情で、誌上に発表できませんので、ご了承

承ください。なお、モデルあてのおたよりは、小社あてにくださればお取り次ぎいたします。△編集部V

★迫真のポーズを望む

『画報風俗奇譚』一月臨時増刊号を見、少なからず心ゆさぶるものがありました。とくに、「足取り責め」の容赦なく、ぐいとしぼっている写真は、これまでない迫力を覚えましたが、また、一一二〜一一七ページの「落花の白肌」の一ツツの写真等も、たいへん実感が出ていて、私をたんのうさせるのにじゅうぶんでした。

ただ、欲を言いますと、単に縛られているのではなく、そこに悦びや苦しみを、からだと表情にあらわれない写真があり、もう少しどうにか迫力的なものにしていただきたと思います。その点、西条えり子さんのポーズの一ツツは、私を快樂の世界においやるのにじゅうぶんであります。

ここで編集者のかたにお願いがあります。モデルはだれでもいいのですが、できれば、西牧えり子さんの、一糸まとわな

一四五ページのような大胆なポーズを作っていただければ、必ずや多くの愛読者のかたも、思わずかたずをのむことと在じます。また、男と女の互いの責めなど、もう少し実感的なものを多く切望いたします。

新春早々、たいへん恐縮なことを書きましたが、これも愛読者のひとりとして『画報風奇』のため、あるいはぜひかなえていただくものと期待している次第です。
△東・恵美△

★ふたたび鶴藤さまに

鶴藤恵様——私のぶしつけな質問にお答えくださいまして、ありがとうございます。これでスツカリわかりました。

ですが、私にとりまして、一番残念に思うことは、あなたが女でないことです。私があのような質問をいたしましたのも、もしかしたらあなたは女ではないかと、ひそかに期待したからでございます。

それに、残念なことには、私はまだ学生ですので、じゅうぶんに享樂するだけのヒマがないことです。それでも、パパにお

ねだりして、たんまりお小づかいをせしめた時は、学校をサボって温泉に行つて、レスポスを楽しんだり、一晚中かかって、そのひとのドレスを作つてプレゼントしたりもいたします。そんな間柄の場合は、たいていお流腸ごっこもいたします。もちろん、裸になつていただけて、縛りつけてから、行ないます。旅行先の場合は、いちぢくを愛用してありますが、私が本当に好きなのは、イルガートルによる高圧流腸です。

大量の流腸の好きな同性は五人ほどおりますので、月に一、二回は、電話して呼び寄せて、していただくし、こちらから、してさし上げたいときは、「お流腸はいかが？」と言えば、たちまちO・Kです。たまにはフルれることもありますけど、たいていは快く応じてくださいます。

あなたの小説の中の流腸器が嘴管だけ巨大で、内容量が少ないことは、私にとっては、非常に残念でなりません。それに私が作者なら、アレを食べることを、どんなにいやがろうと、決して許さずに、折檻してでも無

理矢理に食べさせてしまいませう。

現実に、私はSのお姉様のものを食べさせられたことも、何回かございます。もちろん、これ以上耐えられなくなるまで、さんざん折檻していただいたうえでのことです。そのような場合、お姉様がお仕置きの途中であきらめてしまわないように、「いやだわ。でも、そんなに食べさせてみたいのなら簡単よ。あなたの思いどおりになるまで、この伶子を徹底的にお仕置きなさればいいわよ」と言うことも、決して忘れません。同様に、伶子は、他人に食べさせたことも何回かございます。

それから、あの総ゴム製おしめカパーは、おしめをあてず、そのままはかせてさらしものにしてみたいと思います。伶子は、このおしめカパーに多大のノスタルジアを感じます。大人用でブルマー型の総ゴム製おしめカパーってないでしょうか。もしあればぜひ入手したいのです。

いろいろと流腸に関することを書きましたが、私の場合は、

いずれも同性との間のことで、異性から流腸されたり、したりしたことは、まだ一度もありません。また、異性とそのようなことをしようと思ったこともございませぬ。

恵さま。こんどは、女同士のお流腸。それも、同性愛の表現の手段としての流腸を書いてください。恥ずかしがるのを、一時間も二時間もかかって、くどき落すテーマのものを、ぜひお願いいたします。△春村伶子△

★青山三枝吉先生へ

青山三枝吉氏のサド小説をずっと愛読しているのですが、この一、二号は迫力に負け、ややマンネリになつて来たようです。

密航船や暗黒街のリンチなどは、映画を見れば必ずといってよいくらい出て来ます。そこで氏におねがいしたいことは、もっと絵そらごとでない、私たちマニアの肌に密接したストーリーを書いてもらいたいと思います。でなければ、史実にあらわれたいくつかの事件をとり上げて描くのも一興かと思ひます。そして、人物も、ありふれたタ

パコ屋の娘とか、パン屋のおかみさん、あるいはデパートの女店員だとか、読み終わったときにすぐ、私たちの目にふれる人物がリアルでよいのです。

それに、場所も必要なことと思います。私が前に一度見たところのある三河島の污水处理場などは、サド小説にもっとも適した舞台ではないでしょうか。都内の下水道が污水处理場に集水される第一関門のタンクには、綱にひっかかった夜の狼奇がいて、ぱいに浮かんでいるのです。年に一回や二回、胎児の死体や手術後の肉塊が浮いているそうです。

そこには、人の目にふれない、あらゆる物体が集まるのです。巨大な河過装置のモーターのうなりと悪臭の中で、一人の女性をいたぶることができたら、さぞおもしろい小説が書けると思うのです。

屠殺場、ダム工事の現場、地下鉄工事現場、トンネル工事、ビル建設現場など、現代のメカニズムを集中した巨大な舞台が、氏の作品をいろいろとすることができたら幸せです。

(江戸山人)

★迫真の演技を

戦後、日本グランギニョールとして旗印をかかげた北里俊夫氏のアヴァンギャルトが閉鎖されてもう十年ぐらいたつてしまふか、いまさらなつかしく思うファンの一入です。池袋にある小さな劇場で、いくた血なまぐさい芝居を演じたドギツイ看板なども、なつかしいものの一つです。現在では、その亜流が、ロック座で演じられています。当時のアバンギャルトには、とうてい及びません。同じハリツケにしても、ロック座あたりののは、演技者もおちやらかし半分で凄惨味などないが、アヴァンは全く演技者自身が苦しみと激痛に耐えかねて絶叫します。今でも印象に残っているものに、焼け火ばしを女の乳房にあてるシーンがありました。柱にくくりつけた女を腰巻き一つにむき、せむしの老人が目の前で七輪に火を起こすのです。狭い場内は、その煙でもうもうとなる中で、まっかに焼けた火ばしを、一度ヌレた雑巾にあてます。ジーンという音と白煙に、くぐられた女は恐怖に身を

よじらせて悲鳴をあげます。まさかと思う息づまる一瞬がすぎて、老人が火ばしを女の乳房に当てます。ふつうの芝居なら、ギャーッとか、ヒイッとか、大げさな身ぶりで悲鳴をあげますが、そのときは泣きじゃくりながら声も出ないくらいに悶絶するので。そして、いっそう効果をあげるために、ゆたかな乳房に黒々と火ばしのスミが付いて、ちょうど火ぶくれになったように見えました。

(千葉・佐戸公)

★六尺党の希望

二月号の女性就縛は鮮明でいいが、禪男は醜い。男モデルも立ったりすわったりのポーズでは意味なく、縛られて釣られたり、ムチ打たれるところが、当誌ファンの希望するものと思うし、時代チョンまげもので、責める女は妖婦型の腰巻き一つで数人の女の見物をバックに演出したらすばらしいと思う。

本文読み物も「立石さま縁起」

のような男責めが、当誌マニアに適するものであろう。本欄の六尺党のかたがたの投稿を待つ。(東京・百田生)

★三上さまへ

三上達也様、お手紙と写真たしかに入手いたしました。ご好意ありがとうございます。小生の作品中のファンとのこと、恐縮いたします。それにしても実にみごとなフォトで、小生の夢にしばしば見たシーンがありました。ことに、おどろいたのは、小生の小説の中で独創した「ロウソクまたぎの刑」や、S・M氏の小説に創始した「六尺禪吊り」などがあることです。

そのほかのポーズも、雑誌などでは全くみられないもので、卓抜なアイデアに感心しました。あのようなプレイが自由にできる環境があり、友人があること、まことに羨ましい次第です。また、あのようなフォトができましたら、この前と同じ方法でお送りねがいたく思います。それからお知らせしつかえなければ、お所もお知らせいただきたく思います。直接文通できたら、と思っています。(A吉)

「風俗奇譚」の在庫お知らせ

既刊号の本社在庫分が残り少なくなりました。お取り揃えになるにはいまが好期です。お申し込みはお早めに！

多色口絵・あわれ縛愁・囚花・制服は悲し 妖美なる女体責め絵集 マゾヒストの手紙④ ほも禁秘帖④	三人のソドミアとの会見 かびや・かずひこ	あたしの女装生活ありのまま 湯島ゆり子	美少年アルキビアデスのこと 高木 清明	妻をいじめる私の方法 領家 誠	鞭打悦唐小説傑作特選集 死を呼ぶ鞭打 白い双丘(あるヒップ狂の物語) 地獄の密航船 ドリリー・モルトンの思い出 お尻をムチ打たれるジネット 「長靴屋」さんの女たち 女体標本(アブ小説)	真野 麗 真崎 伸一 青山 三枝吉 稲見 悦郎 北 潤 岡村 芳夫 獅々村 裕	一月号 36年度 (一四〇円)	多色口絵・血を好む大公妃 責め絵集・空中緊縛・雪責め・ローソク責め 色刷写真・ふたりプレイ・オン・パレード グラビア・妖美吊り艶姿・ころがし責め・ハ リツケとさか立ち・閨怨のポーズ・ほか 特集・ソドミアとレスボス ビューティー・ビューティ ウィル・ソドミアについて 有名ソドミアの人びと 有名レスビアンの群像 有名殺人事件を推理する ほも禁秘帖③その愛のすてきさ マゾヒストの手紙から⑦ 悦唐小説・花の木馬	谷 貫太 北 潤
--	-------------------------	------------------------	------------------------	--------------------	---	---	-----------------	--	-------------

浣腸の和解 責められる女の羞恥 女の肌をはうカニ アブ小説・悦唐クラブの女 縛虐悦態特集十二月号 特集・伊藤晴雨絵面写真自選傑作集 グラビア・石段の緊縛裸女・浴室の悶姿・長 魅惑の水を求めた男・事務所の狼藉ほか 告白小説・美しきムチの下で・とやま・かずひこ マゾヒストの手紙から⑥ 木馬責めと滑車吊り 女レポの拷問(女共産党員の告白) 白い蝶(水車緊縛の幻想) 立石さま縁起(男性責め郷土史) あたしの結婚生活(女装願望) あるパンティーマニアの告白 ほも禁秘帖②五角形の中の成人儀式	鶴藤 恵 宮原 静雄 志乃田 藤美 青山 三枝吉 その他 (一四〇円) 谷 貫太 藤川 潤 東門 耕造 津田 銳吉 芦立 紀子 平井 由紀子 松浦 三郎 かびや・かずひこ	ヴァイオリン(のぞき) アブ小説・顔のない足クラブ サド小説・耽美荘の恐怖 そのほか (一四〇円)	凌辱無残特集十一月号 多色口絵・水地獄 女体責め絵・丸太小屋の惨・岩場ハリツケ 竹しばり責め・射撃のマト・ほか グラビア・艶麗無残・はなやかな足吊り・犬 の首輪のブラジャー・吊るし責めほか 特集・戦争残酷の記録 拷問倉庫(従軍看護婦の悲劇) 憲兵狩り(終戦残酷秘話) 伊予富士の地獄地帯 102人の集団ハリツケ ほも禁秘帖①少年愛の人びと	島木 恵子 芦立 銳吉 志乃田 藤美 かびや・かずひこ
--	--	---	--	--------------------------------------

マゾヒストの手紙から⑤ あたしの乗馬日記 女の下着に憑かれて(告白) 死美人館潜入記 アブ小説・ひっぴく・えんど・はいひる 恋虐呪縛特集十月号 多色口絵・女体知恵の輪 色刷写真・美しき囚虜・あかりも淡く・ほか グラビア・白衣の佳人・長枕子と女・浴衣も 乱れて・ロイソクが肌を焼く・ほか 特集・サディストの群れ 残虐なるサディスト達 あるサドやぐざの告白 ネクロフィリアの男 私の緊縛の記録 アブチック秘画展・今やスリル第3世紀ほか 地下室の吊り責め マゾヒストの手紙から④ 生きたがら焼かれる女 サド小説・裏切りの決算 多色口絵・空中鞭打 原色写真・厳頭の裸女・つるされた白魚ほか グラビア・落花の景・裸女無残・二人しばり 静かなる地獄・投げ出された女ほか 特集・女装する男たち 男が女装する男たち 女装マニア、その魅せられるのも 女体責め絵・その魅せられるのも マゾヒストの手紙から③ アブ小説・奇妙な再会 浣腸のいけにえ サレイト・若年における異常の生態 サレイトの猟奇事件(おこの殺し)	谷 貫太 牧田 則子 真崎 伸一 神田 弘晴 獅々村 裕ほか (一四〇円) 田上 恵子 大達 欣治 本郷 寅夫 荒川 太郎 佐藤 重雄 鶴藤 恵 谷 貫太 目黒 考二 獅々村 裕 (一四〇円) 田上 恵子 高村 貞安 かびや・かずひこ 佐東 英策 谷 貫太 文津部 三郎 鶴藤 恵 新海米太郎
--	---

(一四〇五)

多色印刷・綴二重装
口絵・荒れ小屋の残虐美女・柔肌しぱりほか
グラフィック・レス・ピアンドの生態
特集

東西レスビアン・の愛の技法……かひや・かすひこ
レスビエンヌ……ピエル・ロピス
サディスト・マゾヒストの往復書間……谷貫太
あたしの悦虐プレイ(告白)……本郷みゆき

男に……
妖怪……
少年の……
美少年……

変化とセックス……
肉切り・野口男三郎……
家の探訪記……

芦立……
三崎……
新海米太郎……
佐東英策……

多色口絵・落花図絵……本誌特写
グラビア・恋慕受縛・姐上の白魚・肌もあら
わに・ベッドは知っている・鏡のなかの緊
怨羞無残特集七月号 (一四〇円)

縛女体・燈籠しぼり・吊られる女・ほか
特集・食人症……………大達 欣治
 サディズムの極“食人症”……………エル・ワシレフスキー
 食人国物語……………

中国における食人奇譚……………千石仙太郎
 人肉料理を食べた人々……………七浦 青人
 死を賭けた遊戯……………八海 春樹
 鉄鎖・鉄環・鉄衣装責め……………雪俊 遙

ムチの下で陶酔する女……山下精
死体と添寝、愛撫する女……岸本信介
女装マニアのピス健……新海米太郎
女忍者(戦国秘聞)……星野かおる

白肌をはう毛虫……志乃田藤美
 変態殘虐物語 姦殺譚ほか……殿村七郎
 嗜虐陶酔特集六月号 (三〇円)
 多色口絵・痛ましき祭壇……本誌特写

グ
ラ
ビ
ア
・
樹
間
の
ニ
ン
フ
・
密
室
の
呪
縛
・
足
づ
り
裸
女
・
庭
園
の
囚
魚
・
憂
愁
の
美
女
・
障
子
の
前
の
残
虐
・
狂
熱
の
閨
・
読
者
緊
縛
写
真
ほ
か
・
フ
エ
チ
シ
ズ
ム
(
淫
物
症
)
特
集

フェチズムの実態……………大達 欣治

毛に関するフェチズム……染井恵一郎

女の下着に欲情する男……………高島隆

新川 勇二
黒い通り魔 賢切り事件史
流腸に魅入られた女
変態王・燕山君
八十七個の洗濯バサミ
小松 五郎
星野かおる

マゾヒストの手紙から………谷 貫太
刑罰はどのように変態的か………久保寺正己
マゾ妻・二代目「矢作ヨネ」………浜村 利男
十八の乙女を散らした変態性欲………竹崎 孝

アブ小説・レスボスの日………真崎伸一
夏の臨時増刊薫風特別号(二八〇円)
多色刷口絵・無残石燈………本誌特写
口絵・蛇責め・穴蔵さかさ吊り・ローソク責

め・鞭をふるう女たちほか……
 ラビア・珍花ひらくデヴァンの狼藉……
 膳の上のご馳走・ベツドの愉快・裸女無残
 絵・首つりとくすぐりと・のど責めほか

特集・世界怪奇残酷秘話……………
十代の悪の女王……………ヴァンス・マーチン
白肌責め絵図……………志乃田藤美
花嫁を突き殺したサドの夫……………石垣要助

特集・変態性欲犯罪実録………三崎光男
俺のモノをなめろ………殿村次郎
淫楽殺人魔ランドリユー………新海米太郎
尼僧強姦魔・大米竜雲………

サド男の無理心中……安井貞一
写真物語・責め写真家とモデル……飯塚邦夫
絵物語・無法狼・娘しぼり……法谷一恵
枕美法悦持集五月号

多色刷口絵・空中人魚………土井 啓子
口絵・ルーベンスの名画にみる変態性欲………
グラビア・捕われの人魚・裸体緊縛・女が縛
られるとき・艶肌受縛・奇子責め・まか………

特集・同性愛……豊島屋新編 村上春樹 佐々木 隆

同性愛の種類と実際……	大達
女性的男子の恋慕手記……	湯浅
同性愛少年が殺人を犯すまで……	城戸
同性愛少年が殺人を犯すまで……	義一

欣治

マゾッホの被虐待契約書………間瀬 照夫

女の切腹 その心理を分析する…小仏 京太

女だけに加えられる拷問……………雪俊 遙

性的イレズミ考………千石仙太郎
女の肉を食べた男………勇二
吹上佐太郎の性の異常遍歴………新川健三
悦虐特集四月号
(売切れ)

多色刷口絵・近衛家の老女村岡：月岡 芳年
写真口絵・捕われの白肌・秘画展覧会……
グラビア・責められる女・妖しき陶酔……ほか

変態性欲考……大達 欣治
妖異・獵奇・艶笑特選読物25編
猫の怨霊……小宮山章吾
若い女の生胆をとる老婆……音羽喜代二

男を尻に敷き虐待した大補玉憂……花島青次
 吸血鬼は實際にいたほか……村松芳文
 貞操帯のはなし……久保寺正己
 獣婚・女と犬……千石仙太郎

全身に男の紋所を入墨したお玉……由良正太郎
 会員三百人の男色クラブ……谷田義郎
 魔の十三号室……小谷
 舌を齧みられた男……兵村利明

死体を溶かす……三鷹莊太郎
女に奪われた処女……中野大八
艶妖特集二月号……(二四〇円)
多色刷・かぎや店先……鈴木春言

写真版・肌の十字架………本誌特写
口絵・梅の木責め・絶望の断崖ほか………
特集・サディズムの種々相………
硬丁定・緊縛定・刺傷定・殺人淫樂定ほか………

死体に処女を捧げた娘の話……関森伸六
現代女性の交態心理……松井宏
刑罰人の縄の掛け方……小田利美
反面舞踏会（四畳半奥の下長）……佐東純也

王妃マユラの虐殺(インカ悲史)……梅村芳文
犬のオリの中の裸身の美女……萩須徳造
妊婦に異常な情欲を燃やす男……音羽喜代二

大に……小宮山章吾
創刊臨時特集号(売切れ)

毎月好評のうちに全国の読者のみなさまのお手許にまい
っておりますが、既刊号のお取り揃えはお早くどうぞ！



(36年度 二月号)

表紙・ホタン止めの長靴をはく女・シュリヒテル
色彩口絵・肌もあらわに・制服無残・ほか……
グラビア・なまめかしき縛女・全裸のいけに
え・板敷きの責め場・石と落ち葉と女・可
憐な制服乙女・ぐるぐる巻きの裸女・浣腸
される女・浣腸の責め苦・黒い眼鏡・長々
と縛られて・とらわれの姿態・椅子の悶姿
ムチが飛ぶ・ゴムひもしばり・鼻責めの表
情・禪姿うしろ手しばり・全裸ポーズほか
女性刑罰史絵巻……
海老責め無残・かきなわ・とりしめ・四寸
なわ・れんじやく縄・きりなわ・まいなわ
草行真のむねはり・捧責め……
モデル・村上ユキ
アブチツクな世界への招待……
お仕置きはこれから・男性願望の女・女装
する男・女装願望マゾヒストの自殺ほか……

(36年度 一月号)

異 常 性 風 俗 展 覧 会
 女 装 の 男 に 恋 す る 同 性 愛 女 性 ・ 女 子 同 性 愛
 ク ラ ブ ・ 女 形 ホ モ に 驚 く 判 事 ・ 同 性 愛 者 は
 烙 印 刑 ・ ユ ダ ヤ 人 の さ か さ づ り ・ 髪 フ ェ チ
 シ ズ ム ほ か …… ヒ ル シ ユ フ エ ル ト 性 科 学 博 物 館 所 蔵
 女 体 責 め 悦 虐 画 集 …… 田 上 恵 子
 ガ ラ ス の 幻 想 …… 田 上 恵 子
 水 責 め 苦 悶 図 …… 江 馬 美 久
 湯 気 赤 熱 責 め …… 小 田 利 美
 女 を 責 め る 5 態 …… 田 上 恵 子
 絵 物 語 ・ 山 小 屋 の い け に え …… 田 島 末 雄
 絵 物 語 ・ 皮 ハ ギ 小 屋 …… 三 村 次 郎
 写 真 物 語 ・ 深 夜 の 危 険 な シ ョ ー …… 中 沢 道 太 郎
 ▼ 画 報 風 俗 奇 譚 第 8 集
 (36 年 度 一 月 号) (一 八 〇 九 年)
 色 彩 写 真 ・ 女 体 羞 姿 ・ 縛 虐 二 重 奏 ・ ほ か ……
 女 体 責 め 絵 集 ・ ク サ リ 吊 り ・ 腹 を 踏 む ・ 襲 う
 へ び ・ ド ブ を 散 歩 ・ 物 干 し 場 の 責 め ・ 吊 り
 下 げ 女 ・ 針 の 床 ・ な ど 田 上 恵 子 ・ 江 馬 美 久
 小 田 利 美 の 凄 惨 傑 作 画 集
 グ ラ ビ ア ・ 盛 装 無 残 ・ 妖 美 の ベ ッ ド ・ 古 風 な
 花 ・ 腹 切 り 悶 悦 ・ 縄 と お ん な ・ ク モ し ば り
 支 那 服 の 縛 女 ・ テ ー ブ ル の 残 虐 ・ 股 し ば り
 縄 に も だ え る ・ 椅 子 し ば り ・ 嗜 虐 ふ た り プ
 レ イ ・ 手 と 足 を ぐ る ぐ る 縛 り ・ 乳 し ば り
 事 務 所 の 虐 待 ・ 禪 姿 の 男 ほ か ……
 打 10 の ア ・ ラ ・ カ ル ト
 尻 打 ち ・ 調 教 ・ き び し い 教 育 ・ 愛 と 苦 痛 ・
 禁 男 の 家 の 私 刑 ・ 子 供 の せ っ か ん ほ か ……
 ピ グ マ リ オン 4 態 ・ フ ラ ン ツ ・ バ イ ロ ス ・ ハ
 ン リ オ ッ ト ・ ハ イ ン リ ッ ヒ ・ ロ ブ ・ ほ か ……
 自 分 を 愛 す …… ヘ ー ゲ マ ン
 女 の 臀 部 フ ェ チ シ ズ ム …… オ ル ラ ン ト
 女 を い じ め る 5 景 …… 番 場 多 計 夫

(35年十二月号)

写真物語・消される女……三村次郎
 絵物語・縄とムチに魅入られた女……田木啓介
 絵物語・女の責めら巻……田島末吉
 女装マニア・愛されるよろこびかびや・かずひこ
▼画報風俗奇譚第7集
 (35年十一月号) (一八〇五)
 色刷口絵・海老責めの女・垣根しばり・竹に
 しばられた女・古風な縛女・ほか……
 女性責め女・7景・大の字吊りのムチ打ち・吊
 られる女・針地獄・まといつくベルト・片
 足吊り・棒しばり・ジェット・コースター
特集・伊藤晴雨傑作責め絵・責め写真集
 人弓・しほり責め・しりを焼く・ヒル責め
 女性責め写真集……伊藤晴雨
 絵物語・男をいじめる女たち……田上恵子
 絵物語・ビート・ゲーム……柏木雄二
 絵物語・電流責めの私刑……三村次郎
 絵物語・責められる女忍者……江崎清一郎
▼画報風俗奇譚第6集
 (35年十一月号) (一八〇六)
 多色口絵・石橋の上に・緊縛置き物・受縛絢
 爛の色彩緊縛写真……本誌特写
 責め絵・吊ってくすぐる・アリ責め・丸太流
 し・愛憎の果て・柱しばり・ほか……
 第1シ・グロビアの前で・うしろ手のポールは冷たい
 しおり戸犬・縛愁のひと・浴室の責めほかハダ
 カの女人・犬・縛愁のひと・浴室の責めほかハダ
 第2グラビア・はなやかな縛虐・法悦の時長椅
 流れて・露台の白魚・石と草の中で……
 第3子さかさ姿態・ほか……
 第3グラビア・華やかなるハリツケ・受縛の
 ハリツケ・基盤の上に・片手つり・残虐を
 運ぶ自動車・禪姿二人プレイ・ほか……
 画集・ソドムの額縁7景……雨妙院一太
 写真物語・恐怖のドライブ……志田悦郎
 アブチックな写真集……

第1 グ ラ ビ ア ・ 二 人 無 残 ・ あ る ポ ー ズ ほ か	第2 グ ラ ビ ア ・ 白 肌 の デ ュ エ ッ ト ほ か	第3 グ ラ ビ ア ・ 柱 し ば り ・ 異 虐 図 絵 ほ か	貴 め 絵 画 集 ・ 被 虐 の ロ ー プ ・ 生 き 埋 め ほ か	ア ブ チ ツ ク 絵 画 館 ・ コ ル セ ッ ト を す る 女 た ち	乳 房 を し ぼ る 女 た ち ほ か	浣 腸 さ れ る 女 た ち	男 を し た げ る 女 た ち	猛 獣 と 女	首 つ り の 彫 刻	人 獣 交 歡 の 野 外 彫 刻	乗 馬 す る 女 た ち	小 説 ・ 永 遠 の 美 と 若 さ の 泉	多 色 口 絵 ・ 池 畔 の 愉 悦	写 真 口 絵 ・ 陶 醉 す る 女 体 八 景	第1 グ ラ ビ ア ・ 鴨 居 づ り ・ 女 の 置 き 物 ・ 人 間	荷 物 ・ 脚 立 責 め ・ 静 か な る 悦 虐 ほ か	姿 ・ 脚 立 責 め ・ 椅 子 し ば り ・ 美 囚 六 態 ・ 白 い	第2 グ ラ ビ ア ・ 美 し き 人 柱 ・ ベ ッ ド の 残 虐	第3 グ ラ ビ ア ・ 暗 闇 の よ ろ こ び ・ 犬 に な れ	木 に 縛 ら れ て ・ 座 布 団 も 責 め 道 具 ・ さ か さ	海 老 づ り ・ 嗜 虐 を 待 つ ポ ー ズ ・ 女 体 の 微 妙	な ナ ゾ ・ な ま め か し き 余 情 ・ 冷 たい タ イ ル	海 外 残 虐 譚	人 間 ス テ ー キ	死 の 砂 漠 行	マ ゾ ヒ ス チ ツ ク 絵 画 館	乗 馬 服 の 女 た ち ・ マ ゾ ヒ ス ト の 描 いた 女	同 性 嗜 虐 ・ 自 虐 画 ・ ズ ボ ン を は いた 女 た ち	ア ブ ノ ー マ ル 秘 画 展	鞭 打 す る 人 々 ・ 残 酷 な る 刑 罰 ・ 奇 妙 な 連 中	惨 目 を 覆 う 殺 人 現 場	写 真 物 語 ・ 偏 奇 莊 奇 譚	絵 物 語 ・ 恋 の 一 念 ・ 蛇 と な る	絵 物 語 ・ 狂 恋 吉 弥 責 め	絵 物 語 ・ ギ ロ チ ン 台 の 美 女	▼ 画 報 風 俗 奇 譚 第1 集 (売 切 れ)
---	---	--	---	--	---	--------------------------------------	---	------------------	----------------------------	---	---------------------------------	--	--	---	--	--	--	---	---	---	---	---	-----------------------	----------------------------	-----------------------	--	--	---	---	---	---	--	---	--	--	---

(原本・宮内方秘藏) 乾・坤・全一冊

乾二十八丁・坤二十九丁よりなる、古代支那の房術書「医心方」の完訳版、秘戯の九法・十動の行・秘薬の処方など微妙な解説

目次

『乾之卷』

第一 第二 第三 第四 第五 第六 第七 第八 第九 第十 第十一 第十二 第十三 第十四 第十五 第十六 第十七 第十八 第十九 第二十 第二十一 第二十二 第二十三 第二十四 第二十五 第二十六 第二十七 第二十八 第二十九 第三十

至理之章 養陽之章 養陰之章 和志之章 臨御之章 五常之章 五微之章 五欲之章 五動之章 四至之章 九氣之章 九法之章 卅九之法 九勢之章 八損之章 七損之章 還精之章 施寫之章 治陽之章

『坤之卷』

第一 第二 第三 第四 第五 第六 第七 第八 第九 第十 第十一 第十二 第十三 第十四 第十五 第十六 第十七 第十八 第十九 第二十 第二十一 第二十二 第二十三 第二十四 第二十五 第二十六 第二十七 第二十八 第二十九 第三十

求子之章 好女之章 惡女之章 禁忌之章 斷鬼交之章 用藥石之章 玉莖小之章 玉門大之章 少女痛之章 長婦傷之章

丹波康頼著 原 一平訳
定価 280円 B6判 特製箱入

代理部ご案内

分譲写真が揃いました。あなたのコレクションにお加えください！

☆女囚緊縛ポーズ (略A6)



五枚一組 五〇〇円
江戸時代の刑罰資料をもとに女囚縛りを再現した哀歎嗜虐図

☆凄絶切腹六態 (略A8)



六枚一組 八〇〇円
豊満な腹部への嗜虐噴出する鮮血、女体悶悦の凄絶なる極致

☆禪姿二人プレイ (略B18)



三枚一組 三〇〇円
サド・マゾ・コンビの若く逞しき男性二人の迫真のプレイ！

☆全裸男性美決定版 (略B21)



三枚一組 三〇〇円
筋骨たくましい全裸の男、悪魔に魅入られた男の緊縛の美！

★吊り責め無残 (略A3)

三枚一組 三〇〇円
羞恥と悦虐にもたえる美女、全裸吊り責めの艶麗地獄図！

★華やかなる緊縛 (略A4)

三枚一組 三〇〇円
思わず息をのむ凄絶妖美、しかも絢爛たる緊縛女体の数々

★墓地の悦虐 (略A5)

三枚一組 三〇〇円
荒れ果てた人けな墓地に全裸の女が悦虐に身悶える陶醉

★野外縛り (略A7)

三枚一組 三〇〇円
森閑とした雑木林の中にくりひろげられた羞恥の緊縛女性

★全縛緊縛ポーズ (略A9)

三枚一組 三〇〇円
はじめて公開した全裸凄絶の女の妖しき悦虐姿態の決定版

★臀部責め (略A10)

三枚一組 三〇〇円
豊満な臀部への加虐のムチがとび、悶える肉に針が刺す

★水責め・湯責め (略A7)

三枚一組 三〇〇円
全裸女性をあくことなくバスルームに、古池に漬け責める

★本格鞭打プレイ (略A12)

三枚一組 三〇〇円
人間本能の嗜虐の極致！本誌のみがなし得た恐怖の迫真感

★禪男一人プレイ (略B19)

三枚一組 三〇〇円
まっ白い禪と緊縛の縄の対比そこにえも言われぬ魅力が！

★禪姿二人プレイ (略B20)

三枚一組 三〇〇円
大名屋敷の一室でくりひろげられた現代小姓の豪華な悦虐

★禪姿一人緊縛 (略B22)

三枚一組 三〇〇円
キリリと締めた六尺禪の男性を緊縛する珠玉の垂涎フット

★豊満なる緊縛女体 (略C6)

三枚一組 三〇〇円
超グラママーのはちきれんばかりの肉体に食い込む縄の陶醉

★全裸変形地獄図 (略D7)

三枚一組 三〇〇円
うごめく女体を密室で責め抜くサド・マニアの無残絵巻！

★悦虐の表情 (略X9)

三枚一組 三〇〇円
悦虐の極致をそのまま表情にとらえた無上の陶醉の美しさ

★眼帯の女 (略C8)

三枚一組 三〇〇円
不完全の美、片目をふさがれた女の魅惑、眼帯のもつ妖美

★皮ひも十文字 (略D6)

三枚一組 三〇〇円
裸女の首から乳房にかけてくいいる皮ヒモとビジョウ責め

★浣腸悦虐フット (略D10)

三枚一組 三〇〇円
もだえにもたえる浣腸の嗜虐はマニア垂涎待望の決定版！

★密室の呪縛 (略D6)

三枚一組 三〇〇円
呪われた女の宿命、のたうつ裸女にせまる悪魔の鋭い牙！

★裸女棒しばり (略C11)

三枚一組 三〇〇円
荒れけずりの棒が縄の痛さを増し、白肌に鮮血がにじむ！

★さるぐつわ艶姿 (略C9)

三枚一組 三〇〇円
無残にも呼吸をせきとめられた責め苦の中の妖艶の美態！

▼代理部へのご注文は、現金書留、小為替、あるいは振替をご利用になるのが、確実に、ご便利です。

☆海老責め地獄(略C7)



三枚一組 三〇〇円
死一步寸前のエビ責めに絶叫する決定的瞬間の貴重なポーズ

☆制服の乙女縛り(略C10)



三枚一組 三〇〇円
むしりとられたセーラー服の乙女が悶える緊縛の青春ポーズ

☆無残二人しばり(略D8)



三枚一組 三〇〇円
背中合わせの美女ふたり、縛られ投げ出された悶悦の極致!

☆血みどろのリンチ(略X8)



五枚一組 五〇〇円
しばられ、吊り下げられ、あぐくの果てに鋭利な白刃の狂宴

☆本格吊るし責め(略X10)

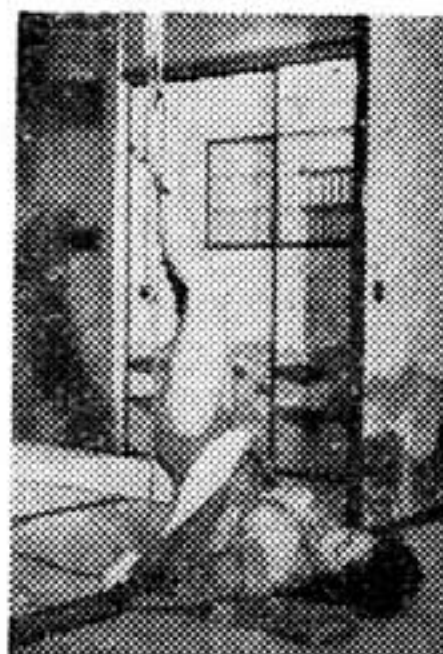


三枚一組 三〇〇円
妖美艶麗、まさに晴雨翁えがく本格的吊り責め絵をしのぐ!

本誌特選・好評のモデル緊縛分譲フォト

▼村上ユキ受縛特選フォト集

- 各三枚一組 三〇〇円
- ★全裸うしろ手縛り(略M1) 全裸決定版!
 - ★お灸灼熱地獄(略M2) 亜鼻叫喚の地獄図
 - ★本格吊り責め三態(略M3) 正調派の緊縛



▼西牧えり子純情緊縛フォト

- 各三枚一組 三〇〇円
- ★支那服の悦虐フォト(略N1) 乱れる肢態
 - ★いたぶられる姑娘(略N2) 哀艶で可憐!
 - ★乙女の祈り(略N3) 清純な制服の処女よ



▼西条さくら豊艶女体緊縛フォト

- 各三枚一組 三〇〇円
- ★乳房地獄責め(略S1) はちきれる乳房!
 - ★腹部への嗜虐(略S2) 豊満と妖美の責め
 - ★悶姿の祭壇(略S3) 悦虐グラマーの誕生



▼風早由美子妖美特選フォト

- 各三枚一組 三〇〇円
- ★樹間のニンフ(略H1) 野外の狂宴を彩る
 - ★嘆きのセーラー服(略H2) 無残な落花図
 - ★死のベルトの誘い(略H3) 肌を裂く鞭打





▼好評の本誌別冊増刊号！
本社在庫僅少につき、
ご注文はお早めに！

■画報風俗奇譚臨時増刊号
大型デラックス判の迫真力
と充実した内容の特別大冊
奉仕定価 二八〇円

■秘蔵版風俗画報第1集
全巻グラフィア百五十余ペー
ジの超豪華大冊の決定版！
限定版定価 五〇〇円

■秘蔵版風俗画報第2集
第1集につづき再び異常美
の世界をえぐる絢爛豪華版
奉仕定価 三〇〇円

読者原稿募集

▼創作 (四百字25枚以内)
S・M・Hなどの妖気と異常美
の世界をえぐる力作をどしどしお
送りください。

▼告白体験記 (四百字20枚以内)
あなたご自身、またはあなたの
まわりで秘められたアブの世界を
期待していただきます。

▼アブ・ニュース (四百字5枚)
本誌であらたにもうけた、ホモ
の窓、女装の部屋、サロン・マソ
キスチカは、たいへん好評を受け
連日、ご投稿をいただいております。
す。近々、サドの部屋、マゾの部
屋も誌上を飾る予定です。ふるっ
てみなさまのご投稿をお待ちして
います。

▼口絵・カット
本誌では読者のみなさまの描い
た一枚の絵、カットを期待してい
ます。風奇誌上を飾るうえからも
お送りください。

▼読後選評 (四百字3枚以内)
読者のみなさまの批評を歓迎し
ています。本誌の緊縛写真、小説、
口絵など、ご遠慮なくご忠告なら
びにご希望をお寄せください。

▼緊縛フォト・アイデア
本誌の専属モデルの特色を生か
してあなたの自身のアイデアをお寄
せください。

▼そのほか、読者の広場、読者サ
ロンの原稿もどしどしお送りくだ
さい。

(なお、投稿原稿は採否ともに返却いた
しません。しかし採用の場合は、規定の稿
料を差し上げます。)

編集集だより

★：今回は、かねて懸案だった「雪
責め」を敢行した。3月号に雪でも
あるまいと思ったのだが、東京とい
う地理的条件からいって、一月に雪
を撮影するというのが、せいっぱ
いのところである。

だが、現在まで、伊藤晴雨先生の
「雪責め」以外類を聞かないので、
じつのところ、自信はなかった。そ
れに雪山というのは、天候が不順で
もあるのだ、その不安もあった。

だが、とにかく撮影だけは、でき
た。正直、できたというだけのこ
とである。モデルもカメラマンも
記者も、からだにしみ渡る冷たさ
にふるえながら、何枚かをとるこ
とができた。出来不出来はご寛恕
ありたい。

★：本号から定価を十円あげた。
物価値上げに便案したわけではな
く、内容の質量ともによりよくす
るための処置である。ご了承ご支
援をお願いしたい。

月ぎめご購読の方法

風俗奇譚 (各送料とも)

一カ月 (二冊)	一五〇円
三カ月 (三冊)	四五〇円
六カ月 (六冊)	九〇〇円
一カ年 (十二冊)	一八〇〇円

画報・風俗奇譚 (各送料とも)

一カ月 (一冊)	一八〇円
三カ月 (三冊)	五四〇円
六カ月 (六冊)	一〇八〇円
一カ年 (十二冊)	二一八〇円

★本社直接ご注文の場合は、現金
書留か振替が確実ご便利です。

風俗奇譚 三月号

定価一五〇円

昭和三十六年二月二十日印刷
昭和三十六年三月一日発行

編集人 高倉 一

印刷所 刊行会印刷部

東京都千代田区神田神保町一の三

発行所 文献資料刊行会

振替東京 四二四九四番
電話東京(291)二四三〇番